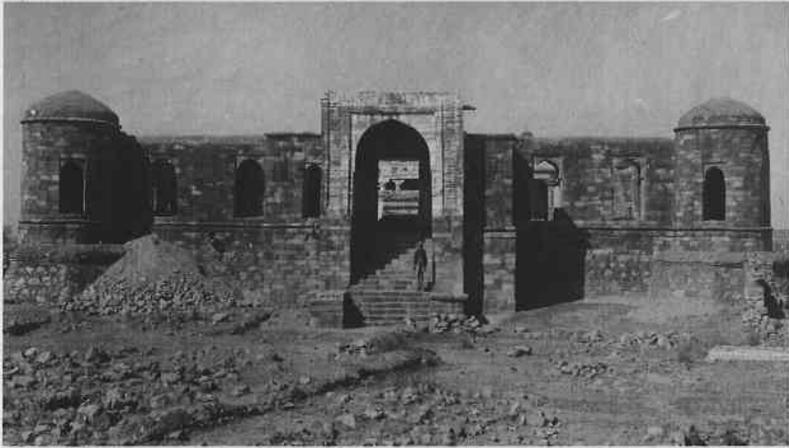


圖版 1. Sulṭān Ghārī の東門全景（東面）



(上) 圖版 2-a. Sulṭān Ghārī 全景 (東面)

(下) 圖版 2-b. Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish の墓 (南面)

デリーに現存する奴隸王朝 初期の墓について

荒 松 雄

目 次

序文——サルタナットの首都デリーとその遺跡の歴史的研究——

- I. まえがき
- II. Naṣir al-Din Maḥmūd の墓, 通稱 Sultān Ghāri について
- III. いわゆる Sultān Shams al-Din Iletmish の墓について
- IV. その他に墓について
- V. むすび, および若干の推理的私見について

序 文

——サルタナットの首都デリーとその遺跡の歴史的研究——

I

私をはじめデリーを訪れることができたのは1952年10月であつた。その年の6月の末から、ペナーレス=ヒンドゥー大學に留學していた私は、雨期あけの休暇を利用して、ラージャスターンの諸都市を廻る旅行を試みた。舊ラージプート諸王國都市を廻つたのち、私はグワリオルから、アーグラ・ファテプルシークリーを経てデリーに上つた。私はニューデリーに行かずに、経費の節約と旅の経験のために、オールドデリーの安宿に泊ることにした。その宿は、ム

ガル帝國以來の有名な大バーザールであるチャンドニー=チョークの西のはずれにあり、毎晩、眞夜中になつても巷の喧燥は止まなかつた。ニューデリーへは、私は、人力車とバスとを併用して行つたのだが、そのはるか南郊の、デリーにおけるムスリム支配の歴史的遺跡が集中しているクトゥブ地域やメローリー (Mehrauli) の部落へは、一日がかりで、バスを利用して行つた。トゥグルク朝初期の都城であつたトゥグルカーバード (Tughluqabad) の遺跡へは、その後に數十回も訪れる機会をもつに至つた私であるが、そのときは、デリー驛から汽車に乗り、さらにバスに乗りかえて行つたものである。時間を忘れて最終のバスを逃し、夕闇のなかを、トラックに頼みこんで最寄りの驛まで便乗させてもらい、やつと汽車で歸りついたことを、いまでもなつかしく想い出すことができる。そんな状態であつたから、第1回のデリー訪問の際には、ニューデリー南郊一帯の地にひろがる、13世紀から16世紀前半にかけての、いわゆる「デリー=サルタナット」時代の遺跡や建造物については、とくに有名で行き易いものをのぞけば、ほとんど見るができなかつたのであつた。

その後、ベナーレスでの約1年10カ月におよぶ留學生活の間、私はできる限りインドの各地を旅行することに努めた。その旅行の途中で、私は、ガンガ河流域から中央インド、さらに南インド地方のムスリム遺跡を相當數多く見て廻ることができた。1954年の夏に、思いがけなくも、私はニューデリーに移つて働きながら研究をつづける機会をもつことができた。妻子を4年近くも日本に残しておくことは心残りであつたが、それから1956年3月までの約2カ年近くを、私は、トゥグルク朝のスルターンの名をとつたフィーローズ=シャー通りに近い公務員宿舎で過すことになつたのである。現在の日本國大使館の建物も完成したのも、そのころのことであつた。

デリー地方、とくにニューデリーの南郊には、私が研究課題にしていたムスリム支配體制を北インドにつくりあげた支配者たちがのこした數多くの遺跡が散在していた。私は、暇さえあれば、これらの遺跡を訪ねて廻るようになつ

た。遠くにある遺跡へは、当時、私に親切にしてくれたニューデリー在留の人の
びとにおねがいして、その乗用車を利用させてもらった。たまたま1955年の冬
に、在印20年を越えるM氏が、所用でボンベイからニューデリーに1カ月ほど
來られた。M氏は、ヒンドゥー・ムスリム建築について相當の知識をもつてい
た。私は氏の自動車便乗の機会を得て、仕事のあい間を利用して遺跡の探訪に
努力した。M氏が歸つてからは、せまる歸國の日を前にして、私は、ほとんど
意地になつて、自轉車を乗り廻して、見残した遺跡めぐりに精を出した。現在
と異なり、當時は、遺跡のなかには、とても自動車では近づけないものがあり、
道路も今日のように整備されていなかったため、この自轉車による探訪は
全く役に立つた。しかし、そのころは、私は、これらの遺跡や建造物を、學問
的に研究の対象としようと考えていたわけではない。それらは、私が専攻して
いたサルタナット時代の歴史的遺産として重要であつた。そして遺跡は、私に
とつて、單なる廢墟や、場所や石塊ではなかつた。それらは、時間を逆轉させ
て、過古の歴史の舞台を私のなかによみがえらせてくれ、當時の権力とそれが
つくりあげていた支配の體制と、またその下に抑えられていた民衆までも私
に感じさせてくれる一種の媒體だつたのである。私は、生活の許すぎりぎりの
線までフィルムを買い求め、見て歩いた遺跡をカメラに収めることに努めた。
そのとき撮つた寫眞のなかには、その後まもなく崩壊したり、破壊されてしま
つた建造物の寫眞も含まれている。それらは、今では、きわめて貴重な資料と
なつたが、なかには、世界中で唯一の寫眞資料となつてしまつたかも知れない
と思われるものもあるのである。

私は1956年春に歸國したが、翌57年5月のある集會の席上で、私は、「ロデ
イー朝貴族の墓についての一考察」という小研究を口頭で發表した。(これは
“Notes on the Tombs of the Lodi Nobles in Delhi Area.” という題で、その英文の
要旨が「國際東方學者會議紀要」第2冊, pp.44—47 にでていますが、そのくわしい内容は
未發表である。) その内容は、建築史學や考古學的なものではなく、當時私が研

究していたサルタットの権力構造とアフガン人貴族の多数の墓の建立の事実との関連について、私の思いつきを述べたまでである。その日、私の発表のあとで、私は、助手時代の指導教官であつた山本達郎教授と私の論點を中心にデリーの遺跡について話しあつた。山本教授は、インド＝ムスリムの遺跡を自分で見て、文獻的にも關心をよせていたのであつた。

その後數カ月たつて、山本教授は、私に對して、デリーに現存するサルタナット時代の遺跡建造物の総合的な研究を中心課題として現地調査を行つてはという構想をもつてこられたのである。デリーではほとんど夢中になつて遺跡を歩き廻つていた私も、この提案にはいささか躊躇せざるを得なかつた。私自身は本來の研究テーマをもつていたし、考古學や建築史・美術史などには全くの素人であつた。デリーの遺跡に關しても、さきに述べたような關心と興味はもつてはいたが、上にあげたような専門分野における學問的な研究課題としては、切實な關心はもつていながつたからである。しかし、いろいろ考慮したあげく、結局、私は山本教授の現地調査實施の構想に賛成した。このことが、のちの調査團結成の、いわば發端になつたのである。そして、1959年の夏になつて、山本達郎教授を團長として、三枝朝四郎（寫眞技術）・大島太市（寫眞測量・測量）・月輪時房（考古學・測量）の諸氏に私を加えた「東京大學インド史跡調査團」（インドでは、Mission for Indian History & Archaeology, University of Tokyo の名稱を用いた。）ができたのである。當初は1回限りの現地調査を考えていたが、次第に計畫も問題點も擴大されるという結果になり、現地調査は、結局、1959—60年、1961—62年の兩度にわたり、それぞれ2、3カ月にわたつて行われたのである。（補足を旨とした第2次調査には齋藤菊太郎氏も短期間加わつた。）現地調査實施のための諸般の準備、現地作業や諸交渉、さらに歸國後の資料の整理などさまざまなことは、研究所をはじめ各方面の多くの人びとの助力と後援ではじめて可能となつたのであるが、それにしても、まるで想像もなかつた時間と精力とを必要とするものであつた。調査團の活動や、研究の目

的や方法、さらにその内容や問題点などについては、山本團長が、さまざまな機会に公けにし、私も、二、三の機会に口頭で発表したこともある。1962年6月初旬には、東京大学内で資料展示会をも開催した。主として月輪氏と私とが、数人の人びとの助力を得て行ってきた諸資料の整備も、現在ではほぼ一段落しようとしている。やがて今後における資料の活用と研究とのうえにたつて、報告書も編輯出版されるであろう。しかし、調査事業のあと始末にはなかなか難しい問題があり、諸般の事情で共同研究もさまざまな困難に直面してきた。また、研究にしても報告書の準備にしても、熱をいれれば入れるだけ、資料の不足や技術的難問に當面して、必ずしも当初の豫定どおりには進捗していない状況である。

このような遺跡建造物の総合的共同研究において、とくに歴史學的な問題點に關心をもっている私の場合、その研究の過程や成果は、限られた内容と課題と體裁とをもつ報告書では、いわば、その壓縮された結論の一端しか盛りこむ餘裕がないであろう。しかも、そうした歴史的研究の背後には、さまざまな原典史料を慎重に比較整理した上での込み入った考證と、従來の關連文獻や研究著書の諸説の紹介検討やその批判などの、相當に入りくんだ作業とが前提としてなされなければならないのである。また、それらの研究の結果は、單に遺跡や建造物についてのせまい分野での問題にとどまらず、よりひろい觀點に立つて、社會、政治、さらに文化のさまざまな問題との關連で、はじめて歴史學の正當な課題のなかに組み入れられるべきものなのである。そこで、調査活動のなかでも私が主に分擔したところの、遺跡の歴史的問題點の調査と研究とを主として、豫定される報告書にはほとんど包含する餘裕のない基礎的な整理的作業とそれにもとづく私自身の考察を順次に可能な限りでまとめ、山本團長はじめ調査團員の了解を得て、逐次その結果を發表することとした。このことは、のちに述べるように、いかなる視點からもせよ、この問題に關する將來の研究に必要な前提的、基礎的な問題點を整理することにもなり、また、私自身の

本來の課題である、インドにおけるムスリム支配體制とそのもとにおけるインド社會の研究のためにも興味ある資料を加えることになると思うのである。これらの論考は、できれば、時代の順を追いつつ、また建造物の種類に應じて発表したいと思つているが、資料整理の状況や、史料の蒐集、讀解の難しさ、および報告書出版の準備などと関連して、必ずしも一定の秩序のもとに行われるとは限らず、また発表の場所も異なることを、あらかじめ、記しておきたい。

Ⅱ

そこで、次には、私が本稿および續稿において扱う研究の内容および方法に關して、その範圍と限界とを述べておこうと思う。本稿にはじまる私の一連の論考は、13世紀のはじめから16世紀の前半にかけての、いわゆるデリー=サルタナットの支配する時代の、首都デリーに關する研究であり、またデリーおよびその周邊地域に現存する遺跡と建造物についての研究である。

政治的權力の中心的據點としてのいわゆる首都の研究は、歴史學の研究課題のなかでもきわめて興味ある問題をもつものである。デリー=サルタナットとそれにつづくムガル帝國の首都として、インドの政治的權力推移の歴史のなかで重要な役割を演じてきたデリーについても、多くの歴史的問題點が見出されるのである。

もともと、近代世界における一國の首都と異なり、この時代のサルタナットの「首都」の歴史的意味は、一體、どのようなものであつたか。それについては、いずれ稿を改めて述べるつもりであるが、ふつう、*dār al-mulk* (ダールル=ムルク)、*dār al-khukūmat* (ダールル=フクーマト) あるいは *pā-i takht* (パーエ=タハト) などといわれてきた當時の「首都」は、まさにその言葉がそれぞれ意味するように、政治的權力の最高の保持者たるスルターンの常駐する場所、すなわち、君主權の中心的所在地、「おひざもと」が、その主要な條件

であつたのである。しかし、現在でこそ、デリー州・デリー市・ニューデリーなどの行政的地位がはつきりと定められているが、13世紀初頭以来のサルタナットの時代には、Dihli あるいは Dilli (ディヒリーあるいはディッリー、以下本稿では単にデリーと呼ぶ) という地名は、地域的にはきわめてあいまいな範囲を指す固有名詞であつた。ある場合には、デリーは、スルターンの住む宮廷のある内城を中心とする城砦都市そのものを指し、ある場合には、その城砦を中心とする漠然とした勢力範囲一帯の地域をいい、また反対に、きわめて限られた区域のみを呼んだ場合もあるのである。しかも、首都デリーにおいては、サルタナット権力の中核であつたスルターンの常駐する宮廷と、それをとり囲む城砦、あるいはその城砦を中心とする都市そのものも、しばしば、移動したのであつた。それは、時には王朝の興亡により、また場合によつては、同一王朝内でも、スルターンの交替を機として移動した。極端な例としては、同じスルターンの場合でさえも、新たな城砦や都城が構築されたり、あるいは新築、増築、地域的移動が行われたのである。こうしてサルタナット時代を通じて首都デリーは、現在のデリーおよびニューデリーの諸地域を包含する地域にわたつて、ひろく各地に散在する形において存在してきたのである。こうした事実から、首都デリーは、しばしば、“Seven Cities of Delhi”, あるいは “Fifteen Cities of Delhi” などといわれてきた。このデリーにおける城砦と宮廷とを中心とする都市の變遷は、さまざまの史書をはじめとする文献や旅行記の類、あるいは下つて19世紀以降の案内記や研究書もしばしば言及するところである。しかし、それらに見られる敘述は、概して、きわめて杜撰であり、相互に矛盾することがあるばかりか、よく考察してみると遺跡の現状と全く合致しないものも少なくないのである。そこで私は、デリーの君主権力の據点である宮廷と城砦と、それを中心としたひろい範囲のいわゆる都市 (shahr) としてのデリーの變遷の歴史を、できる限り、明らかにしたいと思う。それには、同時代の文書史料と後代の諸文献および研究書と、現存遺跡の状況との両者を對比照合し

つつ考察していくことが必要なのである。もちろん、資料があまりにも缺けているために、正當な結論を導き出すことが難しい場合も多い。しかし、少くとも、諸資料の慎重な比較考證にもとづく研究によつて、これまでの諸著が示してきた相互の矛盾や、あるいは傳承のみをあまりに信賴しすぎてこれを歴史的事實と混同してきたような方法上の欠陥とは、批判的に正しく處理される餘地が大いにあるのである。

こうした首都デリーについての關心は、具體的には、當然、この地域内の諸種の遺跡と建造物についての個別的な關心と研究とを必要とするとはいうまでもない。しかも、デリーに現存するサルタナット時代の數多くの遺跡と建造物のうちで、その建立の年代、あるいは建造の由來などについて述べているところの、いわゆる歴史碑文 (historical inscriptions) をもつものは、その數がきわめて限られている。それにもかかわらず、そうした歴史碑文をもつ遺跡はもちろん、なんらの文獻の根據さえも見出せない建造物についても、これまで、さまざまな年代的比定と歴史的解釋とがなされてきたのである。そして、それらの多くは、方法的にみて、きわめて非科學的に扱われてきた傾向なしとしないのである。たとえば、「これは誰某の墓である」、あるいは、「これはいつの時代の建物である」といわれてきた場合、その「事實」を證明する根據は、多くの場合、調べてみるとなんら決定的な資料的理由あるいは研究にもとづくものではなく、單に漠然たる傳承や俗傳によることが多いのである。しかも、こうしたことは、20世紀に入つてからの考古學、建築史學の専門家のみならず、歴史學者の敘述や研究著作においてすらその例をいくらか指摘し得るところである。まさに、傳承や俗説が、ほとんど無方法的に歴史的事實としてそのまま採用されている場合が多いのである。もちろん、私は、ここで碑文や同時代の文獻のみが正しいというのではない。それらは、たとえ同時代の史料としても、慎重な考察を経てはじめて正當に扱われるべきものであることは言をまたない。また傳承や俗傳でも、一定の方法的處理を経たうえで、歴史的資

デリーに現存する奴隸王朝初期の墓について

料としてきわめて重要、有用である場合もしばしばでてくるであろうし、また一般に、傳承がもつなんらかの歴史的意義も十分認める必要もあろう。そこで、本稿にはじまる私の諸論考のなかでは、碑文・文獻史料をはじめ、傳承などの資料的取扱いには、きわめて慎重に對處したつもりである。このような場合に、私自身が現地において遺跡を自分の目で見得た経験は、これらの文獻資料の評価あるいは資料と遺跡そのものとの照合の場合に、決定的に有利であったことはいうまでもない。以下の諸論考のなかで、墓やモスク、水利施設をはじめ、諸種の建造物そのものについて個別的に考察されるものは、主として、このような基礎的研究を目的としたものである。しかしくりかえして述べておきたいことは、これらの個々の建造物についての整理考證的な考察は、それ自體においても意味をもち得るものであるが、同時にそれはサルタナットの首都の歴史的研究や、サルタナット時代の政治や社會あるいは文化史上の諸問題を解明するためのひとつの手がかりであるということである。そのことは同時に、同時代に屬する文書と史料がきわめて乏しいこの時代の研究の方法的困難が感じられている今日、現存する遺跡と建造物とがきわめて重要な研究資料としての價値と役割とをもち得るものであることを示すことにもほかならないのである。要するに、個々の遺跡や建造物に關する私の考證的研究のひとつの目的は、いわば、遺跡資料の「校訂」ともいうべき性質のものである。

しかし、上に私が述べてきた如き研究の内容と方法には、きわめて重要な問題點とそれを解明するための方法とが實は缺けているのである。それは、遺跡の構造および様式についての研究における問題點であり、それらの比較研究のためのさまざまな科學的方法である。それらの方法にもとづく研究によつて、建造物の年代の推定、確認を試みることはきわめて重要であり、またそれらの構造、様式の變化あるいは發展を、主として比較研究の方法を用いることによつて、精細にあとづけることもできる。このことが、技術の導入と發展とを中心にして、さまざまな歴史的問題につらなることはとくに重要な問題點であ

る。そして、こうした方法は、碑文・文獻・傳承などの資料が缺けている場合には、とくに、年代比定をはじめいろいろの問題解明の大きな決め手となるものであり、また、それらの諸資料を用いる研究とあわせて、年代比定や技術的な問題を正確なものとする最も重要な方法のひとつである。すなわち、この科學的方法は、前に述べた歴史的諸資料にもとづく歴史的方法と相互に補足し合うかたちで行われる必要があるのである。ただし、こうした様式・構造の研究は、いうまでもなく、比較研究が主となるものであり、そのためには、資料の蒐集と慎重なる配慮にもとづく整理とが絶対に不可欠である。

碑文・文獻にもとづく研究と、様式・構造などの技術的な問題點を中心とする研究方法とは、もちろん並行して行われる必要があるが、そのほかにも、遺跡・建造物を利用する歴史的研究には、もつと別な、ひろい視野も必要である。たとえば、遺跡の地域的分布とその關連とを精細に調べることは、首都デリーの歴史的問題を解明する大きな手がかりになる。また、同時代のさまざまな歴史的條件を慎重に考慮して、建造物の建設や補修の事情をうらづけることも、場合によつては可能なのである。それに、インドにおけるムスリム遺跡には、宗教と關連する建造物がきわめて多いのであり、インド固有の資材と建築の傳統的技術のうえに、新しい外來のムスリム文化と關係ある技術と様式とが入りこんできた影響がさまざまな成果を生んだものといえるから、その背後の歴史的條件はきわめて複雑なのである。そしてこのことは、逆にいえば、これらの歴史的條件の研究は、サルタナット時代の遺跡・建造物を考究する場合に、とくに重要な前提となるということを意味するものなのである。

しかし、本稿にはじまるデリーとその遺跡の研究においては、上に述べた方法のうちで、建造物の構造と様式に關する問題點の考察については、どうしても必要なほかはほとんどこれを省いている。このことは、もちろん、私がそれらの問題點や方法を輕視しているのではなく、逆に、軽々しくそれらを扱いたくないからである。調査團の現地調査でも、これらの方法は、實は調査の作業

の中心であつて、大島・月輪兩氏による測量作業、三枝氏を中心とする寫眞撮影、それに山本團長と月輪氏を主とする構造・様式の觀察などに重點がおかれたのである。(例えば、その作業の方法上の問題の一端については、本紀要第22冊に、「地上寫眞測量による建造物の測定」という報告が、大島太市氏により發表されている。)主として建造物の全般的現地探査と、その歴史的問題點の考察を分擔した私自身の研究も、主として山本團長と月輪氏による技術的諸問題に關する研究の成果に期待するところが多く、またそのような研究も、同時に、私の、いわば歴史的な研究と相補い、相互に他を補強する關係においてはじめて眞の成果を生じ得ると思うのである。従つて、ある場合には、私の研究が、これらの技術的な研究の結果と一致せず、疑問と矛盾とが生れることも當然あるであらう。また、技術的な面での様式・構造などの研究も、私が以下に試みる研究と考證の前提なしには、ほとんど不可能であることも自明の理なのである。従つて、ある意味では、私の研究は他の問題點や方法に立つ研究者の考察のための基盤づくりであると同時に、その人びとの技術的な研究の成果を得て、はじめて完全なものとなり得る性質のものなのである。ここに最初の稿を草するに當つて、以上の如き内容と方法上の問題點とその限界とについて、とくに述べておきたい所以である。

Ⅲ

最後に、私がこの研究において使用した文獻資料について一言述べておきたい。私がこのような研究を試みる氣になつたのも、その一つの理由は、私自身がデリーにおいて、遺跡建造物を現地へ赴いて觀察することができたからである。しかし、こうした現地での觀察の機會にいくら恵まれても、文獻資料が整わなければ、私の研究は、これまたほとんど不可能になる性質のものである。最初の4年に近いインド滞在の間に、私は、サルタナット時代の歴史の研究のために必要な基礎的な文獻資料の蒐集にかなり努力を傾けた。しかし、經濟的

に限度があつたし、遺跡關係の資料はきわめて乏しかつた。そこで東大の調査の機會を利用して、私はカルカッタ・パトナ・アリーガル・ニューデリー・ハイデラーバードなどの各地の文書館、圖書館および大學などで、これまで日本では全く見られなかつた原史料の寫本類や、すでに絶版で入手不可能な書物の複寫を行うことができた。また、デリー・ラクナウ・ハイデラーバード・ボンベイなどの舊市街のムスリム居住地區にある古書店を漁つた結果、ペルシア語やウルドゥー語の古書をはじめ、現在ではほとんど入手し難いと思われる稀覯本を相當の安値で購入できたのである。これには相當の時間と精力と、そしてなによりも神經を使つたが、おかげで複寫文書もふくめて、わが國において一應の研究に支障のない程度の文獻資料を揃えることができたことは、まことに幸わせというほかはない。

サルタナット時代の諸王朝の同時代の文獻資料の大部分は、宮廷や支配層に寄生していたいわゆる宮廷史家などを中心とする文筆家、あるいは教學にたずさわるもののこした文書で、主としてペルシア語で書かれた史書・年代記・詩文および宗教的文獻などの類である。一般的にいつて、これらの著者の作品は、それを歴史の研究の材料とする場合にきわめて慎重な取扱いと史料批判とが必要である。ロンドン大學の P. Hardy 氏が、最近、その著“Medieval Historians of India” (London, 1961) で指摘したように、従來、これらの文獻を用いて説をなした研究者は、これらの「史書」に對する方法、解釋などがきわめて非科學的であつたことは否めないところであらう。支配層に寄生し、その黨争の渦中にあつてたくみに自己の保身のために身を處してきたこれらの著者たちが、自らの利害關係に立つて、自己の榮達を支えてくれた支配層に都合のよい敘述をすすんで殘していることは、實は當然のことだつた。従つて、これらの「史書」の記述は、著者についての十分な考察とそれぞれの時代の政治的、社會的状況への正當な考慮を経たのちに、つねに批判的態度をもつた上で利用されるべきことはいままでもない。いまさらこういうことを記すのも、

實は、従來の研究、とくにインド人學者の研究があまりにも「非歴史的」でさえあることが目立つたからである。もつとも、宮廷史家による建造物についての敘述や、地名についての記述は、権力や状況によつてその内容を左右されることが比較的少ないといつていいので、この點では、以下の諸研究に際しても、他の研究分野や問題點に比べればかなり樂である。しかし、年代についての記述には、かなりあいまいな點や食いちがいがあり、また、これらを利用した後代の學者の考證も、概していえば、一般にルーズなところが多いのである。

文獻史料とならんで、遺跡・建造物の研究に際して、ときには文獻以上に大きな役割を果すものは、碑文である。これらの碑文は、現地の遺跡にそのまま残存しているものもあるが、なかには、現地からはなれて博物館に收められているものもある。サルタナット時代の歴史碑文には、石彫のものと、漆喰につくられたものがあるが、少數のナーガリー文字のものを除けば、クーフィー・ナスフ・トゥグラーなどの書體のアラビア文字で書かれたペルシア語碑文が壓倒的に多く、一部の少數のものがアラビア語である。これらの歴史碑文には後代の作のものがあり、必ずしも當該遺跡の當初の建立の際につくられたものとは限らないが、たとえ後代のものであつても、一定の考證の手づきを経たうえでは、きわめて高い資料的價値を有する場合も多いのである。

しかし、これらの碑文に記された内容はどうかというに、ヒンドゥーを主とする非ムスリム關係のさまざまな碑文とくらべてみると、ムスリム建造物に附せられた碑文は、その内容がイスラームの宗教と關連してきわめて形式的な言句が主體を占め、いわば歴史的内容にとぼしいといわざるを得ない。歴史碑文とはいつても、その大部分は、その建造物に關する建立者と年代、それも場合によつては、そのときの支配者であるスルタンの名前のみを擧げてすませているといつた具合である。そして、墓の場合でも、埋葬者の名さえ記されていないこともしばしばある。こうして、かなり長いようにみえる歴史碑文でも、

「歴史的」な個所はごくわずかで、あとは宗教的なきまり文句や讚美の言葉が綴られている方が、むしろふつうなのである。しかも、こうした歴史碑文が遺跡に残っていることは、一般的にいつてもむしろ例外であり、サルタナット時代の大多数の建造物は、このような碑文を具えていないのが通例なのである。もつとも、歴史碑文はなくとも、ふつうの文字碑文はある建造物が相当あるが、それらは、いうまでもなく、コラーンの章句の引用などに代表される、いわゆる宗教碑文であり、歴史的な事実に関係ないイスラーム教に特有の文章や文句がつかねられている。そして、これがもつとも簡単になつたものが、ふつう、「ディスク」といわれているところの圓形の文様の装飾碑文で、そのなかには、たとえば Allāh (アッラー) というようなものに代表されるような、簡単な語や短い文句が刻まれているのである。

このように、碑文は、きわめて限定的な内容をもつ資料としての価値しかもつていないが、いうまでもなく、直接、遺跡建造物に残存している資料で建物の建立、補修、再建などのときに作られた場合が多いものであるだけに、第一次的価値をもつのである。そして、これらの碑文資料は、上にあげたような内容の資料価値のみならず、その文體・書體、彫り方や素材など、さまざまな点から、年代比定はもちろん、他の歴史的諸問題を解明する大きな手がかりとなり得るものであることもいうまでもあるまい。以下の私の研究においても、歴史碑文はきわめて重要な資料的役割をもつのである。さいわいにして、19世紀中葉に Saiyid Aḥmad Khān (以下ふつう用いられる Syed Ahmad Khan と記す) が、歴史碑文のいくつかを紹介して以来、20世紀に入つて、Archaeological Survey of India (インド政府考古調査局) による “Epigraphia Indo-Moslemica” の刊行によつて、サルタナット時代の建造物に残つていた歴史碑文は、その相当数が出版紹介されたのである。しかし、そのあるものは最近の現場観察では、出版紹介當時にくらべてさらに剝落し、あるいは全く消滅してしまつているものもあるので、重要なものについては、タクプライターによる碑文原

文の寫しを載せておきたいと思つている。

ところで、19世紀に入つてからは、デリーの遺跡に關しても、旅行記・案内記をはじめとして、報告書や研究書が次々と刊行されるようになった。その著者は、主としてイギリス人およびインド人である場合が多い。それらの著書は、いずれも、年代に應じてそれぞれに興味のある記述や考察を行つていて、本稿およびそれにつづく私の研究のためにきわめて重要な資料となるものである。とくに、1910年代に着手されたインド考古調査局によるデリー周邊諸遺跡の網羅的な調査にもとづく4冊の報告書は、私の研究の座右に缺かせぬ資料として役に立つたことは、のちに述べるとおりである。

これらの、いわば19世紀以降の諸著作のなかで、デリーの遺跡・建造物について、はじめてインド人一般にその重要なものを紹介したものは、19世紀中葉にウルドゥー語で書かれた“Āthār al-Ṣanādīd”というデリー遺跡の案内記である。この書物は、きわめて興味あるペン畫法による挿畫をも添えた著作で、ムスリムの史書をひろく利用しているばかりでなく、19世紀の中ごろまでにデリー地域に残つていた建造物についての傳承や俗説とを基礎にして述べられているだけに、その資料的意義は、きわめて高いものがある。ただし、この Ahmad Khan の著書は、その個々の建造物の歴史的背景の敘述に附して、必ずしもその文獻上、資料的根據を明らかにしてはいないので、これを歴史的資料として取扱う場合には、相當慎重な注意が必要である。

この Ahmad Khan によるデリーの遺跡の紹介が、主として史書と傳承にもとづく歴史的背景の解説に重きをおいているのに對して、現存する建造物の觀察を主として、これを歴史的資料に結びつけて、建造物をとりあげたのは、19世紀後半のインドの考古學の育成をはじめて手がけた A. Cunningham である。そしてその後、インド政府の考古調査局は、さまざまな報告書を刊行して、デリーの遺跡の調査と保存とを試みてきた。しかしながら、これらの A.

S. I. 刊行の諸報告書の内容も、また、歴史的資料のとり扱い方において、必ずしも厳密であるとはいえない点がかなりあるのである。そして、このことは、19世紀後半以降、さまざまな立場にあるイギリス人やインド人によつて刊行されたデリーに關する旅行記や案内記にも共通していえるところである。しかも、こうした缺點は、實は20世紀に入つてから、歴史學者によつて書かれた遺跡・建造物に關する敘述においてさえ見られるのである。著名な學者や、すぐれた歴史書を著わした歴史家の敘述にしても、デリーの遺跡と建造物の歴史的背景を述べている部分に關する限り、私にはきわめて不満足に感じられる個所が決して少なくはないのである。それらについては、以下の私の論考においても、問題に應じて、ふれてゆくつもりである。従つて、本稿にはじまる私の研究と考察とは、デリーの遺跡や建造物についての19世紀以降の著書の記述や研究に關する考察と研究の歴史をあとづける意味をももつものである。これまで、デリーの遺跡と建造物に關して數多くある文獻を適當にまとめて、その觀察と紹介や研究の概要を傳え、あるいは批判的に検討した研究は、ほとんどなかった。ニューデリー周邊地域の、最近數年間の急激な變化と發展にともなう遺跡の破損や觀察條件の悪化の事情は、おそらく今後の総合的な觀察と調査とを不可能にするかも知れない。従つて、私は、現地調査が行われたのを機會に、以上述べてきた問題点を、本稿およびそれにつづく研究によつて明らかにしていきたいと考えているのである。

1. ま え が き

本稿で私がとりあげる遺跡・建造物は、デリー=サルタナットの最初の王朝である、いわゆる「奴隸王朝」(Khāndān-i Ghulāmān, the Slave Dynasty)の初

期に造られたといわれているいくつかの墓のうち、デリーおよびその周辺地域に現存するものである⁽¹⁾。ここで奴隸王朝初期というのは、Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish (シャムスッディーン=イレトウミシュ)⁽²⁾の統治の終りまでの時期をほぼ意味するものである。この時期の墓のうち、いわゆるムスリム聖者の墓やそのダルガー (廟, dargāh) についていえば、デリーのみならずインド全體からいつてもつとも重要なダルガーのひとつである Shaikh Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī (シャイフ=クトゥブッディーン=バハティヤール=カーキー) の墓を中心とする通稱 Quṭb Sāhib (クトゥブ=サーヘブ、日本流にいいかえれば、「おクトゥブさま」とでも呼ぼうか) があり、またそのほかにもかなりの数のスーフィーの聖者の墓とされる遺跡があるのである。しかし、すでに序文にも述べておいたとおり、ムスリム聖者の墓やダルガーについては別にまとめて考察する考えをもっているため、本稿および続稿では、私は當分のあいだ、それらの遺跡については言及しないことにする。

そこでまず、本稿でとりあげる墓を列挙してみよう。ただし、生没年代や墓の建立の年月はもちろん、なかにはその人物の名も、また實在したかどうかの眞偽さえ疑わしいものもある。⁽³⁾

1. Nāṣir al-Dīn Maḥmūd (ナーシルッディーン・マハムード) の墓
2. Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish の墓
3. Sulṭān Shams al-Dīn の甥といわれる 'Alā' al-Dīn (アラウッディーン) の墓
4. Sulṭān Shams al-Dīn の息子のひとりの墓

すなわち、数少いこれらの墓は、いずれも、奴隸王朝の支配體制を確立した著名なスルターンと、その親族の墓なのである。ところで、以上にあげた四つの墓のうち、(3)と(4)、すなわち Iletmish の甥と子の墓というのは、實は、イギリス支配下のインド政府の考古調査局が、1916年から1922年にわたって刊行した、デリーのヒンドゥーおよびムスリム諸遺跡についてのリストとその詳細

な調査報告書にのみ報告されているものである⁽⁴⁾。私自身、1961年末にこのふたつの建造物を自ら見たし、また寫眞も撮つたが⁽⁵⁾、その墓の年代の比定についても、埋葬されているという人物に關しても、正當な根據は、漠然たる傳承以外、いかなる點についても全く見出すことができなかつた。様式と構造などの上から見れば、現存するこのふたつの墓の場合、前者(3)は、トゥグルク朝およびロディー朝時代のものと思われる諸要素をもっているそれぞれふたつの別個の建造物を結合した特異な建物の一部を占めている墓であり、また、後者に至つては、どうみてもムガル時代になつてからの作としか思われぬ、大理石の小型の墓石だけが残つているにすぎないものである。従つて、本稿で主要な考察の對象となるのは、以上のふたつの墓を除いたところの、上に記した(1)および(2)のふたつの墓である。そして、そのふたつの墓とは、奴隸王朝の最初のスルターンとその子の墓にほかならないのである。

デリー=サルタナットの、いわゆる宮廷史家たちが残した歴史書をはじめ、當時の文獻史料には、墓をはじめとして、一般に建造物についての記述は、きわめて少ない。たとえば、本稿で述べる *Sultān Shams al-Dīn* にしろ、あるいは別稿でとりあげる *Sultān Ghiyāth al-Dīn Balban* (ギャースッディーン=バルバン) にしても、このふたりのスルターンはサルタナット初期の重要な支配者であり、同時代の史書はもちろん、のちの時代の文獻も、彼らの支配とその治世のできごとについては、いずれもくわしく記しているのである。それにもかかわらず、彼らの埋葬地や、墓などについての記録は、ほとんどあつてなきがごとしといつていいほどなのである。そればかりか、これらの文書の著者は、スルターンが建てることを命じた建物や、あるいは彼らの支配の時代に造られた重要な建造物などについてさえ、ほとんどその筆を用いていない。このことは、實は、ムスリムの世界觀をはじめ、歴史敘述や文獻著作の内容體裁などの特異な性格や、彼らの墓や建造物に對する考え方の問題などとも關連することなのである。たとえば、奴隸王朝の全時代を通じて、スルターンの墓に

ついて、同時代の文献が言及しているのは、ただの一行、のちに私も引用するところの、Minhāj al-Dīn (ミンハージュッディーン) の Ṭabaqāt-i Nāsiri (タバカーテ=ナースイリー) にみえる Iletmish の墓についての記述のみにすぎない。しかも、その記述たるや、たまたま、ある事件について述べるのに際して、そのおこつた場所を示すために偶然ふれられたにすぎない性質のものなのである。また、スルターンの埋葬についてふれているのは、Balban の場合のみである。それもトゥグルク朝後期に、Tārikh-i Firūz Shāhī (ターリー-ヘ=フィーローズ=シャーヒー) を著した Ziyā al-Dīn Baranī (ズィヤーウッディーン=バラニー) が記した簡単な記述のみであり、これも、同時代の著作ではなく、約1世紀もたつてのちの文献なのである。

このように、文献史料にもとづく研究は、その史料そのものの制約からきわめて限られた範囲でしかなされ得ないのが一般である。ただ、トゥグルク朝の後期に、スルターンであつた Firūz Shāh (フィーローズ=シャー) が自ら著したといわれている Futūhāt-i Firūz Shāhī (フトウハーテ=フィーローズ=シャーヒー) とよばれる文献は、むしろ例外であり、建物の構築や再建、補修などについての記述が数ページにわたつてみられ、そのために、のちの遺跡や建物の調査研究に際して、きわめて貴重な手がかりを與えてくれるのである。もつとも、建築に大きな熱意を示したといわれるこのスルターン自らの著作とされているこの著書の記述も、ところどころ、きわめて疑わしい個所があり、そのために、かえつて19世紀以降の考察や研究にさまざまな疑問を生じさせる原因となつてきたことは、のちに私が本稿で述べるところである。また、ときどき記憶違いをそのまま記録したり、また滑稽な誤りをおかしたり、あるいはかなり誇張した表現を用いたりしながらも、デリーについてのさまざまな貴重な記録を残してくれたアラブの旅人 Ibn Baṭṭūṭa (イブン=バトゥータ) も、奴隸王朝の墓に關する限りは、それほど親切ではなく、數人の聖者の墓廟を除けば、あとは、Iletmish の娘で、のちに女性でありながらもスルターンとなつた

Rāziyah (ラズィヤ) と、さきにもふれた Sultān Balban の墓とに言及しているのみである。

さてそれでは、ふつうは、文獻よりもより一層の資料的價値が高いとされている同時代の碑文についてはどうであろうか。この點についても、残念ながら、奴隸王朝のスルターンスルターンの墓に關して、現在までに見出されている碑文は、ただの一片一行だにないのである。しかし、その王族のひとりについては、本稿の問題點からしてまことに貴重な碑文がただの一點だけ残っている。それは、さきに(2)に擧げたところの、Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓の入口である東門表面に現存している、いわゆる歴史碑文である。この碑文の重要性については、のちに述べるように、きわめて大きいものがあるのであるが、これを除けば、聖者の墓を別として、奴隸王朝の墓に關する限り、後代につくられた歴史碑文さえひとつもないのである。そして歴史碑文以外の碑文、すなわちコーランの章句の斷片を記したいわゆるコーラン碑文 (Quranic inscriptions) をはじめとするその他の宗教的碑文にしても、奴隸王朝全期を通じての墓のうちでそれが現存するのは、本稿の中心となるふたつの墓(1)と(2)にあるものと、年代的に果してこの時代のものかどうかはきわめて怪しいところの(3)の關連建物に残っているところの、明らかに後代のものと思われる碑文だけなのである。

Ⅱ. Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓、通稱 Sultān Ghārī について

1. はじめに

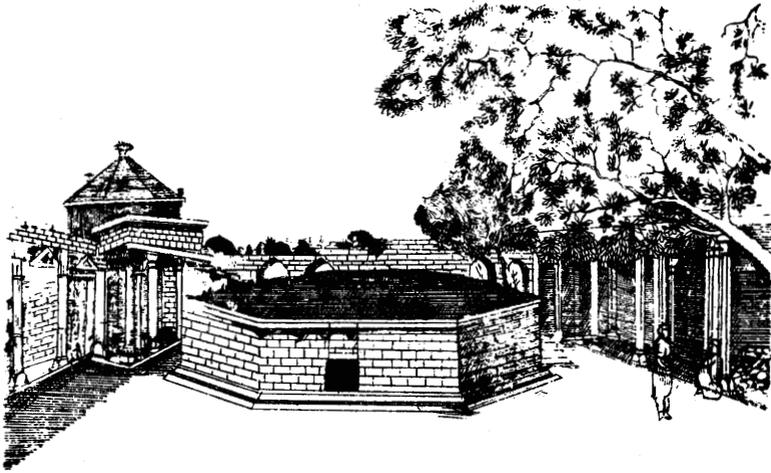
Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓、通稱 Sultān Ghārī (スルターン=ガーリー) とよばれる建造物は、ニューデリーの南南西の方向、Quṭb Minār (クトゥブ=ミ

デリーに現存する奴隷王朝初期の墓について

ーナル) や、Qūwat al-Islām Masjid (クワットウル=イスラーム=マスジッド)、通稱クトゥブ=モスクを中心とする、いわゆるクトゥブ地域のほぼ西方にある。すなわち、クトゥブ地域から Gurgaon (グルガオン)に通じる公道を南下し、Mehrauli (メヘローリー) 部落からくる道との合流点を少し過ぎたところで右折すると、いわゆる Cantonment (キャントンメント) 地区に通じる舗装された道路がほぼ西北西に走る。その道に沿う Masudpur (マソードプル) と Mahpalpur (マハパールプル) の兩部落との中間のあたりに、公道から約500メートルほど南に、車の出入に便利のように数年前に小道が作られた。その小道のほづれのところに、この遺跡はある。この附近一帯の廢墟は、20世紀のはじめには、現存する遺跡の北西北方約1.8キロメートルほどにある小村落 Malikpur Kohi (マリクプル=コーイー) に屬していたらしい。⁽⁶⁾

現在では、この墓を中心とする廢墟一帯の地域を Sultan Ghari と呼んでいるようだが、その附近には人家は一軒もない。しかし、おそらくムガル末期のものと思われる小聚落が、完全なる廢墟と化して、墓のすぐ北方に接して、昔日の有様をしのばせている。問題の墓のほかには、次稿で述べる奴隷王朝中期のふたりのスルターンの墓のうちの一つが、後代に再建されたドームを今日なお完全に残したまま、すぐ南方に立っている。また約70mほど東方には、モスクの遺構があり、これらはいずれもトゥグルク朝後期の建物と考えられる。このうち、モスクの方は、1955—56年、1959—60年に私が見たときは、主室の部分はかなり原型を保っていたのであるが、1961年夏の地震のために、ついにその屋根は完全に崩壊してしまった。⁽⁷⁾ 附近に残っている古井戸もかなり深く、石を投げると底にいくらか水のあることがわかるが、もちろん全く用をなさない。⁽⁸⁾ 要するに、附近一帯は完全なる廢墟となつてしまつている。ただし、ここ數年來、デリー観光の客が、ごく少數、ときどき見物に足をのぼすらしい。

この墓については、われわれの調査團も、主要な調査對象のなかには含めなかつたので、寫眞撮影以外には、くわしい調査はしていない。⁽⁹⁾ その一つの理由



نقشه درگاه حضرت سلطان غازی

插图 1. Sultān Ghārī 内庭 (Ahmad Khan (1904年刊本), 挿畫)

は、この墓を中心とする遺跡については、1940年代にすでに報告論文が出版されていたからでもある。それは、S. A. A. Naqvi による “Sultān Ghārī, Delhi” と題する一論文であつて、これまでの諸研究のなかでは、唯一の詳細なものである。

この建造物の特徴をきわめて簡単に記すと、ほぼ次のようになるだろう。(東面全景は巻頭の圖版を参照) すなわち、この墓は、断面がほぼ低三角形に近いドームをもつた小塔をそれぞれ四隅にもつところの、切石積の四壁に囲まれた建物で、その東側には、階段を上つて内側の内庭に入ることのできる四角の門がある。西側の部分には、列柱をもつ廻廊を形づくり、その中央部の小室は、西壁中央にミヒラーブをもっている。この中央小室も東門も、やはり低ドームでおおわれている。内庭の中央にある墓室の屋根にあたる突出部は八角形で、實際の墓室はその下、つまり地下にある。床面からの突出部の壁は大理石の切石

積であるが、頂部の平たい部分はモルタルでかためられているが、ここには、東門から内庭に入ったところで、東側から、赤砂岩と大理石交互の切石を用いた7歩の階段で上れるようになっている。

墓室は八角形で、ヒンドゥー様式の柱で支えられており西壁中央にはニッチが切られている。墓は全部で4基、ひとつは全く小さいが、他はかなり大きい。いずれも石灰で白く塗られたままで、おそらくは、碎石とモルタルとでできているのであろう。なおこれらの墓棺については、本章の末節でふれる。

2. 東門の歴史碑文について

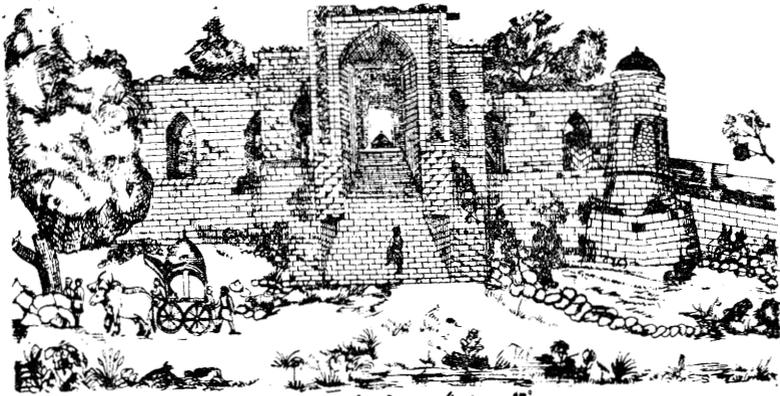
すでに第I章で述べておいたように、この墓の建立の事情について言及している文献は、同時代のものはもちろん、サルタナット時代からムガル中期に至るまで、ただの一書も見出すことができない。それにもかかわらず、この墓には、その建立の歴史について決定的な記述を含む重要な手がかりが、この建造物自体に残されていたのである。すなわち、東門の東面外側外郭部を形成している大理石の切石の上に、向つて右の部分の右下からはじまつて上方に向い、中央の水平部を右から左に走り、さらに向つて左の部分下方を下る、ぎつしりと彫りこまれたナスフ體の碑文がそれなのである（巻頭圖版1参照）。

この歴史碑文をはじめで紹介したのは、Syed Ahmad Khan であろうと思われる。私蔵の初稿本（1895年刊本）では、“Maqbarah-i Ḥaẓrat Sulṭān Ghāzi” すなわち、「聖スルターン＝ガーズィーの墓」という見出しでこの墓を挿書つきで紹介しているが、それにつづいて、項目と見出しとを改めて、“Darwāzah-i Dargāh-i Sulṭān Ghāzi” (The doorway of the shrine of Sulṭān Ghāzi) として、東門入口を別に紹介しているのであるが、そのなかで上にあげた歴史碑文⁽⁹⁾を載せている。しかしその改定稿本では、のちに述べるように、この墓についての記述内容もずっと正確なものに變つており、東門もその碑文も別項目として離れて記されてはいないのである。また、その見出しからも“ḥaẓrat”

の尊稱が消えて、單に“Maqbarah-i Sultān Ghāri”とし、“ghāzi”を“ghārī”に訂正している。私藏初稿刊本では、このアラビア語碑文の全文を寫しながら、しかもその碑文がその年次を 629 A. H. 年と數字でなく言葉ではつきりと記しているのに、彼は、本文記述中には建立の年を 720 A. H. 年としている。これは誤りにしてはあまりにも違いすぎており、かつ非常識で、たとえ彼が碑文の内容を正しく理解できなかつたとしてもおかしすぎる。(おそらくは、印刷に際しての寫字のあやまりであろうか。) この年次は、改訂稿本では、もちろん正しくなっている。

J. Horovitz が1909-10年度の *Epigraphia Indo-Moslemica* に載せた「インドにおける既刊モハメダン碑文目録」によると、彼はこの碑文については、Ahmad Khan のほかに、Edward Thomasと Carr Stephen の名とを記している。⁽¹⁴⁾しかし、この三人のうち、Carr Stephen は碑文の原文を引用しているわけではないし、その翻譯も大體の内容をのせているに過ぎない。Edward Thomas の二論文は、註に記しておいたように、内容が同じものだが、いずれも碑文の原文をのせている。ただし、翻譯はない。この Horovitz のあげたもののほかに、A. Cunningham は、インド考古調査局 (A. S. I.) の初期の報告書のうち、1862—63年度 (Vol. I), および1882—83年度 (Vol. XX) の両方のレポートのなかで、Sultān Ghāri に簡単にふれている。そのうち、前者においては、Mahipālpur の村落についての記述の註において附記されているにすぎず、碑文には言及していないが、後者のレポートでも、碑文中の *Ilet-mish* と Nāsir al-Dīn Maḥmūd の稱號にのみふれているだけである。またこの兩報告が發表された間に、A. Cunningham にしばしば異論をとなえた J. D. Beglar もこれにふれているが、碑文には言及していない。⁽¹⁶⁾

さきあげた J. Horovitz の碑文目録が發表されたのちの時期になつて、この問題の歴史碑文は、さらに四人の人名によつてその全文が轉寫され、また翻譯されている。これを時代順に述べると、1) J. Horovitz (1914) ; 2)



قبرستان درگاه سلطان محمود غوری غازی

挿圖 2. Sultan Ghari 東面全景 (Ahmad Khan (1904年刊本) 挿畫)

Bashir al-Din Ahmad, Vol. III. ⁽¹⁸⁾ (1919) ; Delhi Monuments List Vol. IV. ⁽¹⁹⁾ (1922) ; S. A. A. Naqvi ⁽²⁰⁾ (1947) がそれである。ただし、このうち、Bashir al-Din の書物はウルドゥー語刊本であるが、引用はアラビア語原文のみで、ウルドゥー語訳はのせられていない。

この歴史碑文は、現在、その一部が剝落してしまっている。上部水平部分の横に並べられた石の一部で、向って右側の、水平部分全体の約3分の1にあたる部分がそれである。ところで *Āthār al-Ṣanādīd* の挿畫をみると、初稿・改稿本のいずれもこの上部水平部分の約5分の3ぐらいが缺けているように描かれ、Bashir al-Din の書物の挿畫も同じである。これについては、さまざまな可能性が考えられるが、⁽²¹⁾ デッサンの誤りと、ここでは一應判断しておこう。この部分は、Ahmad Khan の時代にすでに剝落していた可能性が⁽²¹⁾ つよいが、上述の四人のうち、Bashiruddin をのぞく三人は、いずれも、他の *Iletmiḡh* 時代の歴史碑文にみえる彼の稱號を参照したうえでこの碑文の缺けた部分を推定して補っている (以下の碑文原文につづいてのせたカッコ内の部分がそれである)。⁽²²⁾ これを最初に試みたのは、Horovitz であり、他の二人もそれに従ったものと

考えられる。私が1959—60年、1961—62年の兩年度にわたつて現地でもみ限りでは、右の諸先學が記述している以上の破損や剝落は認められなかつた。のちに寫眞について調べてみた結果もそれを裏書きした。そこで、以上にあげた諸先學の記述とくに、J. Horovitz, A. Naqvi 兩氏のアラビア語原文轉寫と翻譯とを基礎としつつ、まず問題の碑文の原文を載せておきたい。⁽²³⁾

امر ببنا هذه البقعة المباركة السلطان المعظم شاهنشاه الاعظم مالك رقاب الامم
 ظل الله في العالم زو الامان لاها - - لا ا - - لم سلطان السلاطين شمس
 الدنيا و الدين المخصوص بعناية رب العالمين ابي المنظر ايلتمش السلطان ناصر
 امير المؤمنين خلد الله ملكة لروضة ملك ملوك الشرق ابي الفتح محمود تعدة الله
 بعفرانه واسكنه بحبوبة جنازة في شهر سنة تسع و عشرين و ستائة
 [(1) لاهل الايمان وارث ملك سليمان صاحب الخاتم في ملك العالم]

このアラビア語碑文の英譯は、上掲兩氏の翻譯によるとほぼ次の如く英譯できる。括弧内は、上掲剝落部分(1)の譯文である。

“This blessed building was ordered to be erected by the great Sulṭān, the most exalted Shāhanshāh, the Lord of the necks of the people, the shadow of God in the world, the bestower of safety of the [believers, the heir of the kingdom of Sulaimān, the master of the seal in the kingdom of the] world, the Sulṭān of Sulṭāns, Shams al-Duniyā wa al-Dīn, who is specially favoured by the Lord of the worlds, Abū al-Muzaffar Iletmish al-Sulṭān, the Helper of the Amīr of the Faithful—may God perpetuate his rule—for a mausoleum for the Malik of the Maliks of the East, Abu al-Faṭḥ Maḥmūd—may God forgive him with his indulgence and make him dwell in the centre of the paradise—in the months of the year six hundred and twenty nine.”

さて、この歴史碑文は、それが存在する場所、資材、さらにその書體を、上

に掲げた碑文内容とあわせて考えてみると、まず、この建造物が建てられたと同じ時期に作られたものと考えていいであろう。とすれば、この碑文は、この建造物が、奴隸王朝のスルターン、Shams al-Dīn Iletmish の命令によつて、その子 Abū al-Faḥḥ Maḥmūd すなわち Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓として、629 A. H. 年に建てられたものであることを示す重要な資料である。同時代の文献はもちろん、サルタナット時代を通じて、いかなる文献にも記しのこされなかつたこの Iletmish の長子の墓は、この唯一の歴史碑文がまさにこの建物自體に残存していたがために、埋葬されているその主人公とその建立の歴史とを今日まで伝えることができたわけである。

なお、この歴史碑文のほかにも、この建造物には、その東門の入口の内部の一部と、西面廻廊の中央ミヒラーブの周辺部に、コラーンの章句を主體とする碑文がある。サルタナット時代の墓についてきわめて詳細な構造・様式研究を企てたドイツ人學者 Friedrich Wetzel は、この碑文を歴史碑文と考えたらしい。⁽²⁴⁾ それらのなかには何ら歴史的な手がかりを示すものはひとつもない。⁽²⁵⁾ しかし、そのナスフおよびクーフィーの書體も、クトゥブ地域の諸遺跡のさまざまな碑文と比べて観察してみると、まさに奴隸王朝時代のものであることは明瞭である。

3. 文献史料についての問題點

Sultān Shams al-Dīn の子の Nāṣir al-Dīn Maḥmūd には、この人物のほかにも同じく彼の子供でのちにスルターンになつた同名の人物もいるが、ここで問題にしている Maḥmūd については、同時代の史書 Ṭabaqāt-i Nāṣiri に、まとまつた記載がみえている。それによると、彼は Sultān Shams al-Dīn の子供であり、Hānsī (ハーンスイー) および Awadh (アワド、のちの Oudh) の muqta (ムクタ) となつたのち、Lakhnawati (ラクナワティー、現在のベンガル地方の一部) にその勢力をおいてデリーの支配からほとんど獨立した權力を行使

していたところの Shiyāth al-Dīn 'Iwaz (ギャースッディーン=イワズ) を破つて殺し、それ以來 Lakhnawati 方面の統治の任に當つていた人物であることがわかる。⁽²⁶⁾ Ṭabaqāt-i Nāsirī は、彼が 626 A. H. 年まで Lakhnawati におり、その年に同地で死んだことを傳えている。⁽²⁷⁾ しかし、この同時代の宮廷史家が、Maḥmūd の死後の埋葬や墓について全く沈黙していることはさきにも述べたとおりである。後代の諸史書も亦、一書としてこのことにふれているものはない。

ただ、トゥグルク朝後期に Firūz Shāh が自ら著したといわれている Futūhāt-i Firūz Shāhi には、Malikpūr (マリクプール) の地名がみえ、そこにあるふたつの墓、すなわち「Malikpūr にあるところの Sultān Shams al-Dīn の子の、Sultān Mu'izz al-Dīn (ムイツズッディーン) の墓」、および同じように「Malikpūr にあるところの Sultān Shams al-Dīn, の子の Sultān Rukn al-Dīn (ルクヌッディーン) の墓」を補修したという記述がたまたまあるのであ⁽²⁸⁾る。(これらふたりのスルターンの墓といわれている建造物については、續稿において私見をくわしく述べる豫定である。) ここに出てくる Malikpūr というのは、文脈からみても、ここに問題としている Malikpur Kohi 村の名と同じ Malikpūr であることは、ほとんど疑う餘地のないところであり、まさにこの Naṣir al-Dīn Maḥmūd の墓があつた地域にほかならないと考えられるのである。しかし、切角 Malikpūr という地名に二度もふれ、スルターンの名をふたりとも擧げながら、しかもその地のふたつの墓の再建補修の事實にふれていながら、Futūhāt の著者は、それらの兩墓のすぐ傍らに建つており、しかもくらべものにならないくらいずっと大きな墓廟の主人公である Nāsir al-Dīn Maḥmūd の名についてはついに一度もふれていないのである。考えてみると、このことはいささか不可解である。ひとつの理由としては、この建造物については、彼が補修をしなかつたからだという反論も考え得られるであろう。しかし、のちに説明するように、諸學者も、この建造物について、Firūz Shāh 時代と思わ

れる補修のあとをさまざまな個所に認めているのであり、この時点で、上にあげた不可解さは依然として残るのである。

しかし、この點に關しては、實は、上にのべた *Futūḥāt-i Firūz Shāhī* のなかのふたりのスルターンの墓の補修の記述のすぐ前に、きわめてまぎらわしく、しかも解釋の混亂をまねき易い文章が記されているのである。それは、“*Madrasah‘i Sulṭān Shams al-Duniyā wa al-Dīn Iltūtmish*”，すなわち「*Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish* の學校」の再建補修と、それにすぐつづく“*maqbarah*”⁽²⁹⁾（墓）の補修の記述とに關する内容の文章なのである。この文中の *madrasah* すなわち學校が、*Iletmish* が建てさせたか、あるいは少なくともその名を冠するものであつたことは、誤りなしとみてよいだろう。そして、*Futūḥāt* の文章は、その學校の補修再建のすぐあとに、

“*wa sutūnhā‘i maqbarah kih uftād……*”

すなわち、すでに崩れおちていた墓の柱について述べているのである。⁽³⁰⁾*Iletmish* の學校にすぐつづいて記されているこの“*maqbarah*” すなわち「墓」が、まさにその *Iletmish* の墓と考えられたのは、まことに當然のことといえよう。このことについては改めて次節でくわしく述べるつもりである。しかし、問題は、この文中の墓の部分についての記述の内容が、本稿の次章でとりあげる、クトゥブ地域に現存するところの、*Sulṭān Shams al-Dīn* の墓といわれている建造物の状態とは著しく異なり、かえつて、いまここで問題にしているところの、*Nāṣir al-Dīn Maḥmūd* の墓すなわち *Sulṭān Ghāri* と、むしろ一致するところが多いということなのである。このことが、19世紀以降になつて、のちに述べるように、さまざまな學者や著者によつて、多くの疑問と異つた意見とが出されてきた原因となつたのである。この問題に關しては、次章で述べる *Iletmish* の墓とされる建造物に關連する點が多いのであるが、本章では、*Sulṭān Ghāri* の建物に關する限りにおいて、これまで説をなした諸學者についてふれておくこととする。

そこで、なによりもまず、Futūhāt-i Firūz Shāhī の文中の問題の個所の文章について、そのペルシア語の原文を、次に紹介しておこう。⁽³¹⁾

و همچنین مدرسهٔ سلطان شمس الدین ایلتمش را محابهای که اهدام پذیرفته بود عمارت کرده درها از چوب صندل نهادیم و ستونهای مقبره که افتاده بود باز بهتر از آن که بود راست کردیم و صحن مقبره را وقت بنا گنج نکرده بود آن را گنج کرده شد و در گنبد نردبان از سنگ تراشیده زیاده کرده شد و در چهار برج پشتیان ریخته آورده شد

この原文については、19世紀後半以来ふつう多くの人びとが利用してきた⁽³²⁾ わゆる Elliot-Dowson の著作にみえる英譯文を、次に再録してみよう。

“The *madrasah* (college) of Sultān Shamsu-d dīn Altamsh had been destroyed. I rebuilt it, and furnished it with sandal-wood doors. The columns of the tomb, which had fallen down, I restored better than they had been before. When the tomb was built its court (*sahn*) had not been made curved (*kaj*), but I now made it so. I enlarged the hewn-stone stair case of the dome, and I re-erected the fallen piers (*pushti*) of the towers.”

上の英譯で、Dowson 譯をあげて私の譯や Naqvi 譯を載せなかつたのは、次節で諸學者の論説を紹介するときに便利であるからである。この譯に關するその他の人びとの意見や別の解釋、そして私自身の異つた見解については、のちに述べることにする。

この Futūhāt の記事には、大體、次の三つのことがらが述べられているようである。すなわち、

- (a) (Firūz Shāhが)、Sultān Shams al-Dīn Iletmish の名をもつてよばれた *madrasah* すなわち學校の建物を補修したこと。
- (b) その學校の柱 (*sntūnha*, 複數形) が落ちていたのを再建したこと。
- (c) *maqbarah* すなわち墓の補修について。

ここでまず第一に問題となるのは、この文中にある墓 (*maqbarah*) というのは、その直前の文章中の「*Iletmish* の學校」とどういう関係にあるのだろうかということである。英語に譯す場合には“the tomb”と譯すから、この定冠詞を用いたことによつて“the tomb (of Sultān *Shams al-Din Iletmish*)”という意味に自然に解釋できるような文脈だが、ペルシア語ではこうした定冠詞はない。しかし、ふつうは、この *maqbarah* (墓) は、當然、その直前にある *madrasah* (學校) を形容する固有名詞である Sultān *Shams al-Din* のそれと解釋するのがふつうであろう。實際、この墓を、全く別のひとつのもののみたり、またはこのふたつのあいだに文章が脱落していると考えた學者は、これまでひとりもないのである。私も、この文章をそのまま承認する限りにおいては、以上の如く、文中の墓を *Shams al-Din Iletmish* にかけて解釋するのが妥當であると考えたものである。

第二の問題は、上のような解釋をとつた以上は當然出てくることである。すなわち、この文章に注目した大いなる學者は、このふたつの建物すなわち *madrasah* と *maqbarah* とが、同じ建造物に關することをいつているものと考えたという點である。⁽³³⁾ ふつう、*madrasah* と墓との關連は、インドにおいてムスリム支配層にはしばしばみられたところである。例えば、デリーに現存する Firūz Shāh Tughluq の墓の建物は、おそらくは彼の生前に建てられたものであつて、生前は *madrasah* の一部をなしていたのではないかといわれている。⁽³⁴⁾ また、モスクの廻廊部や禮拜室の一部が、教育施設として利用されることは、むかしから現在に至るまで、西アジアをはじめインドの各地でもふつうにみられるところである。ある程度の廣さをもっている建物ならば、たとえ墓であつたとしても、それが墓として使用される以前ならば、教育施設として用いられても一向におかしくはないのである。

そこで第三の問題は、上にあげたふたつの解釋、すなわち Futūhāt の文中の問題の「墓」は、*Iletmish* のものであり、しかもその墓と「學校」とは同

じ建物を意味するか、あるいは少なくとも関連した建物のそれぞれ一部であるという解釈をつなぎあわせて考えてみるときに、當然出てくることがらである。それは、この墓の補修に関連して文中に述べられているところのこの建物のディスクリプションについてである。つまり、問題の文章によると、この墓は次の如き特徴をもっている建物と考えられる。

- (a) *sutūnhā* というのは複数形であるから、この建物は何本かの *sutūn* (柱) をもっている。
- (b) 墓には *sahn* (court) があり、それはもともと曲つて (*kaj*, curved) いなかつたのを、*Firūz Shāh* が曲げた。(ただし、この解釈は、前掲の Dowson 譯に従つて考えた場合のことで、のちにこれと異つた諸説を紹介し、また、私が正しいと考える翻譯および私自身の解釋をものちに述べる)
- (c) ゲンバド (*gunbad*) には切石階段 (*sang-i tarāshidāh*) がある。
- (d) 四つのブルジ (*burj*) がある。

ところが、これらの特徴のどのひとつをとつても、次章に述べるところの、クトゥブ地域に現存するいわゆる *Sultān Shams al-Dīn Iletmish* の墓といわれている建物とは、様式・構造の點からして全く合わないのである。そればかりか、以上に述べた様式と構造上の四つの特徴は、いま本章でとりあげているところの *Nāsir al-Dīn Maḥmūd* の墓の建物全體に非常によくあてはまるところが多いのである。そのなかでも、上にあげたうちの(a)と(d)とは、まことによく合致する。すなわち、現存のこの建物には、柱は、西側の廻廊部に列柱のかたちで屋根を支えているし、また、假りに地下の墓室内の柱のことと解釋した場合でも、10本はある。さらに、圍壁の四隅には、「ブルジ」と呼んで一向にさしつかえないほどの塔の形をした部分が現存している。(c)にあげた階段としては、現在の建物にも、まず東門入口と墓室の地下室へ降りる階段があり、そのいずれも切石を積んだものである。また、中央のプラットフォーム(つまり地下室の屋根)に上るために、東門から内庭に入つてすぐのところ、7

歩の階段があり、これも大理石と赤砂岩の交互の切石積である。ただ、残る(b)の項目の部分は、意味がこのままではよくわからないが、これも解釋の仕様では、建物の現状にあてはまらないとはいえないことは、のちに諸家の説を紹介するときにふれよう。また、これには私見もあり、のちに述べる。ともかく、以上に記したように、少しは疑問點があるにもせよ、問題の文章の内容からくみとれる諸特徴を、現存の *Sulṭān Ghār* の建物とくらべてみると、たいへんよく合う。そして、次章でくわしく述べる、クトゥップ地域の *Iletmish* の墓とされる建物とは、逆にほとんど合わないことがわかるのである。

つまり、*Futūḥāt-i Firūz Shāhi* の問題の文章のなかの「墓」(*maqbarah*)とは、いわゆるクトゥップ地域の *Qūwat al-Islām* (クワットゥル=イスラーム)とよばれるモスクの西北隅の裏手にあるところの有名な墓ではなく、本章で問題にしている *Nāṣir al-Dīn Maḥmūd* の墓のことを述べているのではないかという推論が次第に有力になってくるのである。しかも、この推論には、さらに有力な手がかりが、同じ文のつづきの部分に見出されるのである。すなわち、すでに挙げたところの *Futūḥāt* の原文 (30ページ) につづいて、*Iletmish* の子で、その死後にいずれもスルターンとなつたところのふたりの人物すなわち *Sulṭān Rukn al-Dīn* と *Sulṭān Mu'izz al-Dīn* の墓についての記述がみられるのであるが、⁽³⁵⁾そのふたりの墓のいずれの場合にも、

“……kih dar Malikpūr ast……”

という形容句、つまり「*Malikpūr* にあるところの」という説明が附せられているのである。しかも本稿につづく私の論稿で述べるように、このふたりの墓のうちの片一方のもので推定されるものが、問題の *Sulṭān Ghārī* の建物の南壁に近く現存していることがわかるのである。こうなると、このことは、以上に述べてきた推定を補強するきわめて有力な手がかりとなり得よう。少なくとも、*Futūḥāt* に述べられた問題の「墓」(*maqbarah*)が、同じ *Malikpūr* にある *Sulṭān Ghārī* に相当するのではないかという推定の根拠を強めこす

れ、決して弱めはしないのである。

4. 従來の諸説の検討

さて次に、上に述べてきたところの問題点について、19世紀このかた現在に至るまでさまざまな説をなしてきた先人の考察について見てみよう。諸説の變化とその系統とがわかるように、ほぼ年代順に記しておく。

(1) Syed Ahmad Khan は、その著 *Āthār al-Ṣanādīd* の初稿本では、*Sultān Ghāri* と、クトゥブ地域のいわゆる *Iletmish* の墓の兩者について述べているが、上に記した *Futūhāt* との關連における諸問題については全くふれていない。しかし、その改訂稿の方では、「*Shams al-Dīn Altamsh* の墓」の項目のなかで、*Futūhāt-i Firūz Shāhī* の記事に言及しながら、次のように述べている。ここでは、ウルドゥー語原文は省略して、私譯による英譯のみをのせておく。⁽³⁶⁾

“*Firūz Shāh* is writnig as follows: ‘I repared also this tomb (*maqbarah*)⁽³⁾, and raised the *chhapar-khat* of *sandal*, and made, in that gumbad, a stair (*sīrhi*) of stone’. However, there remains no trace of things at present.” (note 3. *Futūhāt-i Firūz Shāhī*.)

つまり、彼は、*Futūhāt* の記事に注目しながらも、その敘述がクトゥブ地域に現存する *Iletmish* の墓についてのものであるとそのまま信じて、何らの疑いをもはさまなかつたのである。従つて、「今では、それらのものあとかたもなくなつてしまつている」と記しているのである。ここでは、*Futūhāt* の文章の内容と、現存の *Sultān Ghāri* の建物との結びつきさえも全然考えられていないわけである。

(2) Carr Stephen の著書 (1876刊) は、すでにふれたように、隨所に Syed Ahmad の敘述を利用しているのであるが、そのなかの “The tomb of Shams-uddin Altamsh” の項では、“*Fatuhāt-i-Firozshāhī*” の問題個所の翻譯を引

用して、その内容を“rather puzzling”と感想を述べつつ、次のように記している⁽³⁷⁾のである。

“From the above, it would appear that the tomb had a dome in the centre and a pavillion on each of its four corners; but beyond the ruins over the southern walls, there is nothing to help me in verifying the description of Sultan Fīrozshāh Tughluq……”

ただし、彼もまた、この墓にさきだつて説明しているところの“The tomb of Sultan Ghari”の項 (pp.70—73) では、Futūhāt との関連についてはひとことも記していないのである。要するに、主に Ahmad khan に據つた Carr Stephen も、この問題の文章をめぐる建物の問題点については、Iletmish の墓の敘述としては「當感を感じさせられた」というにとどまつているのである。

この Carr Stephen の著書より數年はやく“Delhi”という題名の書物を著した H. G. Keene も、この問題点についてふれている。しかしそのふれ方はきわめてさりげなく、「彼 (Ultumsh, すなわち Iletmish のこと) はまた、……大學 (college) を建てたが、その建物に附屬して、彼がのちに埋葬された建物がある。」というのみである。それに彼のその他の敘述をみても、實際に H. G. Keene がこのことがらについて、どこまで問題点を理解した上で書いているのかよくわからない。

(3) この問題について、二つの墓を関連させてはつきりとしたかたちで疑問を提出したのは、A. Cunningham である。ただし、その彼も、最初の Archaeological Survey of India の最初のレポート (1862—63年度) では、この兩者の建物についてふれていながら、また「Mahipālpur の Firuz Tughlak の堰堤」についてまで書きおよびながら、この問題点には気がついていなかったらしい。しかし、Cunningham は 1882—83年度の東ラージャスターン調査報告のなかでは、“Tomb of Iltutmish”の項で問題の“a difficult passage

in Firoz Shâh's autobiography”に言及しながら、明確なかたちで、その疑問を提起しているのである。そして、Cunningham にいわせれば、この Fū-tūhât の文章は、“quite inexplicable”であつて、その文章中の“even a single paragraph”たりとも、いわゆる Hetmish の墓とされる建物には適用できないとして、その細部の差異について述べているのである。そして、彼の推論は、結局においては、それまでのいかなる著書もがほとんど想像だにしかつたほどに飛躍し發展するのである。彼の考察をごく簡単にまとめてみると、ほぼ次のようになる。⁽⁴⁰⁾

- (a) Firoz Shâh の記述は、おそらくは、現存する Sultân Ghâri の、墓およびその他の建物に關するものと考えられる。
- (b) “the cloisters of the enclosed square” (つまり西面中央ミヒラーブのある主室部分を中心とする西側列柱の間——筆者)を文中の *madrasa* (すなわち *madrasah*, 學校——筆者) に比定する。
- (c) 現存の墓室の屋根のうえに、かつては八本柱のドームをもつ部屋があつたと推定される。Firoz Shâh が補修した柱とは、この八本柱のものと推定される。
- (d) 文中の “dome” に通じる “hewn stone staircase” とは、現在、地下墓室の屋根になつている部分にのぼるための7歩の階段であろう。従つて、この階段は、もとは、ドームを頂くところの上部の部屋の床に上るためのものであつたと思われる。しかも、この階段は、大理石と赤砂岩とを交互に組合せた造り方で、これは、Kutb Minar の補修のときに Firoz Shâh がとつたと同じやり方である。
- (e) “court” を “curved” にしたという Dowson の譯については、原文の *sahan* および *kaj* には、それぞれ、“area, square”, “bent and angular” というふうに譯することもできる。従つて、この文章の意味は、Dowson の如く解釋せず、もともとは四角だつたもとの墓を、Firoz が柱を再

建した際に八角の形に變えたことをいつているものと解釋する。

大體、以上が Cunningham によるところの建物の復原的推論にもとづくところの考察の要點である。この推論は、まことに想像力ゆたかな解釋というほかはない。これには興味ある推理的假設もふくまれているが、とくに(e)の部分の原文の解釋については、私自身が別の翻譯・解釋をもっており、のちに Naqvi の翻譯とともに説明することにだけ、ここであらかじめふれておこう。

(4) さて、20世紀に入つてからも、この問題に言及する人びとはつづいてあらわれた。まず、デリーの歴史について、その「過去と現在」という題で一書を著した(1902年刊)ところの H. C. Fanshawe も、Futūhāt の問題の Dowson の文章を引用して、それが「Shamsuddin の墓」には當らず、「Sultan Ghari の墓廟」にこそあてはまる文章内容であるとして、彼に先立つ19世紀の著者たちと同じ見解をとつている。⁽⁴¹⁾しかし、その細部の解釋についていえば、上に記したところの A. Cunningham のそれとも異なつており、例えば文中の柱 (columns) とは、地下墓室の柱のことを意味しているものと解釋し、また、階段 (steps) とは、ドームをもつた入口の門 (Gateway)、すなわち東門のことを述べているものと考えている。また彼は、Firūz Shāh の補修をうらづけるように、現存の墓の様相は、完全に「中期パターン様式」(the middle pattern style) を示しているといつている。彼のいう「中期パターン様式」とは、おそらくトゥグルク朝時代の様式をさすものであろうが、この點は、私には賛成しかねる。全體として、Sultān Ghārī の建物は、トゥグルク朝時代の様式を示すものとは決していえないことはほぼ斷言し得るところでさえある。

(5) Fanshawe より少しあとにデリーの諸城市の變遷についてきわめて興味ある記述を残した G. R. Hearn の著書(1906年刊)は、“Tomb of Altamsh”の項では、その建物のドームの有無について論じながら、この問題についてはふれていない。⁽⁴²⁾ただ“Sultān Ghārī”の墓の項では少しばかりこれにふれている。そのなかで、彼は、かつて中央部に二階建の部屋があつたという

ことはあり得ることだろうと Cunningham と同じような推定を述べたのち、その上につけていたドームは、クトゥブ=モスクのように“horizontal”なドームであつたかも知れないとつけ加えている。⁽⁴³⁾

(6) インドにおけるムスリムの歴史碑文について重要な學術的貢獻をした J. Horovitz は、この建物の東門のアラビア語碑文を紹介したときに、この文章をめぐる問題にはなにもふれていない。また、1910年代から20年代のはじめにかけて、デリーおよびその周縁の遺跡の全般にわたつて詳細な現地調査を行つたうえでできた Archaeological Survey of India の大部な報告書 (Delhi Monuments List) のなかの関連遺跡の項においても、以上の諸著以上にはこの問題に立ち入っていない。しかもその第IV巻に収録されている“Tomb of Sultan Ghari”の項では、全くこの問題にふれていない。また、第III巻の“Tomb of Shamsuddin Iltutmish”の項でも、記述のおわりの部分で、Firoz Shah の記録はこの墓の状態とは合致し難い旨を簡単に記しているにすぎないのである。⁽⁴⁴⁾ 1922年刊の Bashir al-Din のウルドゥー著書も、“Maqbarah Sultān Ghāri (629 AH, 1231 AD)”という項目 (第3巻) のなかで、この問題には少しもふれていない。⁽⁴⁵⁾

(7) さて、1920年代に、インドの遺跡調査の面で活躍した人びとはどのような意見をもつていたのであろうか。Archaeological Survey of India は、その Memoir (紀要) の第22冊 (1926年刊) において、クトゥブ地域の總括的な、考古學的、歴史學的報告書を、當時の Superintendent であつた J. A. Page の名のもとに公刊している。そのなかで、Page は、“Altamsh's Tomb”についての記述の註において、この問題にふれて次のような意見を述べている。

すなわち、Page は本文の隨所においてはクトゥブ=モスクの西北隅裏手に現存する墓を「Altamsh の墓」と斷定的に呼びながらも、その註においては、「この墓を Altamsh のそれと比定することはまだ定説にはなつていない」という、ひかえ目な意見をつけ加えているのである。Page は、従來の説と同じ

ように、“Futuhāt-i-Firoz Shahi”の記述はクトゥブ地域現存のいわゆる *Iletmish* の墓には當らないとして、John Marshall が彼自身に指摘したように、その敘述は「きわめて明瞭に」「Sultan Ghari の墓」にあてはまるという。そして、結局、彼は、「クトゥブ地域の墓が *Altamsh* の墓でないということも、きわめてあり得ることなのである」と述べる。⁽⁴⁶⁾ 従来、*Futūhāt* の記事に言及して、その内容と現存のクトゥブ地域のスルターンンの墓の状況との矛盾を指摘するひとはあつたが、この「*Iletmish* の墓」について、はつきりと疑いを述べたのは、このひとがはじめてであろう。

その J. A. Page がその考察のヒントを與えられたという John Marshall は、當時の A. S. I. の Director General であつたが、上述の報告書の刊行から2年のちの1928年に、有名なインド史叢書である“The Cambridge History of India”のうちの“Turks & Afghans”と題する第Ⅲ巻のなかで、Chap. XXIII, The Monuments of Muslim India を執筆している。このひとの特徴は、遺跡に關する歴史的敘述よりは、むしろ、建造物の構造上あるいは様式上の特徴とその變化發展についての流達した文章をもつてした説明敘述にあると私は考へている。建造物についての彼獨特の審美的價値觀は、その文章の隨所にあられており、きわめて有用で興味がある。ところで、Marshall は、ここで問題にしていることがらについては、きわめて簡潔に記すのみである。その結論は、要するに *Futūhāt* の筆者が、おそらくは誤つていたのであり、その筆者が問題の文章中に言及している建造物は、*Iltutmish* 自身の墓（つまりクトゥブ地域現存の墓）ではなくして、“Sultan Ghari”として知られてきた建物であらうとしているのである。この結論は、いわば、Cunningham 以來の疑問とさまざまな人びとの解釋からほとんど一步もぬきんではいけない。にも拘らず、従来は、この問題について詳述したひとはあつても、*Futūhāt* の記述は *Futūhāt* の筆者の誤りであると、正面きつて述べたひとはひとりもいなかつたのである。⁽⁴⁷⁾ Marshall の推考はこの點をはつきり打ち出している點

で興味がある。こうして、ほとんど同じ解釋に立つた Page と Marshall も、前者は、建物そのものを疑い、後者は、問題の文章の筆者の記述そのものを疑うという風に、その結論は別れているのである。

(8) さて、デリーのムスリム建造物の構造と様式の變化をみきわめつつ、技術史、美術史上の考察に重點をおいて概説書を著した Percy Brown は、この問題については全く沈黙している。⁽⁴⁸⁾

そのほか、デリーの遺跡についての最近までのさまざまな著書も、この問題について、ここにとくに記しておくような記述を試みたひとはまずないといつていいだろう。⁽⁴⁹⁾ ただ、Elliot-Dowson の譯書全巻に補註を加えて、有名な二書を著した S. H. Hodivala は、Futūhāt の問題の個所の翻譯の補註のなかで、これについてふれている。彼は、とくに Fanshawe, Marshall の説を一部引用しているが、彼自身の新しい見解はとくにつけ加えてはいない。⁽⁵⁰⁾

(9) そこで最後に、1940年代に入つて Sultān Ghāri についてこれまでもつとも詳細な調査を行い、その結果をまとめた S. A. A. Naqvi の所論をみてみよう。この著者はもちろん問題の文章を翻譯引用している。この翻譯はのちに述べるように Dowson 譯に對して重要な變更をふくんでおり、従つて、さきに述べたところの A. Cunningham の解釋の一部をまったくくつがえしている。Naqvi の考察を要約するとほぼ次の如くなる。

- (a) 文獻中の “mausoleum” (すなわち *maqbarah*) の建物は、同時に “college” (すなわち *madrasah*) をもつていた。
- (b) 文脈からみて、Firoz Shāh が修復した “*madrasa*” は、Malikpur (Sultan Ghari) にあることは明らかである。
- (c) Sultān Ghāri の建物の列柱をもつヴェランダ (the peristyle verandah) は *madrasa* として十分な備えをもつものである。しかも、墓の圍域 (enclosure) 内に *madrasa* をもつことは、クトゥブ地域の ‘Alāuddin Khālji や, Hanz Khāṣ の Firoz Shāh の墓をみてもその例が認められる。

- (d) 精細に観察すると、Firoz Shāh による補修のあとは、なお今日でも指摘し得る。それらは、(1) 墓室内の柱、(2) 内庭の漆喰（プラスチック）、(3) ドームへの切石階段（次項を参照）、(4) 四隅の塔の側面などである。
- (e) 前記(d)の(3)のドームということについては、Firoz Shāh は明らかに墓室の八角形の屋根を意味しているのである。

以上のうち、(a)、(b)、(c)にあげた内容は、基本的には、すでに私がさきに紹介したところの、A. Cunningham が半世紀以上も前に述べた説と明らかに一致している考え方である。しかし、(e)は独自の解釈というべきであつて、平坦な八角形のこの内庭の床から突出したプラットフォームの部分を「ドーム」（原文は *gumbad*）といつてもさしつかえないという考え方である。この解釈は、私がさきに Cunningham の考察をまとめた際に、(c)、(d)、(e)の3項目において要約した復元的想像による解釈（前述 36 ページ参照）とあきらかに異なつた解釈である。また、上の(d)の観察は Cunningham のそれよりずつと詳細な指摘であると思う。とくに(d)の(2)の部分は、Futūhāt の原文の翻譯の違いから來ているものであつて、實は私自身も、Naqvi の譯を知る前に全く同様に翻譯解釋していたところであり、この説に加擔せざるを得ない。

すなわち、Flliot-Dowson 本の譯は、すでに引用しておいたように（30 ページ参照），“its court (*sahn*) had not been made curved (*kaj*), but I now made it so” と解釋したのであるが、これを、Cunningham は、*sahn* を “square”，*kaj* を “bent and angular” という意味として四角を八角に直したという風に独自の解釋を試みた（前述 36 ページ参照）。Naqvi は、これを，“its court (*sahan*) had not been plastered, but now I made it so.” と譯しているのである（註51参照）。従つて上述の(d)の(2)の観察が可能であつたわけである。私はこの(d)の(2)の観察、すなわち、この建物の内庭の漆喰が、はたして Firūz Shāh Tughluq 時代のものかどうか、Naqvi のいうように断定はできないと思う（それには、他の漆喰との分析比較が望ましい。それをしないで

右の如く断定する決定的根拠はあるまい)。しかし、この譯には全く賛成である。Dowson 譯は、そもそも “*kaj*” と寫しているが、これは、私の用いた Aligarh のテキストでも、また Roy のテキストでもいづれも、“*gach*” となつてゐることは前にあげたとおりである(前述 30 ページ参照)。(gāf) が (kāf) となり、(che) が (jīm) になることは中世ペルシア語ではしばしばあることである。⁽⁵²⁾ だから Dowson が用いた寫本は *gach* が *kaj* と讀めたわけであろう。しかし、この *gach* は、まさに、プラスター、モルタルの意味であつて、“*gach kardān*” という動詞は、Cunningham のいう如く「曲げる」でも「曲げて角づける」意味でもなく「漆喰をぬる」というもつともふつうの意味に解釋すればいいわけである。だから、原文の意味は、まさに「その内庭は、建てられた當初は漆喰がぬられていなかつたのを、今、私は漆喰をぬつた」という意味にとればもつとも自然なのである。そして、この解釋は、現状ともつともよく、そしてもつとも自然に合うのである。こうした解釋をとれば、逆に、現存の内庭のモルタルは、まさに Firūz Shāh Tughluq の時代にはじめて敷きつめられたものという推論がきわめて有力なものとして可能となるわけである。Naqvi の(d)の(5)の觀察も、當然こうした解釋から逆に生れたものであろう。

これを要するに、Sultān Ghāri と稱せられてきた Sultān Shams al-Dīn の子の Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓は、トゥグルク朝後期の文獻 Futūḥāt-i Firūz Shāhi のなかの文章をめぐつて、80年近くにわたつて論じられてきたわけである。それらの諸説から引き出し得る結論の大要は、少なくとも、次のようにまとまるであらう。

- (a) Futūḥāt のなかに記されている Sultān Shams al-Dīn の學校 (*madrāsah*) と、墓 (*maqbarah*) とは、ともに、同書中につづけてすぐにはあらわれる地名 Malikpur, すなわちのちの Malikpur Kohi 村附近に現存するところの、Sultān Ghāri と呼ばれている建造物のことであらう。

(b) Futūḥāt の著者が文中で記した「墓」は、おそらくと學校としてこの建物を建てた Shams al-Din の墓を記したらしい。これは、おそらくは、Futūḥāt の著者の誤りであろう。多くの學者はそう考えている。

(c) しかし、この(b)説に對して、逆にクトップ地域に現存するところの、いわゆる Iletmish の墓については、必ずしもそう斷定する根據がないと疑う少數の學者もいる。そしてその疑いの根據には、やはりこの Futūḥāt の記事が一つの有力な資料となつている。

これらの諸説の到達したところに對する私見は、のちに第 V 章で述べることにする。

5. Sultān Ghārī という名稱について

この節では、この墓が、Sultān Ghārī というきわめて特徴ある名稱でよばれてきたことについて、従來の諸説を紹介しつつ、あわせて私見についても述べておきたい。ただし、現在では、この Sultān Ghārī という名稱は、この特定の建造物をいうばかりでなく、この墓を中心とする附近の廢墟全體を含む一帯の地域をも意味するものとして用いられているようである。⁽⁵³⁾

この墓について、この名を最初に一般に紹介したのは、私の知る限りでは、Ahmad khan である。ただし、さきにも記したとおり、私藏の初稿本 (1895 年, Nawai Kishaur 刊本) は、“Maqbarah‘-i Ḥaẓrat Sultān Ghāzi” としてい⁽⁵⁴⁾る。ḥaẓrat とは、聖者や聖なるものにつける尊稱であり、ghāzi というのは西アジアの、とくにトルコ系ムスリム勢力擴大の歴史のなかでさまざまな問題點をもつものだが、この場合には、「征服者」というような意味の稱號に用いられていると解していいだろう。ghāzi と ghārī では、(re) と (ze) の一字のちがいが、文字にすれば上につく點がひとつあるかないかの違いの問題である。従つて寫字、印刷の際の誤りとも一應は考えられる。しかし、Syed Ahmad の前掲刊本は、次の項に “Darwāzah-i Dargāh-i Sultān Ghāzi” と見出し

をつけており、また、文中すべて ghāzī であり挿書のキャプションもそうである。しかも “Sultān Ghāzī” という語は英語でいえば、“Sultan, the Conqueror” とでも譯すべき呼び方で、しつかりした意味をもっているばかりでなく、俗稱としてきわめてありそうな呼び方である。従つて、これをいちがいに退けるわけにはいかない。

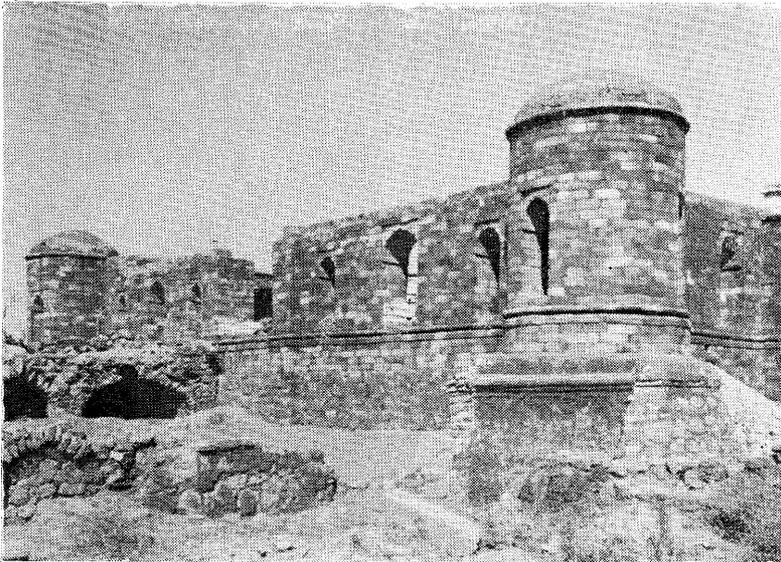
しかしながら、“Sultān Ghāzī” と初稿本では書いたその著者 Ahmad Khan 自身の改定稿本（1904年刊）では、あとに述べるように “Sultān Ghāri” と記されているのである。⁽⁵⁵⁾ しかも、前述の初稿本でも、その地下の墓室の説明には “ghār” という語を用いている。すなわち彼は、中央には「ひとつの ghār があり」、階段を「15段下りると ghār に達することができる」と記している。いずれにせよ、Syed Ahmad は、改訂稿本では、“Sultān Ghāri” になおしたように思われる。私も、“Sultān Ghāri” と呼ぶ通説に一應賛成であるが、ただし “Sultān Ghāzī” という呼稱も、ひとつの推測としては十分可能性があると思う。これはのちに終章で私が述べる推論のなかでふたたびふれることにする。

Syed Ahmad Khan の改訂稿本（1904刊本）では、前述のように、Sultān ghāri の方になおしているが、この “ghāri” を用いた俗稱の意味については本文中に何らの説明もない。あるいは文中に “ghār” の語を用いる以上は説明不必要と考えたのかも知れない。いずれにせよ、19世紀の中葉には、すでにデリー南方のこの遺跡のある地域では、この墓を “Sultān Ghāri”，あるいは “Sultān Ghāzī” と呼んでいたことは、Ahmad Khan の記述で確實にいえることであろう。と同時に、Burton Page も述べているように、Ahmad Khan 以前には、その地域の住民を除いては、この遺跡は、一般には知られていなかったといつていいかも知れないのである。Naqvi も、Syed Ahmad Khan がはじめて、この名稱を使つたと述べている。⁽⁵⁶⁾

その後の多くの著書も、“Sultān Ghāri” の名稱の説明についてはほぼ一致

しているようである。すなわち、“ghār”を“cave”，あるいは“*vaulted crypt*”と譯す。ドイツ語でも，“*Sultans in der Höhle*”，“*Schah in Loch*”（Wetzel）である。要するに、この場合は、穴室，地下室などのことを意味する語であつて、それは、この墓が地下にあるためである，と説明しているのが大部分である。この説明は，“Sulṭān Ghāri”を肯定する限り，その説明としては正しいと私も思う。Nāṣir al-Dīn Maḥmūd はスルターンの子で有望な後継者と目されていたにせよ，スルターンではないが，俗稱として，たとえその墓の主が誰であろうとも，壮大な墓廟の主を「スルターン」の稱號でよぶことはあり得ることである。ついでに，この譯を支持するこれまでの主な著書の譯語を補註に記しておくこととする。⁽⁵⁷⁾

ただ，ここに少し變つた説が二，三あるので，簡単に紹介しておこう。そのひとつは，J. D. Tremlett の説であり，ghāri は，ghār (*vault*) かも知れな



挿圖 3, Sulṭān Ghāri 南壁附近

いが、“race-name”を示す“Ghori”(つまり、Ghūri, ゴール族)の意味かも知れないとしている。これは私には支持できないが、同じような考え方に立つ呼称が Ahmad Khan の初稿本(1895年私蔵刊本)の挿畫のうちの建物全景の方のキャプションにみえる。それは“Darwāzah-i Dargāh-i Sulṭān Maḥmūd Ghūri Ghāzi”というのである。もちろん、ここでは“Ghāzi”も用いられているが、本文にない“Ghūri”という語がある。改定稿本(1904刊本)の挿畫も本文が Ghāri としているのに Ghāzi になっているが(本稿挿圖2参照)、ともに一言紹介しておく。⁽⁵⁸⁾

他のひとつはずつと新しく1926年に刊行された A. S. I. の紀要第47冊で、Ashraf Husain が、“Tomb of Sulṭān Ghāri (No. CVIII) の項で述べている説である。これは、同じように ghār を “a vaulted crypt” と説明するのであるが、この墓の主が聖者的性格の持主であつたが故に、自らの生前に、自分は墓にきちんと埋葬されるに値しない人間であるから、死後は地下坑にでも遺體を棄ててくれればよいと遺言したという。そこで Sulṭān-i Ghāri はこうしたことからつけられた彼の稱號だといふのである。⁽⁵⁹⁾ Ashraf Husain は、この傳承の典據はあげていない。これは、もちろん、ずつと後代のひとつの傳承であろう。そして、おそらくはスーフィー的な傳承であると私も思う。とくに、この墓廟のそばに khānqah (ハーンカー、ムスリム聖者のいわば庵)があつたらしいことを考え合せると、きわめて興味ある傳承であるといふべきであろう。次稿で述べるがその khānqah の一部は Sulṭān Ghāri の建物の南壁にそつてあつたと考えられる。前頁の寫眞(挿圖3)の左側遺跡はその部分であろう。⁽⁶⁰⁾

最後に、この ghāri という語が俗稱に用いられたことに關係ある Ibn Baṭṭūṭa の記事を紹介しておこう。それは、當時のデリーの imam (イマーム)の一人であつた Kamāl al-Dīn ‘Abd Allāh al-Ghāri (カマルルッディーン=アブドゥルッラー=ガーリー)について彼が記している個所で、Ibn Baṭṭūṭa はその俗稱の理由として、この聖者が Shaikh Nizām al-Dīn Badāūni (ニザームッ

デリーに現存する奴隷王朝初期の墓について

ディーン=バダーオーニー)のハーンカーの近く、デリーの郊外の ghār (地下室) に住んでいたからだ、と説明している。⁽⁶¹⁾ 私自身も、1961年冬、デリーの Lāl Kūt (ラール=コート) 舊城砦の西部にあるいわゆる Ranjit Gate (ランジット門) の遺構の西方に現存する Shaikh Shihāb al-Dīn (シハーブッディーン) の墓の東にある地下室をみる事ができた。これは傳承によれば、著名なスーフィーであつた Shaikh Farīd al-Dīn Ganj-i Shakar (ファリードウッディーン=ガンジェ=シャッカル) 通稱 Bābā Farīd (バーバー=ファリード) の chillāgāh (チャラーガー、簡単にいえばやはり庵) であるとされてきたもので、まさに、ここで問題にしている ghār とよばれるにふさわしい遺跡であつた。(挿圖4参照) また、ずつと規模は小さいが Kabīr al-Dīn Auliya (カビールッディーン=オー



挿圖4. Bābā Farīd の Chillāgāh といわれる遺跡
(62)

リヤー)の庵と稱する建築物(現在は、Kharbūzah-kā-Gumbad (ハルブーゼ=カ=グンバド、「かぼちやのドーム」とよばれている)がデリーの Shaikh Sarai 附近にあるが、これはひとがやつとひとり入れるような地下室をもつていて、多分、冥想の場所であつたのだろう。なお、さきの Ibn Battūṭa 記述については、Horovitz も Delhi Monuments List もふれているが、とくに Horovitz は、この聖者の通稱 (epithet) が、のちに民間傳承として、地下室に埋葬されていた Mahmūd の場合にも移行された可能性が大いにあると、想像的ではあるが興味ある推説を述べている。⁽⁶³⁾

6. 墓の建立をめぐる歴史的背景

すでに記したとおり、Ahmad Khan 以前の文獻には、Sultān Ghāri という實在の建造物の歴史について記したものは一つもなかつた。一方、この墓の主人公である Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓の所在や、その建立の事情などについて記したふるい文獻史料もなかつたのである。Ahmad Khan ののち、さまざまの報告・研究書や多くの著書がこの墓の歴史的背景にふれてきたが、それらの内容も、19世紀中葉の Ahmad Khan の記述を決定的に變えたとはいえない。碑文のみが決定的な證據となつているこの墓の場合、それは當然のことであつたかも知れない。ただ、のちにトゥグルク朝時代に書かれた Futūḥāt-i Firūz Shāhi のなかの文章をめぐつて、父帝の Shamsal-Dīn の墓との關連がさまざまな論議を呼んだことは、すでに前節で述べたとおりである。

Sultān Shams al-Dīn の子 Nāṣir al-Dīn Maḥmūd については、本稿でもはじめに簡単に紹介しておいた (27~28 ページ)。しかし、この人物については、奴隸王朝初期および中期の他のスルターンたちとは異なり、あまり知られていず、通史にもほとんどあらわれてこない人物である。従つて本稿では、もう少し彼について述べておくことにする。

彼についてもつともくわしく述べている史料は、同時代の Ṭabaqāt-i Nāṣiri のなかの Ṭabaqat XXI, “Dhikr al-Salāṭin al-Shamsiyah” の項の中の “I. Malik al-Sa’aid Nāṣir al-Duniyā wa al-Dīn Maḥmūd bin al-Sultān Nūr Allāh Marqadah” の見出しで簡単にまとめた部分⁽⁶⁴⁾の記述である。彼が Shams al-Dīn の「長男」であつたかどうか嚴密には不明であるが、おそらく、多くの學者がふつう書いているように長子 (the eldest son) であつたかも知れない。ともかく、著者である Minhāj al-Dīn によれば、彼は、「知的で、學識深く、賢明な王子」であつて、しかも稀に見る勇氣と寛大さのもち主であつたと、まことに宮廷史家らしき筆でほめて⁽⁶⁶⁾いる。Maḥmūd の Iqtā’ (イクター、賜與地)⁽⁶⁷⁾の受領の經歷からいうと、Hānsī (ハーンスイー)、ついで623 A. H. 年 (1226-27

A. D. 年)に Awadh (アワド、のちのアウド Oudh) を興えられているが、これらの地はいずれもデリーの中央権力にとつて當時もつとも重要な地方であり、それらの要地の統治を委されていたことから見ても、彼がきわめて重用されていたことが推測できるのである。Minhāj al-Dīn は Maḥmūd が Awadh 地方の平定に努力したもようを簡単に傳えたのち、彼が Lakhnawati (ラクナワティー、すなわち現在のベンガル地方の一部) に征討の軍を進めたことを記している。當時、ベンガル地方の中心地には、Khalji (ハルジー) 系トルコ人の一團が勢力を占めており、中央デリーの支配からほとんど独立した権力を行使していたのである。その支配の中心的人物は、Ghiyāth al-Dīn ‘Iwaz (ギヤースッディーン=イワズ) であつた。やがて Maḥmūd は Lakhnawati に戻つてくるこのハルジー武將の軍を破り、彼を殺す。戦勝ののち、彼は、その得た財物をサルタナット首都デリーに送つている。Minhāj によれば、それらは、「dār al-mulk (首都) デリーおよびその他の町のすべてのウラマーたち、サイイドたち、および宗教心あつい人びとや善男善女に」送られたものであつた。Minhāj al-Dīn はこのように、Maḥmūd の宗教的性格を強調している。また、中央で Sulṭān Shams al-Dīn がバグダードのカリフの使節からの贈物を受けたときでも、父帝はその贈物の榮譽の衣服のなかから貴重なものを (yak tashrif-i girān-māyah) えらんで、ベンガルの Maḥmūd のもとにとどけさせたという。⁽⁶⁸⁾そして、Maḥmūd は、父スルターンの後繼者と目されるようになったと Ṭabaqāt⁽⁷⁰⁾ の著者は記しているのである。さきに紹介しておいた Sulṭān Ghāri の東門の碑文 (26 ページ参照) によれば、Maḥmūd は、“malik mulūk al-sharq” すなわち「東方のマリク中のマリク」とよばれていることがわかるが、この稱號も、このような功績を示すものとして興えられたと考えてもいいのではあるまいか。しかし、「運命のほどは、人びとの望みとは合わず」、「1 年半のちに、彼は病に倒れて、死んだ」のであつた。彼の死去の知らせがデリーに傳えられるや、すべての人びとはいたく嘆いたと、Minhāj は記しているのである。⁽⁷¹⁾

Minhāj al-Din の、この美しい讃辭に満ちた文章は、ムスリム宮廷史家の場合によくある修辭と、権力者と對するへつらいであつて、その文句のままに信じてしまうのは全くおろかなことである。しかし、これらの記述から、當時の中央、デリーのロビーにおいて、Maḥmūd が、次のスルターン位繼承者の有力な人物と考えられていたことは、この著者の記したところからも信じてよさそうである。ところで、彼の死亡の年月については、「1年半ののち」としているだけでよく分らない。しかし、同じ章 (Ṭabaqat XXI) の Sultān Shams al-Din についての節では、彼の死去の知らせは、「626年の Jumādī al-awwal 月に」デリーにとどいたと記されてある。⁽⁷²⁾ 626 A. H. 年は1228年11月30日にはじまり、⁽⁷³⁾ 1229年11月19日におわる。この月は、1229年の4月前後にあたるから、Maḥmūd の死は、大體、1229年の春のこととみていいであろう。この年月については、あとに記すように多くの學者が誤つている。とまれ、同時代の唯一の史書である Ṭabaqāt-i Nāṣiri は、ほぼ以上に記したことがらについて述べているに過ぎない。サルタナット時代はもちろん、後代の書物からは、Maḥmūd については、これ以上のことはなにひとつとして分らないのである。

Maḥmūd の死や墓建立に關する年月として、このほかに私たちが知ることができるのは、さきの Sultān Ghāri 東門現存の歴史碑文に出てくるところの年次である。それは、629 A. H. 年である。629 A. H. 年は、1231年10月29日にはじまり、1232年10月17日に終つている。この629 A. H. (1231—32A. D.) 年は、問題の碑文の文章からは、嚴密に考えると、次のことがらに關係ある年次と考えることができる。すなわち、

- (a) この建物の建設開始の年。
- (b) この建物の建設完了の年。
- (c) この碑文を彫つた年。
- (d) この碑文を東門にかかげた年。

このうち、(c)と(d)とはほとんど同じ年とみてよいし、常識的に考えれば、

(c)および(d)は、こうした建造物の門にかかげた碑文の場合は、一應考慮の外においていいであろう。そして(a)か(b)、すなわちこの建物の建立に関連した年とみるのが正しいであろう。このうち、ふつうは、建物の完成したときに碑文をかかげるのが常識であり、従つて、もつとも妥當なのは(b)の解釋であろうと私は考える。すなわち、629 A. H. 年 (1231—32 A. D. 年) とは、この建物の完成した年と、私は考える。とすれば、問題は Maḥmūd が死んだ626 A. H. 年 (1228—29 A. D. 年)、おそらくはさきに述べたように1229年のはじめごろから、この建立の年である629 A. H. 年 (1231年10月—32年10月) までには、少なくとも3年前後の間隔があるということである。この前後の事情についてはサルタナット時代の文献や碑文は、一切なにも明らかにしてはくれないのである。そこで、次に従來の諸著の説くところをみてみよう。

(1) まず、最初にこの建物を紹介した Ahmad Khan はどうであろうか。私蔵の初稿本では、彼は、「この墓は、Sulṭān Shams al-Dīn Altamsh が、720 A. H. 年に造つた。」と書いている。この年月は文字ではなく、數字で記されており、ともかくあまりにも違いすぎていて、版本作製時の誤りかも知れない。改定稿本 (1904年刊本) では、Firishtah を引用したという註記のもとに、この點に關して、次のように述べている。英文に譯して次に記す。⁽⁷⁴⁾

“...And, in the year 626 A.H., i. e. 1228 A. D., he died during the life tmie of his father. His body was brought to Dihli, and was buried in this place. And, in the year 629 A. H., i. e. 1231 A.D., Sulṭān Shams al-Dīn erected this tomb. ...”

このうち、彼が Firishtah に據つたのは、最初の死去の年のことだけであり、Firishtah 自身は、そのほかの點では Ahmad Khan が記したようなこととはなにひとつ記していないのである。Ahmad Khan の Āthār al-Ṣanādīd におけるイスラム暦の西暦への換算はいつも略式であつて、時に一年狂うこともしばしばあるのである。ここでも、没年を1228 A. D. 年と記してい

るが、彼の死亡の時は、おそらくは、さきに述べた私見の如く (50 ページ)、1229年に入つてからのことであろう。建立の年次にしても、629 A. H. 年を1231 A. D. 年と断定すべきではなく、むしろ、1232 A. D. 年の方の確率が大いことも考えられるのである。それはともかくとして、Ahmad Khan の説明するところによれば、Maḥmūd 死後の事情は、ほぼ、次のように要約されよう。

- (a) 死後、彼の遺體はデリーにもつてこられた。
- (b) 「この場所」すなわち、今日 Sulṭān Ghāri の墓が現存する地點に、一たん葬られた。
- (c) ついで、629 A. H. 年に父 Sulṭān Shams al-Din が、問題の建物を造つた。

このうち、(c)は、東門の碑文によつてほぼ確認される所であり、(a)も當然考えられる所である。しかし、(b)については、あくまで推定の域を出でない問題で、おそらく、一たんは假埋葬されたと常識的に考えた結果であろう。

(2) 次に、考古學者はいかがであらうか。A. Cunningham は、A. S. I. の最初の報告書 (1862—63年) では、この問題點にはふれていないが、1885年刊行の報告書 (Vol. XX) においては、Maḥmūd が626 A. H. 年にベンガルで死んだのち、遺體はデリーに運ばれ、629 A. H. 年にその父帝によつてこの墓が建てられたと、まず、きわめて正確簡単に述べている。しかし、地下墓室内の墓石について述べているうちに、彼の想像力はきわめて奇妙な方向に働いていく。すなわち、彼は、通説に従つて、Maḥmūd の墓棺 (sarcophagus) は、地下墓室内の西壁の側にあるものとしている。しかし、彼は同時に、中央の、より小さい墓に注目して、次のように述べるのである。⁽⁷⁶⁾

“The sarcophagus of Māhmud is against the western wall, while the centre is occupied by a much smaller tomb. I suspect, therefore, that this burial place may have been prepared by

Māhmud himself before he went to Bengal, and that the small central tomb may be that of his wife, beside which there are two smaller graves, which must be those of his children.”

墓石の問題についてはのちに述べることとして、この Cunningham の推論は、この墓の建物そのものは *Shams al-Dīn* により、1231—32年に建てられたとしても、そのはるか以前、Mahmūd が Lakhnawatī 征討に赴く前に、彼自身がすでにこの地に自分の埋葬所を選んでおいたという趣旨なのである。これはきわめて奇妙な推論である。しかも上に引用した文中の “therefore” (従つて) という接續詞の使い方は、論理的とはいえない。西側に主人公の墓があり、中央の墓がより小さく、妻の墓らしいからといって、「従つて」上のような推論が導き得るとは限らない。

デリーの城砦やクトップの遺跡の問題でことごとく Cunningham の意見に反対する見解を述べた J. D. Beglar は、この遺跡については全く弱い。彼は、のちにふれるように、この建物のヒンドゥー起源説を出しているのであるが、“Sultān Gari” については、その歴史を述べていない。しかし、彼は滑稽な誤りを記している。すなわち、この墓の外にあるふたつの墓、つまり私が續稿で紹介する Sultān Rukn al-Dīn と Sultān Mu‘izz al-Dīn の八本柱ドームの墓(ただし、そのうちのひとつは崩壊)について、それらは、“Sultān Gari” つまり Mahmūd の生前に死んだふたりの子供の墓といわれている、と記している⁽⁷⁷⁾のである。

これらの見解に對して、碑文學者 Horovitz は餘計なことはひとつもいわずに、碑文のみに即した説明を加えているのみである。Zafar Hasan の勞力の結晶である Delhi Monuments List は 629 A. H. (1231—32 A. D.) の建立と記しているだけだが、歴史的事がらについては、Ṭabaqāt-i Nāṣiri の Elliot Dowson 譯をほぼ忠實にのせている⁽⁷⁸⁾。J. Marshall もこれと同じ説を述べており、その他の A. S. I. の諸報告も同様である⁽⁷⁹⁾。もつとも新しい S. A. A,

Naqvi の報告書は、Maḥmūd についての史實を Ṭabaqāt-i Nāṣiri によって簡単に要約しているが、年代については、死去が1229年、墓の建立が1231年と、割り切つてしまつている。ただし、彼が Malikpur の歴史的變遷について簡単ながらふれているのは面白い。⁽⁸⁰⁾

その Naqvi が、この墓がムスリムたちによつて聖なるものとみられてきたこと、また、この廟で、「毎年 Zīq'ad の月の17日に彼の 'urs (ウルス) が行われ巡禮者でにぎわう」ことなどについて述べていることは、きわめて興味深い點である。この墓の主人公 Maḥmūd について同時代の Ṭabaqāt-i Nāṣiri の著者がその性格をきわめて宗教的なものとして述べてきたことは、私もさきに指摘しておいた。(49 ページ参照) また、さきに紹介したところの、Ashraf Husain が述べている傳承にしても (46 ページ参照)、この主人公の Nāṣir al-Din Maḥmūd の、いわばスーフィー的影響を物語るような内容を明らかにもつている。Ahmad Khan が、その初稿本において、Sulṭān Ghāzi に “dargāh” (聖廟) という語を用い、また “ḥazrat” (すなわち「聖なる」という意味) の尊稱を冠したのも、Ahmad Khan がこの墓について見聞した當時、この墓の主人公が聖者的な扱いを受け、また、この墓の建物自體が “dargāh” として、東門の碑文も一字もよめない一般のムスリム民衆からも、スーフィーの聖廟と考えられていたことを示しているのかも知れない。また、Khānqāh (ハンカー、聖者の庵) についてもすでに述べたとおりである (前述 46 ページ参照) もつとも、現在では、私の知る限り、Naqvi が記したような、特別なウルスの祭がここで開かれることは、聞いたことがない。

(3) Carr Stephen (1876) は、この問題の場合にも Ahmad Khan に據るところが多いが、やや自分の想像を進めて筆を加えているようである。すなわち、彼は、626 A. H. (1228 A. D.) 年における Maḥmūd の死後、その遺體はデリーに運ばれ、Malikpur に埋葬されたが、3年後、すなわち 629 A. H. (1231 A. D.) 年に、その上に、父の Altamsh が地下天井の墓を建てたと説明

している⁽⁸¹⁾のである。その他、すでに本稿で紹介検討してきたさまざまな著書も、Maḥmūd の死去とこの建物の建立の年次についてそれぞれふれているが、そのなかには正確を缺くものも少なくない。しかし、特別にここに紹介すべき説をなしたものも別がないので、これ以上、この問題について紹介する必要はない⁽⁸²⁾と考える。

アジア諸地域の建築について紹介し、不朽の業績を残した James Fergusson は、その有名な著作 “History of Indian and Eastern Architecture” において、いわゆる Ietmish の墓を “the oldest tomb known to exist in India”⁽⁸³⁾ としている。Fergusson 自身は、このことを、ヒンドゥーが墓を設けないという一般的慣習の上に立つてムスリムの場合について述べたのであろう⁽⁸⁴⁾が、当時、彼は、この Sultān Ghārī の墓の歴史についてはなにも知つていなかった⁽⁸⁵⁾ので、この墓を「最古の墓」と書いたのであろう。従つて、S. A. Naqvi は、その Fergusson の言葉をとらえて、Sultān Ghārī の建立年次は碑文ではつきりとわかるし、一方、Iltutmish はそれよりさきの1235年に死んでいるのであるから、Fergusson は誤つていと述べている。これは一應うなずける文句である。ただし、Carr Stephen のように、クトゥブ地域の問題の墓は、Shams al-Dīn がその死ぬ以前に自ら建てさせたと考えているものもあり、そういう推論に立てば、この「最古の墓」論争も、いずれがより古い建造物であるか、正確なところは實は分らないという結論も可能なわけである。結局、この問題は、厳密にいうならば、構造、様式などの點から、年代の前後の決め手を見出すよりほかないと思うが、これも實はきわめて難しいことであるというほかはない。

さらに、この墓廟の建立の問題については、この建物の様式あるいは起源が、ムスリムか、あるいはヒンドゥーか、という問題がある。このことは、もちろん、厳密にいうならば、構造および様式上の詳細な観察と研究の成果をま

つてはじめて結論を得られる問題であるが、歴史的問題に関連するので、この際、従來の諸説の論點について、多少述べておきたい。

この建造物が、13世紀の前半のムスリム支配層のひとりの墓であることに間違いはないとしても、その構築材料に、ヒンドゥーあるいはジャイナ教の建造物の資材を用いていることは、クトゥブ地域の Qūwat al-Islām Masjid の場合と同様に、たとえばその柱一本をとつてみても、一見して明瞭なところである。そのこと自體、實は、奴隸王朝初期のデリーの建造物のいくつかの例が示している特徴のひとつである。碑文のアラビア文字の粗拙さも、クトゥブのモスクやクトゥブの塔の場合と同じように、あるいは、未知であつたアラビア文字に慣れていながつたヒンドゥーの石工によつて彫られたためかも知れない。従來の諸著のなかに、この建物全體が、ヒンドゥー石工の手になるものかも知れないと疑うものがあるのも、ムスリムの政治的支配がようやくデリーとその近邊に根をおろしはじめた當時の社會的、技術的状況を考えれば、當然のことといつてよいかも知れない。

Quṭb Minār については實に執ように、そのヒンドゥー起源説を強調した Ahmad Khan が、この Sulṭān Ghāri の建物については、その點全く沈黙しているのはおもしろい。しかし、Ahmad Khan のクトゥブの塔のヒンドゥー起源説に眞向から反對した A. Cunningham は、1862—63年の A. S. I. の報告書のなかで、この墓廟の門と柱廊とに見出される大理石と赤砂岩のヒンドゥー様式の柱は、「おそらくは、この墓からわずか半マイルしか離れていない Mahipālpur 湖畔にあるところの、Mahipāl によつて建てられたシヴァ神殿からとつたもの」であろうと推考している。彼はまた、柱廊の大理石の二本柱の間の床に、Mahādeva のリンガム (lingham) の受器 (receptacle) である「アルガ」(“argha”) すなわち「ヨニ」(“yoni”) を見出したといつて⁽⁸⁶⁾いる。これは今でもあるが、このいわゆる「ガウリー=パッタ」(“Gauri-patta”) の存在、それに、西廊の大理石につけられている一連の番號を示す數字は、これらの資

材が他の場所から運ばれたものであることを示していると、Naqvi も指摘している。(ただし、Naqvi が、その報告論文のなかで、Cunningham はこの建物を“pre Mahammadan”と考えているとしているのは Beglar と間違えているのであつて、これは Naqvi のミスである。⁽⁸⁷⁾) 実際、そのことは、現在のインド考古局の寫眞部に保存されている20世紀初頭の古い寫眞でも一部わかるところである。また私自身、1959年にインド考古局が Y. D. Sharma 氏の指揮のもとに行つていた内庭西側および中央八角突出屋根部の發掘の現場をみたときに露出していた石材も、ヒンドゥーあるいはジャイナ教の系統のものがあつた。そのあるものは彫刻された面を内側にしてその裏面をそのまま建築の表面に用いているものさえあつたことがよく觀察されたのである。(このような例は、他のムスリム建造物の例でもかなり指摘できる。例えば、クトゥップ=モスクの一角に現在並んでいる資材のいくつかをみても明瞭である。またベンガル北部邊境の Panduah (パンドゥア) の古跡を訪れたとき、巨大な Ādinah Masjid (アーディーナ=マスジッド) の mimbar (説教壇) の石段のなかにさえ、ヒンドゥー彫像の残つている石を見つけたときには、私自身いささか驚いたことを思い出す。)

このような事實から、一部の人は、この Sulṭān Ghārī の建物が、もともとはヒンドゥー建造物であつたに違いないという説をたてたのである。その最初の人物は、デリーの著名な建物のヒンドゥー起源説を唱えた Beglar であつた。彼は、1871—72年の A. S. I. の報告書のなかで、この建物が、「クトゥップと同じように、ムスリムによつて利用されたヒンドゥー建造物であるということ」は、“extremely probable”であるとし、とくに、中央の墓室は、シヴァ信仰の神殿のヒンドゥー的構造を示すものであつて、ムスリム建築としては全く異常な構造であるから、この“probability”は、ほとんど“a certainty”となるとまで、自説を強調している。⁽⁸⁸⁾ Carr Stephen (1876年刊) も、同じようにヒンドゥー起源説をとつており、この地下室は“decidedly pre-Muhammedan”だと述べている。ただし、彼の場合には、さきにもふれたよ

うに、もともとヒンドゥー建築であつたものをムスリムが利用したものか、あるいは単にヒンドゥーの職人たちが建造したという事実のみがその理由か、決め手はないとして、一應は慎重な態度を示しているのである。⁽⁸⁹⁾

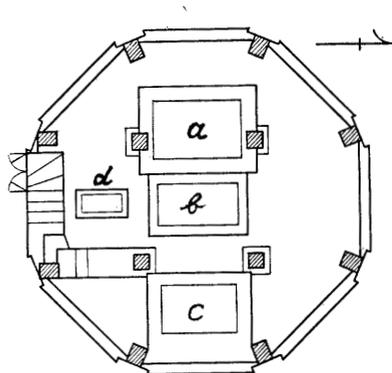
この問題は、歸するところは、構造および様式上の研究の課題であり、同時にまた、この建物に用いられている建築資材にも関連する問題である。従つて、ここでは、以上のようないくつかの異説を紹介しておくにとどめる。ただ、私見の一端を記すならば、前述の東門の歴史碑文の存在する限り、この建物全體は、地下墓室をもふくめ、Sultān Shams al-Dīn の命によつて建てられ、1231—32年のいずれかの時期に、おそらく完成されたものであると考えたい。このスルターンが、この墓の建立に當つてヒンドゥー建造物に用いられていた資材を用いたということは間違いないところといえようが、もともとあつたヒンドゥー小祠堂をそのままわざわざ用いてまで、これだけの大規模な建築を企圖したとは思えない。もちろんこのことをあまり強調するのは誤りで、ふつうは熱心なムスリムの宗徒という評価を與えられているムガル第6代の皇帝 Aurangzib (オーラングゼーブ) にしても、ヒンドゥー寺院をそのまま一部を改修しただけでイスラームのモスクに用いている例さえあるからである。結局、最後の結論は、構造と様式上からの考察によつて決められる問題であろう。

なお、一言つけ加えておが、ムスリム歴史家 Habibullah も、この建物は、西側のミヒラブの部分のをぞくと、あとは、すべてヒンドゥー様式なので、ヒンドゥー起源説も無理がないと述べている。しかし、彼は同時に、やはり碑文によつて、結論としては否定的態度をとつているのであるが、地下墓室についてのみは、サルタナット時代に、クトゥブ地域のいわゆる Shams al-Dīn の墓とされる建物のほか、その例をみないと述べている。そして、Habibullah は、結局、これについては、12世紀のセルジュークの墓塔 (tomb tower) の慣行の延長として、そのインドへの影響を指摘して述べているのはきわめて興味がある点であるといえよう。このセルジュークの慣行では、地上の床の上

には、“memorial stone”を、地下の墓の場所の上におくということである。⁽⁹⁰⁾
 サルタナット時代のデリーの墓にこの慣行の明確なあとがみられず、ムガル帝國の大きな墓になつてからこれと同じような慣行があらわれるのは、歴史的にどのように説明するべきか、今後のひとつの課題といえよう。ついでながら、構造や様式の問題で、デリーのサルタナット時代の建造物の問題点を解明する大きな鍵のひとつはセルジューク建造物の研究にあると、私もかねて考えていることに、この際、附言しておきたい。

6. 地下墓室内の墓について

内庭の中央に突出した八角形のプラットフォームがあるが、これが屋根となつて、その地下に、同じく八角形の墓室がある。八角プラットフォームの南邊にこの墓室に入る入口があり、階段で降りることができる。墓室には、4基の墓棺（正式には「棺」ではないが、一應この語を用いる。「墓石」でもない。）がある。この墓について、なおここに記すべき問題がある。つまり、この4基の墓のなかで、どれが一體、墓の主人公である Naṣīr al-Dīn Maḥmūd の墓で、他の3基はだれの墓だろうかということである。



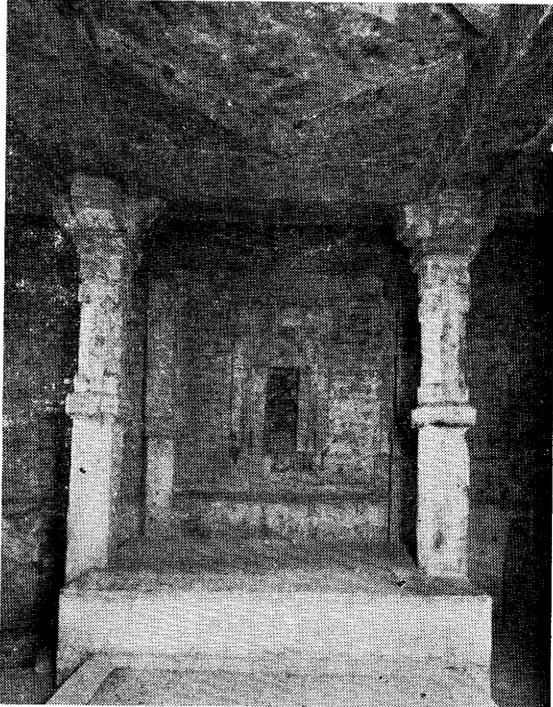
挿圖 5. 地下墓室平面略圖

この問題については、全くなんらの依據すべき文献資料も存在しない。従つて、ほぼ正確にいえることは、東門の碑文から推して、この墓室内の墓のどれか1基が Naṣīr al-Dīn Maḥmūd の墓であるに違いない、ということだけである。さきにも簡単にふれたように、墓棺は、この室内に、現在では4基あ

る。それらの位置の大要は、ほぼ前頁に掲げた平面略圖の如くである。⁽⁹¹⁾この4基の墓をくらべてみると、大體、次のような特徴がある。(a) 西面壁にもつとも近く、4墓のなかでもつとも大きい。(b) ほぼ室内の中央に位置し、2番目に大きい。(c) 東壁に近く、大きさは3番目。(d) 南側階段下であり、もつとも小さい。そして、この四つの墓の埋葬者の性別は、墓そのものからはわからない。

この問題について、従來の諸著の解釋はどのようなものであつたか、以下、簡単に紹介検討してみることにする。まず、Ahmad Khan は、この墓の問題については、初稿本、改定稿本ともにふれていない。⁽⁹²⁾Cunningham は、は

じめの1862—63年の報告ではこれにふれていないが、1885年刊行の報告 (Vol. XX) では、西側の最大の墓すなわち(a)を、Maḥmūdの墓としている。さきにも述べたように(52ページ参照)、彼は、Maḥmūdが生前からこの埋葬場を用意していたことも考えられると想像しているのであるが、中央(b)の墓 Maḥmūd の妃の墓、他の2基、すなわち(c)および(d)を彼の子供の墓と考えている



挿圖 6. 地下墓室内西側、向う側が墓(a)、手前が墓(b)

⁽⁹³⁾のである。この Cunningham よりもはやく、J. D. Tremlett は、1870年に J. A. S. B. に寄稿した論文のなかで、問題の墓を三人の大人とひとりの子供のものとし、“all massively built” としているが、(d)は小さくてそんな感じはとてもしない。⁽⁹⁴⁾Carr Stephen (1876) は、Maḥmūd の墓はもつとも西側のもの(a)と⁽⁹⁴⁾考えており、(d)についてはやはり彼の子供のもの⁽⁹⁵⁾としている。その他の19世紀の諸著のうちでは、特別に變つた説を提唱したものはいないようである。

Delhi Monuments List の報告書も、やはり、この(a)の墓を主人公 Maḥmūd のものとしている。そして、さらに、この地下の墓室のほかにも、建物の西側柱廊 (colonnade) のすみにも無名の墓がひとつあり、やはり石灰で白塗りになつていていつている。これと同じことを Ashraf Husain の報告書も述べており、同じく(a)の墓を Maḥmūd のもの⁽⁹⁶⁾と⁽⁹⁶⁾考えている。

もつとも新しい報告をしている Naqvi は、これらの従來の説に對して、異つた推論を下している。すなわち、西側の墓つまり(a)を Maḥmūd の墓と⁽⁹⁷⁾考えてきた従來の多くの人びとの見解に對して、Carr Stephen を例として註記しつつ、疑問を表明しており、次のように中央の墓すなわち(b)が Maḥmūd の墓⁽⁹⁷⁾ではないかという推論をしている。

“The sarcophagus of Nāṣiruddin Maḥmūd is said to be that near the western wall, but there is no evidence beyond the fact that this is the largest grave in the tomb-chamber. It is more likely, however, that the prince’s grave is the one in the centre of the chamber.”

この考えは、私の知る限りでは、中央の墓棺(b)を Maḥmūd に比定した唯一の推論である。しかし、Naqvi 自身、従來の説を、根據は「もつとも大きい」からと批判していながら、自分の説も、おそらく「墓室の中央にある」からというの、ただ一つの根據にすぎないらしい。

これを要するに、この墓室内の墓の比定は、決定的な證據がないのであるから、どのような見解も、結局は、推論の域を出でない。まず、もつともらしいところは、西側の(a)か、あるいは、中央の(b)の墓のいずれかが、主人公 Nāṣir al-Din Maḥmūd の墓である可能性がつよい、ということだけである。もつとも、私は別にひとつの推理的假設をもっており、その推論を採るときには、Naqvi の如く、中央の墓が Maḥmūd のものであると考えるのであるが、これについては、末章において述べることにする。

Ⅲ. いわゆる Sultān Shams al-Din Iletmish の墓について

1. はじめに

クトゥブ地域西北隅に現存している、Sultān Shams al-Din Iletmish の墓といわれる建造物は、デリー地方にのこつているサルタナット時代の墓のなかでももつとも有名なもののひとつである。(巻頭圖版2, b参照)しかし、この墓がひろく一般に知られているのは、墓の主人公とされる人物が、インド史におけるムスリム支配初期のもつとも重要なスルターンであるという歴史的意味にあるのではないようだ。この墓がひろく世に知られ、訪れる人びとも多く、また19世紀のはじめ以来今日に至るまで数多くの書物に記されてきたのも、それが、デリー南郊の遺跡群のなかで壯大な姿をのこしてきたクトゥブ諸遺跡の遺構の一隅にあつて、常に人びとの目をひきつけたからである。この墓はかなり大きい、他のデリー現存の墓に比して必ずしも壯大なものともいえず、むしろ巨大なクトゥブの塔やクトゥブのモスクのそばにあるためにかえつてこじんまりと見える。この墓が、サルタナット初期の特徴をあますところなく示し

ている赤砂岩の壁面上の碑文・文様の独特な様式のゆえに評価されてきたことも、この建物を一般に著名なものとしてきたひとつの大きな理由であるといえよう。

しかし、現存するこの建造物の構造は、まことに簡単なのである。それは、四角の建物で、西面がミヒラーブを具えて閉じられているほかは、他の東・南・北の三面には、アーチ型の入口が開いている。この建物にもともと屋根があつたのか、あつたとすればそれは平坦な屋根かドームか、ドームとすれば如何なる形のドームであつたか、という問題は、のちに述べるように、従来、しばしば論じられてきた。現在とはもかく、四壁の天井部には、南面の上部の周縁に

漆喰らしいものが一部残存し、かつて天井を蔽うものの縁邊部の名残りをおもわせるが、ともかく屋根はない。ただ、室内の上部の四隅には、いわゆるキー=ストーンを用いたふつうのアーチではなく、横石をならべた構造のスクインチ(むしろ、この場合には、実際はペンデンティブ)が設けられている。これは、クトゥップのモスクや前述の *Sultān Ghāri* にみられるものと同じ様式と



挿圖7. *Sultān Shams al-Dīn* の墓、内部西面および墓石の一部

構造である。建物の内部の壁面は、ヒンドゥー的文様や、ムスリムの幾何學文様、およびクーフィー・ナスフ・トゥグラなどの書體の碑文が、ほとんど壁全面に彫られている。この建物の素材は、赤砂岩と大理石とである。

屋内の中央に大きな基壇の上についでいる堂々たる墓があり、赤砂岩と大理石とでできている。その基部には大きな文字で彫られた碑文がのこっている。現存のこの墓そのものは、デリーの數多くのサルタナット時代の墓棺のなかでもまことに堂々としたものである。ただし、その基部はともかく、この墓石そのものがオリジナルなものかどうかはわからない。しかも、この墓石は實際の墓ではないかも知れないのである。この建物には、いわゆる *tah khānah* (テハナ), すなわち地下室があり、そこに本當の墓があるかも知れないと推定されるからである。現状では、北方の建物の外から石段を降りるとこの地下室へおることができるが、降りたところで、入口はしつかりと閉ざされてしまっている。私はもちろん、これまで内部をみたことはないので、果して、そこにどのような形の墓石があるかは全く知ることができない。残念ながら、19世紀以降の記録文獻を渉獵するなかで、私はかつて、この地下室のプランや敘述に接したことは一度もない。おそらくは、近代になつて、この地下室に入り、それについての記録を残したひとはいなかったのではないか。こうした地下墓室と床上の墓石の存在について一般的にいえば、のちにムガル時代にはふつうにみられる墓建築の慣習であるが、サルタナット時代には、知られる限りでは、全くその例をみない。前章で述べた *Sulṭān Ghārī* すなわち, *Nāṣir al-Dīn* の墓の場合は、地下墓室は立派にあつても、上に墓石があつたものかどうかは分らない。少くとも現状ではないのである。しかし、この *Sulṭān Ghārī* の例からみて、この地下室をも眞の墓室であると推定するのは、ほとんどあたつていてのではないかと思われる。上部の室内の床には、墓石の北方に數個の四角な小穴があり、地下室との光とりの穴がのぞき孔の役目を果しているが、これは、地下室内には關係なく、北面からの階段を降りたところに開いている

のである。

2. 歴史的背景と文獻資料について

Sultān Shams al-Din Iltmish について、ここにその経歴と歴史的役割についてくわしく述べることは必要あるまい。彼は、北西インドにトルコ系ムスリムの権力支配の基礎をおいた Quṭb al-Dīn Aibak に次いで、デリーを首都としてその支配を確立した最初のトルコ人スルターンであり、どのインド通史にも相當のページが割かれている人物であるからである。

彼は Alwarī (アルワリー、あるいは、Ilwari, イルワリー) 系のトルコ人で、Quṭb al-Dīn の宮廷奴隸 (バンド、bandah) の出身であり、その忠實な部將としての第一人者であつた。彼がスルターンとしてサルタナットに君臨統治していたのは、1210年から1236年までであつた。(私自身、この Shams al-Dīn 時代の支配上層についての政治的状況と、いわゆる「奴隸貴族」について、すでに三つの論文を書いたし、また拙稿の小通史を参照されたい。⁽⁹⁸⁾) 建造物に關していえば、彼の時代にいわゆる Quṭb Minār は完成し、Masjid-i Qūwat al-Islām の規模も擴大された。629 A. H. 年には、ベンガルで死んだその長子の Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓がおそらく完成したであろうことは、前章に記したとおりである。彼の同時代の文獻史料のうちもつともまとまっているものは、本稿でもすでにしばしば引用した Ṭabaqāt-i Nāṣiri であるが、彼の時代の碑文は、デリーにも、前章にあげた Sultān Ghāri の東門のアラビア語歴史碑文のほか、Quṭb Minār, Masjid-i Qūwat al-Islām などに残っており、その他デリー発見のものや地方に残存あるいは発見されたものがあるが、本稿には直接關係ないので、一切省略することとする。⁽⁹⁹⁾

ところで、この、いわゆる Shams al-Dīn の墓の内外壁面その他を飾る見事な碑文であるが、この數多い貴重な遺文のなかには、ひとつとして歴史的な内容をもつものはないのである。年代を示すものはもちろん、歴史的な意味で

の固有名詞も一語として見出されていない。⁽¹⁰⁰⁾従つて、この墓は、前章で詳述した Nāsir al-Dīn Maḥmūd の墓の場合と異なつて、もつとも信頼性の高い同時代の残存碑文がなく、従つてそうした資料からは建立に關して、あるいは墓の主人公についてのなんらの具體的な事實の手がかりもつかむことができないのである。この豊富な碑文は、ほとんどコーランの章句やその他の宗教的な文章であり、その書體や様式から、この墓の建立の相對的な年代比定への手がかりを供するのみである。

それならば、文獻史料の面ではどうであらうか。この點でも、この建造物の建立の歴史について記していると考えられる史料は、奴隸王朝初期の時代はもちろんのこと、サルタナット全期を通じて、全く一行として見出されていないのである。のみならず、ムガル帝國アクバル時代の三大史書にもそのことについてふれているものはない。

ただ、ここに同時代の文獻で、Sultān Shams al-Dīn Iletmish の墓についてふれているものがひとつだけある。それは、ほかならぬ Minhāj al-Dīn の Ṭabaqāt-i Nāsirī であつて、この文章は、おそらく、Iletmish の墓について、明瞭に記している文章としては、同時代の史書はもちろん、サルタナット時代全期を通じて唯一のものといつていいのではないであらうか。しかも、次に引用するその記述は、私の知る限りでは、これまでどの學者も、いかなる著書も引用していないものである。それは、640 A. H. 年 (1242—43 A. D. 年) に、Malik 'Izz al-Dīn Aitkīn が、デリーの主權を奪つたのちのできごとで、マリクやアミールたちが、彼の權力奪取に對して抵抗するときのことを Minhāj al-Dīn が記録した個所である。次に、その原文を載せる。⁽¹⁰¹⁾

در حال اختیار الدین ایتمین کهرام و تاج الدین سنجر قتل و نصره الدین ایتر و
چند امیر دیگر بر روضه سلطان شمس الدین طاب ثراه جمع شد و آن منادی را
اشکارا کرد

ここに記述されている事件は、Iletmish の子の Sulṭān Mu'izz al-Dīn Bahrām Shāh の治世のできごとであり、要するにマリクやアミールたちの勢力者が「Sulṭān Shām al-Dīn の墓廟」に集つて、スルターンの宣言を拒否して反亂を企てた事実を記したものである。著者 Minhāj は、もちろんデリーに自ら住んでいた人物であり、しかも、このできごとがおこつたのは、この記述を信頼すれば、1242—43年ごろのことであり、Sulṭān Shams al-Dīn が死んでからまだ6年から8年くらいしか経っていない時期のことなのであつた。まず、上の原文の英譯を紹介するが、この文章から、私は少なくとも次に記す三つの點が、指摘できるように思うのである。

“Immediately, Ikhtiyār al-Dīn Aitgīn Kuhrām, Tāj al-Dīn Sanjari Qutluq, Nuṣrat al-Dīn Aitmar, and some other Amirs assembled at the mausoleum (rūzah') of Sulṭān Shams al-Dīn—May his grave be fragrant! — and made the proclamation public……”

- (a) 1236 A. D. 年のころまでに、Sulṭān Shams al-Dīn の墓廟がすでにでき上つていたこと。
- (b) 原文に rūzah' (墓廟) とあるところからみて、その墓は、墓石のみの如きものでなく、建物をもつものであつたと推定されること。
- (c) この墓は、デリーあるいはその周邊地域に存在したこと。

以上の如く考えてみると、この記述は、直接に、Sulṭān Shams al-Dīn の墓について述べる意圖で書かれたものではないが、同時代の關係史料が皆無というなかにあつて、彼の墓そのものについての、まことに貴重な遺文といつていいであろう。

この Minhāj の記述をのぞくと、その他のサルタナット時代の著者は、誰ひとりとして、直接にはつきりとこの墓についてふれているものはいない。ただ、トゥグルク朝の Firūz Shāh の時代に、彼自身が記述したとふつういわれている、前章にもしばしば引用した Futūhāt-i Firūz Shāhi には、Shams

al-Dīn の墓と推定される建造物についての記載がのこっているのである。それは、彼の名をもつていわれている學校 (madrasah-i Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish) の再建と補修とについてはじまつている記述で、私がすでに前章 Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓の項でくわしく述べ、原文を引用し、また翻譯を載せておいたところである (前章 30 ページ参照)。そして、この學校 (madrasah) に関する文章につづいて、「墓の柱……」(“sutūnhā‘i maqbarah……”) の再建修復を記した文章がつづくことも、すでに記したとおりである。その際、これまでの大部分の著者は、この「墓」(maqbarah) もまた、「學校」(madrasah) につけられた形容固有名詞である Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish のものと解したことも、前章でくわしく説明しておいた。そして、その結果は、この Futūhāt の記載が、クトップ地域に現存するいわゆる Sulṭān Shams al-Dīn の墓の現状とはあわず、むしろ Sulṭān Ghāri と俗稱されてきた Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓のことを述べたものであろうという説が、多くの學者や著者によつて、その細部の解釋の内容やニュアンスは異なるにしても、となえられてきたのであつた。従つて、Futūhāt の前述の記事は、トゥグルク朝の時代に、Sulṭān Shams al-Dīn の墓であるかも知れない建造物に言及していると推測される記述として、きわめて重要な意味をもつてくるのである。

このほかにも、サルタナット時代はもちろん、のちのムガル時代に至る史書は、すべてこのスルターンの墓にはふれていない。また、デリーの遺跡についてかなり多くの記述をのこしてくれている Ibn Battūṭa や、また有名な Tīmūr (ティームール) のデリー侵攻のくわしい記録をふくんでいるところの、15世紀前半の Malfūzāt-i Tīmūri (マルフザーテ=ティームーリー) および Zafar Nāmāh (ザファル=ナーメ) と呼ばれるふたつの史書にも、この重要なスルターンについての記述はあるし、彼が造營したといわれるモスクや貯水池 (tālāb, ターラーブ) などについての説明は出てくるが、このスルターン自身の墓については、全く一行の記載もないのである。

以上が、Sultān Shams al-Din の墓に關連する、同時代あるいはデリー＝サルタナットおよびムガル前期の碑文・文獻資料などについての問題點の概要である。これを要するに、この章で問題にしている、クトゥブ地域現存のこの四角無蓋の墓の建物についていえば、碑文、文獻の兩者からみて、これを Sultān Shams al-Din の墓と斷定または推定し得る根據は全くひとつもないということである。また Ṭabaqāt-i Nāṣirī にみえるこのスルターンの墓についての唯一の言及章句、および Futūḥāt-i Firūz Shāhī の問題の文章にみえるこのスルターンのものと推定される墓についての記述も、いずれも、現存のこの建造物を、積極的にこのスルターンのものと比定する材料としては、ほとんど役立たないばかりか、後者は、むしろ否定的でさえあるのである。

3. 建立に關する從來の諸説について

さて、さきにも述べたように、この墓は、存在する場所が場所だつただけに、早くから一般の旅行者の注目するところであつたらしい。従つて、この建物は、せまい専門の學者や研究者ばかりでなく、ひろく一般の著者によるデリーの案内記などにも、しばしば好んで引用され、言及される遺跡のひとつであつた。そして現在でも、クトゥブ地域の觀光に際して必ず案内される名所のひとつとなつている。ここでは、そうした數多くの言及書のなかで本稿の視點からして重要なものだけを選んで紹介しておきたい。この建物の場合は、碑文や文獻史料が缺けているだけに、様式・構造上の研究がきわめて大きなウェートをもつてくるのであるけれど、ここでも前章と同じように、本稿の問題點からして必要な限りにおいてふれておくにとどめる。ただし、ドームの有無に關しては、さまざまな意見があるので、それらが歴史的な問題點と關連する限りにおいて、次節に簡単にまとめておくことにした。

ここにとりあげる主な問題點は、1236年4月と推定される Sultān Shams al-Din の死亡年月との關連において、彼の墓がいつ建てられたか、また、だ

れによつて建てられたか、ということである。

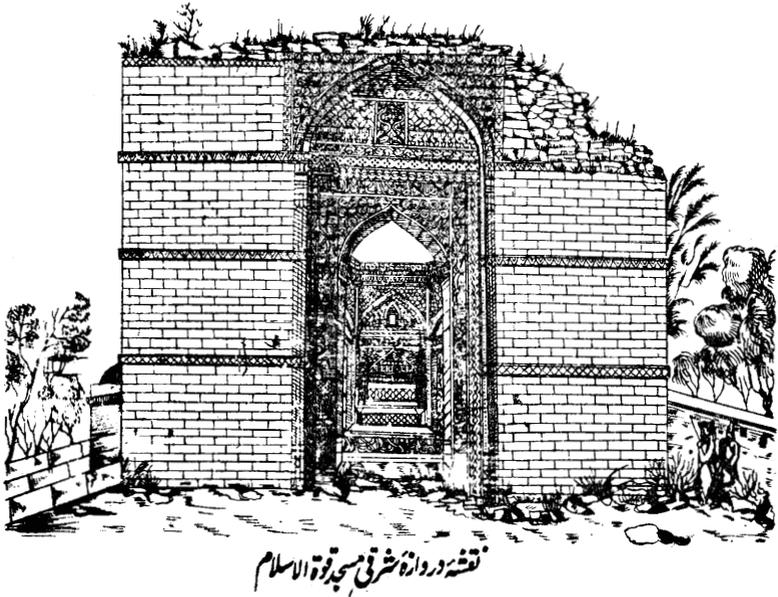
この墓については、Sultān Ghāri の墓と異なつて、Ahmad khan よりさきに刊行されている19世紀初期の小論文に言及されている。それは、Asiatick Resarches という、19世紀はじめ以来のふるい雑誌の第14巻(1822年刊行)に掲載された小報告で、Walter Ewer (ウォルター=イワー)なるひとの“Cootub Minar” (すなわち Quṭb Minār) およびその附近の遺跡についての短い報告文である。そのなかでこの寄稿者は、クトップのモスクのスクリーンについて述べたあとで、次のように簡単に、この墓について記している⁽¹⁰²⁾のである。

“To the west of the northern entrance of the arch is a tomb called that of Shams-ud-din Altemsh, but I was unable to decipher any of its inscriptions.”

彼は、この墓の内壁面の豊富な碑文のなかに、歴史的なことがらを含むものがあつたと考えていたらしい。まことにもつともなことである。それはともかくとして、この W. Ewer なる人物の寄稿文によつて、1820年代のはじめに、このクトップ=モスクの西北隅裏手にある墓が、一般に Sultān Shams al-Din の墓と考えられていたらしいことがわかるのである。この點、この短かい文章は重要な意味をもっている。ただし、彼は、この墓については、以上に引用した記述のほかには、なにもつけ加えていない。

(1) Sultān Shams al-Din の墓の建立についての最初の考察は、やはり Ahmad Khan にはじまるようである。彼は、その初稿本のなかで、この墓の建立について、次のように述べている。ここでは、ウルドゥー語の原文を英譯して紹介しておこう。⁽¹⁰³⁾

“This Bādshāh died after coming back from the journey of Sistān, and he was placed behind that Qūwat al-Islām Masjid. From reading and seeing the books of history it is known as follows: This maqbarah must have been built in the reign of



挿圖 8. Sultān Shams al-Dīn の墓，東面（Ahmad Khan 1904年刊本挿畫）
（ただし，この畫のウルドゥー語の説明は誤り，本稿註21參照）

Sultān Rukn al-Dīn Firūz Shāh and Sultān Raḡiyah Bigam. Even if the history of its construction was not known from any books, still Sultān Shams al-Dīn Iletmish died in the year of 633 A. H.. Therefore, till now, about 630 years have passed.”

ここでは，Ahmad Khan は，この墓は，633 A. H. 年のスルターンの死後，おそらくその子の Sultān Rukn al-Dīn か，あるいは Sultān Raḡiyah の治世に建てられたといつているのである。しかし，彼の改訂稿本では，

「この墓は，おそらくは，彼の娘であるところの Raḡiyah Sultān Bigam
（ラズィヤ＝スルターン＝ベーガム）によつて建てられたものであろう」
⁽¹⁰⁴⁾
と述べているのである。

彼が、その初稿本にいう「歴史の書」というのが具體的になにをいうのかはもちろんわからない。それは、このスルターンの墓の建立についてふれた特定の歴史書をいうのではなくて、Sultān Shams al-Dīn の支配とその治世について記した一般的な史書のことを述べていることは、まず明らかである。だからこそ、そのすぐあとの記述では、「その建立の歴史については、いかなる書物からも知ることができないにしても、ともかく、Sultān Shams al-Dīn Iletmish は、633 A. H. 年に死んだのである。」と記しているのである。結局、Ahmad Khan が、最初には Rukn al-Dīn と Raḡiyah の治世にといひ、のちには Raḡiyah が建てたといっているのも、あくまで推測にすぎない。このふたりは共に Shams al-Dīn の子で、しかもスルターンの位についた人物である。しかも前者 Rukn al-Dīn の治世はわずかに7カ月ほどの短い期間にすぎず、そのすぐあとのスルターンとなつた女帝 Raḡiyah は、約3年半の統治をつづけることができた。そこで、どちらかといえば彼女の治世の間に父帝の墓が建立された可能性の方がつよいと考えた結果が、ここに紹介した Ahmad Khan の推論となつたのであろう。すなわち、彼の結論は、決定的な資料のうえに立つてのものではなく、當時の政治的状況から推測した結論と考えていいであろう。

この Raḡiyah 建立説は、もし Sultān Shams al-Dīn がその生前に自分の墓を自ら造營させていたのでないと考えれば、もつとも可能性がつよいと、私も考える。つまり、Shams al-Dīn の死亡の直後に、スルターン位継承の争いがつづき、とくに Rukn al-Dīn Firūz Shāh と Raḡiyah との争いがあつた。ただし、さきにも述べたように、この Raḡiyah の次のスルターンであつた Mu'izz al-Dīn Bahrām Shah の治世の末期にあたる 640 A. H. 年 (1242—43 A. D. 年) には、すでに Shams al-Dīn の墓廟は存在していたと推定される (67 ページ参照) ので、私も、わずか半年の、混乱していた Rukn al-Dīn の治世よりは、少なくともその初期には政情がかなり安定していたと思われる

Raziyah の治世の間にこの建物が建立されたと考えた方が、より自然であろうと思うのである。もつとも、この推論は、問題のクトゥブ地域現存のこの墓を、Sultān Shams al-Dīn の墓と考えた場合についてのことであつて、本稿の末章で述べるように、異つた推論に立てばその結論も自ら異なってくるものであることを、あらかじめ述べておきたい。

この Raziyah 建立説は、Ahmad Khan がそれについて述べていることもあり、彼の書物を参照している後代の著者には、同じような意見を述べたものがある。ほぼ年代順にみってみると、19世紀後半の中ごろの案内記 “Delhi” (1873年刊) の著者 H. G. Keene は、「彼の息子と娘」の建立として⁽¹⁰⁵⁾いるが、それは、Ahmad Khan の初稿本の所説を受けついでものと思われ、また、H. H. Cole の遺跡保存のための報告書 (1884年刊) も、やはり Raziyah 説を採つて⁽¹⁰⁶⁾いる。20世紀に入つてからは、Ahmad Khan に據るところの多い H. C. Fanshawe (1902) も、Raziyah 説にほぼ賛成⁽¹⁰⁷⁾している。しかし、その他の著書がそれほどこの説を支持しなくなつていのは興味がある。ただ、前章でもあげたドイツ人の Friedrich Wetzel は、やはり、“Sultanin Rosija Begam” の建立として⁽¹⁰⁸⁾、この女帝建立説を述べている。

(2) このような Ahmad Khan にはじまる Raziyah 建立説、あるいは Ruhn al-Dīn と Raziyah の治世の間に建てられたという説に對して、A. Cunningham となると、ずつと慎重な立場をとつており、A. S. I. の1862—63年度の報告書のなかでは、「Qutb Mnsque と同じ時代」に建てられたものと述べて⁽¹⁰⁹⁾いるだけである。この説に似たものとして Sultān Shams al-Dīn がその存命中に、クトゥブのモスクの南と北の擴張部と同時に建てたものであると考えたものもあつた。この説も案外に多い。例えば、C. J. Campbell であつて、彼の考えの主な根據は、クトゥブのモスクのスクリーンのうち、このスルターンによる擴張部分の諸特徴がこの墓でもくり返されていること、そしてまた、こうした建設事業は、その治世があまりにも短く、しかも混亂していた

ところの、Shams al-Din の死の直後の二人の後継者たちの時代には無理であつたという推論にもとづくものである。⁽¹¹⁰⁾この推察も、一應の説得性はそなえてはいるが、もともと決定的というべき證據をもつものでもなく、彼のいわゆる諸特徴にしても、このスルターンの存命中とその死後の數年間というような短期間に著しく變ると考えるのも妙なことである。Carr Stephen は、例によつて Ahmad Khan の敘述をかなり引用しているのであるが、この建立問題についてのみは、上に述べた Campbell と同じ生前建立説を引き、さらに彼が Ahmad Khan と並んで信賴していた A. Cunningham がこのことについて決定的な意見を述べていないことにもふれている。そして、自分ではなんらの⁽¹¹¹⁾結論的推察も述べていない。

20世紀に入つてからの著書は、ほぼ、生前建立説をとるものと、結論を出し難いとするものとの二派に分れるようである。Bashiruddin によるウルドゥー語の著書は、この墓の場合もほとんど Carr Stephen の記述の翻譯といつてよいほどで、同時に、Ahmad Khan や“Kamibil”⁽¹¹²⁾（すなわち上述の Campbell）、および Cunningham の説をも併記している。A. S. I. の膨大な報告書である Delhi Monuments List も、Ahmad Khan の説を引用しながらも、“in all probability” という副詞句を用いながら、このスルターンがその存命中に造つたらしいと推察している。⁽¹¹³⁾1926年刊の Delhi Museum のカタログも、墓建立の年代比定に關しては、ふつうにはその没年をとるという方法について註記したのち、この墓についてのみは、「この特殊な場合には、墓はおそらくは、Altamsh 自身によつて建てられたもの」として、同じ A. S. I. の Delhi Monuments List の見解を支持している。⁽¹¹⁴⁾同様に、同じ A. S. I. 刊行の Memoir No. 47 (Ashraf Husain) が、この説をそのまま採用しているのは當然とも考えられるが、また、現在、ケンブリッジ大學の T. G. P. Spear も、彼がこの建物を自ら造營したと、生前建立説をとつている。⁽¹¹⁵⁾

(3) 以上に述べてきた Raziyah に代表される後継者による建立説および

Iletmish 自らによる生前建立説に對して、この墓そのものについて疑問をもつた人びとがある。ケンブリッジのインド通史第Ⅲ卷の遺跡の章を受けもつた J. Marshall は、通説をのせる一方、すでに私が前章で述べたとおりに (39—40ページ参照) Futūhāt の問題の文章中にみえる「墓」は、このクトップ地域の墓ではなく、いわゆる Sultān Ghārī の墓であると推測し、結局問題の文章は Futūhāt の著者の誤りという考察を行つたのである。しかし、Marshall は、現存するこの墓の建立者については、全く沈黙しているのみである。⁽¹¹⁶⁾

クトップ地域の遺跡の総合的調査を指揮して報告書を刊行(1926年刊)した A. S. I. の J. A. Page は、その補註のなかにおいてではあるが、もつとはつきりした疑問を提示している。これについては、すでに私は前章において述べておいたが (38 ページ)、彼は、はつきりとこの墓と「Altamsh の墓」との“identity”に疑問をもち、つぎのように記しているのである。⁽¹¹⁷⁾

“It is thus quite possible that the tomb ascribed to Altamsh may not be his.”

この疑問は、既述のように、Futūhāt-i Firūz Shāhī の記述と、現存する Sultān Ghārī の建造物との関連で出されたものであるが、いずれにせよ、クトップ地域にあるいわゆる Sultān Shams al-Din の墓についての通説に對して、ひかえ目ながら疑問を明示した點で、注目されてしかるべきであろう。

なお、Carr Stephen, Cunningham (vol. XX, 1885), Delhi monuments List, Sharp, Page, Marshall などが、Futūhāt の問題の文章と現存の Sultān Ghārī との関連について述べた、このスルターンの墓に對する見解は、前章にかなり詳細に紹介検討したので、本章ではくり返して述べないことにする。

このように、この墓の建立者については、決定的な結論を出し得るだけの證據がないので、もちろんその建立の年代についても決定的なことはなにひとつ分らないといえよう。そもそも墓の建物が、必ずしもその埋葬されている主人

公の没年に建てられると考えること自體が正しいとはいえないのであるが、かりに、その没年に建てられたと簡単に推定してしまつている場合でも、イスラム曆の換算の間違いで西曆年代を1年あやまつている場合がかなりにあるのである。彼の死は、Ṭabaqāt-i Nāṣiri によると633 A. H. 年の Sha'abān 月の20日とあり、これは、西曆に換算すると、1236年4月に相當する。しかし、19世紀の出版物には、1235年としているのが多いのである。一般的にいつて、これまでの多くの著書は、この年代については、かなりに不正確で無神経であるといえるのではあるまいか。⁽¹¹⁸⁾

4. ドームの有無、およびその他の問題について

この墓は、すでに述べたように、現在は天井部がなく、無蓋で、内部に入つても空が見とおせる。このことは、最近に天井が落ちたことを意味するわけではない。すでに、19世紀のなかばの Ahmad Khan や A. Cunningham の時代からすでにそうだつたのである。従つて、もともと、この天井部がどのようなものであつたかについては、従來、諸説が行われてきた。このことについては、考古學的に構造や様式の問題とからんでくるので、ここにくわしく述べる餘裕はないが、一應、従來の説のいくつかのものについて簡単に検討しておくこととする。

まず、A. Cunningham の所論である。彼は、その1862—63年の報告書のなかで、「屋根はないが、もともとは“overlapping Hindu dome”で蔽われていたと考えるべき十分な根據がある」と述べている。⁽¹¹⁷⁾ Cunningham の主張の根據の一つは、ヒンドゥー=ドームに用いられる圓形まわりもち (circular cornice) と思われるものが残つているということにあるが、この説によると、ドームはもともとあつたものが落下したものと考へているようである。H. G. Keene (1873) も、この Cunningham 説に賛成している。Cunningham にことごとくに對立して異見をととなえた Beglar の1871—72年度の A. S. I. 報告

書は、クトップ地域の諸遺跡のヒンドゥー起源説をつよく主張しているが、この墓についても、“another instance of a converted Hindu structure”として、ヒンドゥー起源説を一應とついている。ただし、さすがの Beglar も結局は、結論はのちの課題として残しているが、ヒンドゥー＝ドームがかつて存在したという推測は、もちろん積極的に出している。Carr Stephen は、Cunningham 説を述べながらも、彼自身が“examine”した墓の南壁の頂部の“remains”をみて、この墓にはもと屋根があつたことを確信すると、その結論をはつきりと支持している。⁽¹²⁰⁾

こうした諸説に對して、20世紀に入つてからの諸著書はどうであろうか。H. C. Fanshawe は、さきにも述べたとおり、この墓の Raziyah 建立説に傾いているひとりであるが、「ドームが結局、未完成に終つたことはあり得ることである」とつけ加えている。その眞意と根據とは不明であるが、察するに、繼承争いと権力黨争とをめぐる、戦亂相づく女帝の數年間の治世にあつて、ドーム建築のまだ未發達なこの時期に、このような大ドームの完成は不可能に終つたという意味でそう述べたものと解してよからう。ただし、彼は、Carr Stephen が自ら見出して喜こんだ南壁頂部の基部の點については、その存在は屋根をのせる意圖があつたことを示すものと、自説の辯護にうまく利用している。⁽¹²¹⁾同じ證據でも、その使い方によつて、かなり異なつた結論を導き得るものだと、いささか苦笑せざるを得ない。

つづく G. R. Hearn (1906) の説も、またちよつと新味を加えているところがある。彼は、ドームがもともと存在したかどうかは確言はできないとしているながらも、彼の考えは、結局は、はじめからの無ドーム説に傾いているようである。それには、文脈を整理してみると、(a) 「この時代に28フィートに及ぶドームを創り出せたかどうか」疑しいこと。(b) おそらくは、1236年の Altamish 死後の混亂のために、仕事は途中で放棄された。(c) かりにドームがもともとあつたとして、それがのちに落下したとするならば、この王の墓は損傷

を受けたにちがいない。ところが、「それはなんらの損傷をも受けたようにはみえない」という三つの點が、彼の所説の主な根據のようである。しかし、基台はともかくとして、現在の墓全部がもとのままであるとは到底思えない。⁽¹²²⁾

1912年刊の Wetzels は、ドーム (Keppel) はくずれ落ちたというのみであるが、その後の Delhi Monuments List に述べられている説は、Fanshawe の考えに似ており、ドームは現存していないが、少くとも屋根をつくる意圖はあつたことを示す證據は残っていると述べている。⁽¹²³⁾ ほぼ同時代の Bashiruddin のウルドゥー書は、“Futūhāt -i Firūzi” に言及しつつも、結局はあいまいなことしか述べてず、ここに詳説する必要はないであろう。⁽¹²³⁾

Henry Sharp は、トゥグルク朝の Firūz Shāh が、クトップ地域現存のこの建物を補修したと信じている一人であるが、このスルターンが「ドームをつけ加えなかつたのはおかしい」と述べている。Sharp は、この建物の構造はドームをのせるべき造り方だが結局は無蓋だつたという説をとつており、その根據がちよつと面白い。すなわち、「豊富な光線は内部の彫刻を誇示するのに有用」だつたのでドームをのせなかつたというのである。⁽¹²⁵⁾ これは、きわめて興味ある思いつきではある。墓室が無蓋であるのは、ムスリムの墓の場合に決してその例がないわけではない。スーフィーの聖者の墓にはむしろそれが多いし、また著名な支配者の墓のなかでも、ムガル時代となると第6代皇帝オーラングゼーブをはじめ相當數その例を指摘できるのである。それはともかくとして、構造上の考察の餘地のあるのを別とすれば、この光線効果の問題は、私はきわめて面白い考えだと思ふ。この建物の場合、西壁は閉ざされているし、三面の入口のアーチはかなり高いが、この屋根がそのままクトップ = モスク式の明り通りの穴のないヒンドゥー = ドームで蔽われていたとすると、壁面の上部に多い彫刻はたしかに暗くて、自然光では、その美的効果はほとんど減殺されてしまうであろう。そして、こうした光線の効果が工事途中で考えられたことは十分にあり得ることかも知れない。ただし、このことが屋根を蔽う計畫まで放

棄させるだけの力をもっていたかどうかは疑問である。また、もし彫刻の効果を尊重するとしても、人工の燈明を内部にともすことも十分あり得ることであろう。それよりか、この当時の墓室の彫刻が、來訪者や參拜者の感覺に訴える美的効果をはたしてねらっていたかどうかとも、大いに疑問としていいと思う。いずれにせよ、この Sharp の興味ある考え方は、結局、それを裏づける有力な證據もなく、一種の思いつきの推論にしかすぎない。

J. A. Page はこうした異論に對して、もともとドームが存在したと考えている。その證據はすでに先人があげている南面頂部のモルタル殘存部らし⁽¹²⁶⁾い。歴史家の Habibullah (1945) も、またもつとも新しい Burton-Page (1963)⁽¹²⁷⁾ も、もともとドームがあつてのちにそれが落下したという説をとつている。一方、これに對して Percy Brown は、なんらかの形の低ドーム (a shallow dome) の存在を、ドーム基部の殘存部分やそのほか「附近によこたわつている曲つた斷片」から推測しているのであるが、結局、天井部の“excessive span”のために、重さに堪えかねて崩壊したものと考えている。そして彼は、ここで、その構造、様式の變遷と發展とを辿る著書にふさわしく、ムスリム支配初期のドーム造りの歴史的意義と限界とを述べている。⁽¹²⁸⁾

最後に、もう一つ興味ある異説を紹介しておく。それは、現在ケンブリッジにいる P. Spear の筆になるデリー遺跡案内の小冊子のなかの、しかも補註のなかにおけるみじかい敘述である。それには、「おそらくは、材木の梁 (beam of timber) で造られた、平たい屋根 (a plain roof)」があつたのだらうという推測をして⁽¹²⁹⁾いる。サルタナット時代のデリーの建造物で現存しているものの大部分は、石造ないしはモルタル併用が多いから、とかく木材という資材を忘れがちである。しかし、ハルジー朝やトゥグルク朝時代の宮廷内の著名な「千本柱 (hazār sutūn) の間」などには、木材が有効に利用されていたので、右の Spear の推定は必ずしも荒唐な考えではなく、興味ある推論というべきであろう。たしかに一つの假設としてこれも興味があるが、もちろんなんらの確證を

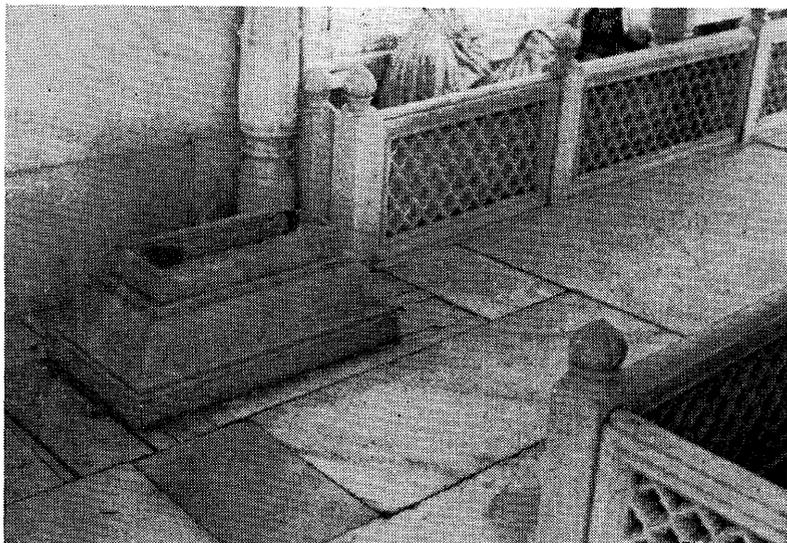
見出し得る性質のものとはいえない。

ドームの有無その他について、この墓をめぐる問題点はほかにもあるが、それらは主として様式・構造上の問題であるから、ここでは省略することにする。ただ、さきにもふれたように Beglar はこの建物のヒンドゥー起源説を唱はっているが、前章の Sultān Ghāri の場合と異なつて、この墓の場合には、他にヒンドゥー起源に説き及んだものはたれもないことに一言ふれておきたい。さらにもうひとつ述べておきたいのは、地下室の問題である。Bashiruddin は、「21の階段を降りて、地下室 (*tah-khānah*) にいける。本物の墓 (*qabar*) はこの部屋にあり、上のもは墓石 (*ta'awidh*)⁽¹³⁰⁾ である」と記している。しかし、彼の書いていることはもちろん、この部屋のなかに入つたものの記録ではない。すでに述べたように、この部屋についての記述を残した著書に、私はこれまで接したことがないのである。しかし私も、この点では、Bashisuddin の敘述にほぼ賛成であることはさきにも述べたとおりである (64 ページ参照)。前章の Sultān Ghāri の地下墓室の場合には、屋根の上に墓石はないから、もし、この墓の場合、地下の部屋のなかに眞の墓があるものとすれば、上部の墓室の床上にもう一つの墓石をもつものとしては、これがサルタナット時代のデリーに現存する墓の中でただひとつの例であるといつてよい。この形式が再びあらわれるのはムガル帝國の時代に入つてということになるのであるが、この慣習の起源はどこにつながるのか、またこのことがらになにを意味するのか、さまざまな點で重要な問題をふくんでいると思うのであるが、本稿ではこれらの問題にはふれる餘裕がない。ただ、このいわゆる *Iletmish* の墓についていうならば、上の部屋の床上の墓石が、碑文のある基台はともかく、高い立派な墓石すべてが、オリジナルなものかどうかは、私には斷言できないことだけ、ここに附言しておこう。

Ⅳ. その他の墓について

1. Sulṭān Shams al-Dīn の子と甥といわれるふたつの墓について

Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish の子のうち、さきにあげた Nāṣir al-Dīn Maḥmūd のほかに、デリーに墓があると一般に信じられているのは、Rukn al-Dīn Firūz、Raḥīyah、および Mu'izz al-Dīn Bahrām の三人である。この三人のスルターンの墓とされている建造物については、本稿の續稿である「デリーに現存する奴隸王朝中期の墓について」のなかで述べることになっている。これらの三人の墓のほかに、一般にも全く知られていず、また、私が本稿でくりかえし引用あるいは参照してきたところの従來の研究書や案内記の類も、ただの一書をのぞいて全く言及していないものに、次のふたつの墓がある。



挿圖9, Sulṭān Shams al-Dīn の一子の墓といわれる墓石

そしてこのふたつの墓は、これまでもしばしば引用してきたところの A. S. I. による Delhi Monuments List にのみ報告されているものである。

- 1) Sultān Iletmish の子の一人の墓
- 2) Sultān Iletmish の甥で 'Alā' al-Dīn なるものの墓

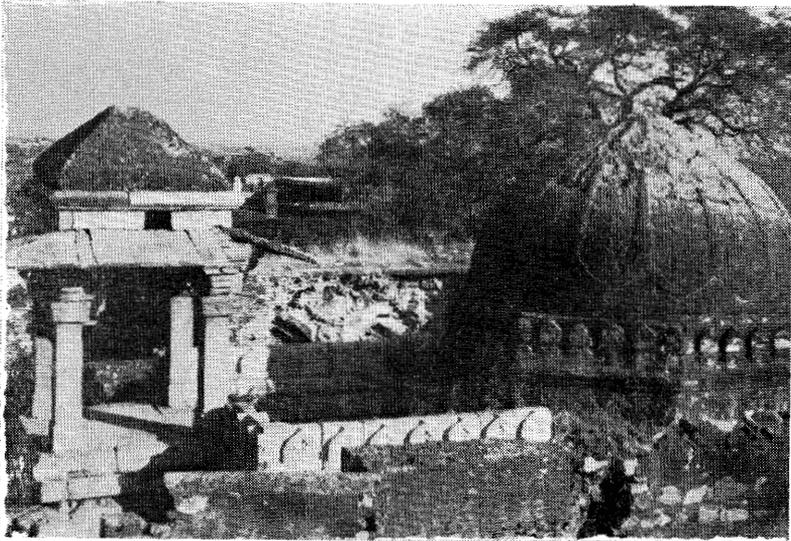
このふたつの墓は、いずれも、デリー南郊のクトゥブ地域の西方にある部落 Mehrauli のなかにあるクトゥブ＝サーヘブ（前述 17 ページ参照）の境内のなか、およびそのすぐ近くとにある。すでに述べたように、この二墓は、Delhi Monuments List に記載されているのみであるが、私が自ら會つて質問した附近の數人の住民は、誰もその傳承や歴史についてはもちろん、その墓の所在さえも知らなかつた。従つて、現在では、まず一般の人びとから全く忘れ去られてしまつた遺跡といつていいであろう。

(1) Iletmish の一子とされるものの墓は、實は、單なる墓石に過ぎないのであり、Delhi Monuments List, Vol. III, No. 48 (p.42) に報告されている。奴隸王朝時代のチシュティー派 (Silsilah-i Chishtiyā) の聖者のひとりで、インドでもつとも知られたスーフィーのひとり、通稱 Quṭb Sāhib の名で知られている Shaiikh Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī のダルガーの境内に、この墓は現存する。すなわち、ダルガーの境内で Quṭb Sāhib の墓に入る内門近く、その東側に、Maulānā Fakhr al-Dīn (ファハルッディーン) の墓が現存するが、この墓の大理石造りの立派な基壇の、その同じ大理石の床の上、その東南隅に小さな大理石造りの墓石がある（挿圖9）。これが Iletmish の子のひとりの墓といわれたものなのである。⁽¹³¹⁾ 附近の住民も知らないらしいことは前にも述べたが、現在では、Quṭb Sāhib のダルガーのカーディム（廟守）親子でさえ、私の質問に對してこの墓の名前も由來も全く知つていながつたにはおどろいた。それほどに、もうこの墓についての傳承も忘れ去られてしまつていようだ。Delhi Monuments List は「傳承によれば Iltutmish の息子のひと

デリーに現存する奴隷王朝初期の墓について

りの墓とされているが、明らかに子供のうちに死んだもの」とのみ述べるにとどまり、その建立の時代を Sulṭān Shams al-Din Iletmish 治世の1210—35 A. D. としている。しかし、これ以上の歴史的な考察は企てようにも意味がない。ともかく、問題の墓石は、ここに掲げた写真でもすぐわかるとおりにムガル帝國の時代のものであることは少くとも間違いのないところである。従つて、ここでは、このような傳承がムガル帝國以降のこの現存の墓石についていわれているということを記しておく以上に、歴史的につけ加うべき資料も、また特別の論據もないのである。

(2) Sulṭān Iletmish の甥の ‘Alā’ al-Din なるものの墓、とされるものは、Delhi Monuments List, Vol. III, No. 71 (pp. 54—55) に報告されているものである。これは、前述 Quṭb Saḥib のダルガーの東方にあるムガル末期



押圖10. いわゆる Sulṭān Shams al-Din の甥の墓を圍む建造物（上部）

の宮廷、すなわち悲劇的な生涯を送ったあのBahādur Shāh I (バハードゥル＝シャール2世)の王宮の廢墟の南壁のすぐ外側に接して現存している建造物のなかにある。この建造物は、奇妙な構造をもっており、三つの部分から成っている。(挿圖10参照)すなわち、その南側の建物は、ドームを頂く四角12本柱のパヴィリオン型の建物である。そのすぐ北に接して、屋根のない露天の墓所があるが、その圍壁の上部には、フリーズとバトルメントとがつけられている。さらにその北側はつづいて4本柱のキオスク風の二階建の建物で、二階の部分は低ピラミッド型のドームをもつ *chhatri* (チャハトリ)となつている。いわばふたつの建物を組合せてその中間に露天の墓を挟んだかたちのこの奇妙な建造物は、現在のオールド＝デリー地区に現存するトゥグルク朝 *Firūz Shāh* の時代の有名な *Qadam Sharif* (カダム＝シャリーフ)の建物とどことなく似ている感じがするが、ずっとその規模は小さい。そして、この南北両端の二つの建



挿圖11、問題の墓石、このどちらがいわゆる 'Ala' al-Din の墓であるかわからない(註132参照)

物が墓であるのか、あるいは別の用途のものか、それぞれ異なつた時代のものであるのか、あるいは同時代に同時に構築されたものであるのかどうかはつきりしないが、この點はよく観察すれば、結論は容易に出し得るであろう。ちよつと見た上での私の推察では、南側の12本柱のパヴィリオンはロディー朝時代のもと思われるが、北方の4本柱二層の建物の方は、あるいは後期トゥグルク朝までさかのぼり得ると思われることだけを記しておこう。ここで問題にしている墓は、このふたつの建物の中間の壁面に囲まれた露天の部分のふたつの墓のうちのどちらかひとつであつて、‘Alā’ al-Dīn なるものの墓といわれ、Sultān Iletmish の甥という傳承があると Delhi Monuments List は述べている。そして、それと並ぶ他のひとつの墓石は Qutb Saḥib の弟子のひとり⁽¹³²⁾のものという(挿圖11)。この報告書では、この墓の建立年代を、Iletmish の治世(1210—35 A. D.)の期間においてはいるが、これも、右の傳承から推した單なる推測にすぎず、現存の墓石からはもちろん、この建造物全體のディスクリプションから到底導き出すことのできない年代比定であるといえよう。また、Iletmish の甥に、はたして‘Alā’ al-Dīn なる人物がいたかどうかについても、歴史的な決め手はひとつもないので、これもわからない。

これを要するに、さきに述べた Sultān Shams al-Dīn の一子の墓とされる遺跡と同じように、この甥の墓といわれるものについても、歴史的にはなんらの確證となるような資料はないのである。ただし、このふたつの墓をおく場所を中心として、南北兩端に現存する12本柱のパヴィリオンと4本柱二階のチャハトリとをそなえたこの建造物全體は、プランからも構造・様式の點でもまことに特異な遺跡というべきであり、その用途、年代の比定は、きわめて興味ある問題を提示するものであることを、ここにふたたびつけ加えておきたい。

2. Sultān Mu‘izz al-Dīn bin Sām と Qutb al-Dīn Aibak の墓について

本稿では、デリーに現存する奴隸王朝初期のものでとされる墓を扱うことにな

つていのであるが、ここにデリーに現存してはいないといわれているが、サルタナット時代の文獻のなかにそれにふれているものがあるので、補足的に述べておきたい墓がふたつある。それはいずれもインドにおけるトルコ系ムスリムの支配體制確立の基礎を作った史上有名な人物である。そのひとりには、ゴール朝の部將で、奴隸王朝の北インド支配の基礎をつくりあげた **Quṭb al-Dīn Aibak** (クトゥブッディーン=アイバク) であり、他のひとりには彼の奴隸主であり、史上いわゆる「ゴールのムハンマド」として、12世紀後半にインドへしばしば侵攻の軍を派遣したゴール朝のスルターンであつた **Muʿizz al-Dīn Muḥammad bin Sām** (ムイッズッディーン=ムハンマド=ビン=サーム) である。

サルタナット時代の文書のなかで、同時代の **Ṭabaqāt-i Naṣiri** は、**Quṭb al-Dīn** がラーホールで事故死したことを記しているが、彼の埋葬の状況やその墓についてはなにも記してはいない⁽¹³³⁾。しかし、サイイド朝の時代の史書である **Tārīkh-i Mubārak Shāhī** (ターリーヘ=ムバーラク=シャーヒー) には、この點に關して次のような記述がある⁽¹³⁴⁾。英語に譯してみると次のようになる。

“The Sulṭān died, and was buried at the auspicious city of Lāhūr. The late Sulṭān **Shams al-Dīn Iletmish** built a mausoleum (*khazīrat*) for him.”

この **Yaḥiyā bin Aḥmad** (ヤヒヤー=ビン=アフマド) の著書の文章では、**Quṭb al-Dīn** がラーホールで死んだのち、**Sulṭān Shams al-Dīn** がその墓を建てたことはわかるが、その墓の所在地は明示していない。ただ、それが死んだ場所のラーホールにあるらしいことが、上の文脈から讀みとれるという程度である。ところが、ムガル帝國の時代になつて、アクバルの時代の史書 **Muntakhab al-Tawārikh** (ムンタハブッ=タワーリーフ) では、その著者の **Al-Badāūnī** (アル=バダーオーニー) は、**Quṭb al-Dīn** が、**chūgān** (チューガーン、すなわち、ポロの一種の遊戯) をしていた最中に事故死したことを記したのち、「……その町 (*balдах*) で埋葬された。そして彼の墓 (*qabar*) は、いまでは、人

びとの巡禮地 (*ziyārat gāh*) になつている。」と述べているのである。⁽¹³⁵⁾ 少なくとも、この後段の記述は、Al-Badāūnī 自身が自ら知つていて記した文章のように思われるから、Quṭb al-Dīn の墓とされるものが、ムガル時代にラーホールにあつて、ムスリムたちの巡禮地のひとつとなつていたということは十分に考えられることである。しかし、私自身、1955年にはじめてラーホールへ行つたとき、Quṭb al-Dīn の墓なるものを見ていない、その後、これに関する文献を調べていないので、ここではこれ以上この問題にはふれないでおく。私はこれまで、彼の墓とされる建造物の寫眞をひとつもみたことはないのでこの點教示を仰ぎたい。いずれにせよ、ラーホールで死んだといわれる、このサルタナット初期の重要な人物の墓が、デリーになかつたことは、ほぼ信じてよいであろう。

次に、ゴール朝の Mu'izz al-Dīn bin Sām についてである。彼の墓は、現在、インドあるいはパーキスタン兩國のいずれの地にもない。しかし、サルタナット時代の文献で、たつたひとつだけそれに言及しているものがあるので、ここにふれておかざるを得ない。それは、いつも本稿で問題となつた Futūhāt-i Firūz Shāhī の次の記述である。ここでは原文は省略して、私譯⁽¹³⁶⁾ 英文のみをのせておく。

“The western wall (*dīwār-i gharbī*) of the tomb (*maqbarah*) of Sultān Mu'izz al-Dīn Sām and the planks of the door (*takhtahhāi-i dar*) had become old and rotten; so I restored this, and, in the place of the balcony (*chūbinah*), I furnished it with doors, arches, and ornaments of sandal-wood.”

この文章は、さきの Sultān Ghārī で問題となつた個所と同じく、Firūz Shāh の建造物補修および建立についての章のなかに出てくるのである。そして、この文章の前後に記されているさまざまな遺跡は、その大部分が、デリーおよびその附近にあつたものといつてよいのである。しかも、上に翻譯引用し

た文章は、「Sulṭān Muʿizz al-Dīn Sām が建てたオールド＝デリーのジャーマ＝マスジッド (masjid-i jāmaʿ-i Dihlī -i qadīm)」の補修に関する記述と、同じく Sulṭān Muʿizz al-Dīn Sām のミナーラ (minārah) つまりクトゥブの塔が落雷のために破壊されたのを補修したという記述、および Ḥauṣ-i Shamsi すなわち Iletmish 建設の貯水地についての記述とのあいだにはさまつて述べられているのである。従つて、この Futūḥāt の記事に述べられている限りでは、Sulṭān Muʿizz al-Dīn の墓とされる建造物は、デリー、それも、クトゥブ地域か少くともその附近、あるいはデリーの南郊のあたりに存在したというようにとれるのである。

しかし、ゴール朝の Sulṭān Muʿizz al-Dīn の墓は、デリーにあるわけではないと考えられる。現に Futūḥāt 以外のサルタナット時代の文献は、このことについてなにも述べていない。また彼はガズニーに赴く途次、Damyak の宿營 (manzil) で暗殺されたのち、その棺 (marqad) は Ghazni に運ばれたと、Ṭabaqāt-i Nāṣiri は記している⁽¹³⁷⁾のである。このことに注意して、Fanshawe⁽²⁷³⁾ (1902) も、Futūḥāt に見える上述の記事の内容の信憑性を疑問視している。Hodivala は、Elliot-Dowson 譯の補註において、この Futūḥāt のなかの上述の記述のなかのスルターンの名を誤りと考えているが、さらに推測を加えて、ここに述べられている建物は、實は Ṭabaqāt-i Nāṣiri にでてくるところの、「デリーのジャーマ＝マスジッドの近くにあつた」Muʿizz al-Dīn の學校 (madrasah-i Muʿizzi) ではないかと興味あることを述べて⁽¹³⁹⁾いる。この推測の當否は別として、私も、Futūḥāt の記述のなかのスルターンの名は誤りであるか、あるいは、トゥグルク朝の時代に一部でそう誤り伝えられていたものを Futūḥāt の著者が寫したのであつて、この記事が Sulṭān Muʿizz al-Dīn Sām、すなわちゴールのムハンマドの墓が、デリーにあつたとする根拠とはならないと考えている。

のちにもふれるが、私の推理的假設の一端を述べれば、上に述べたところ

の Futūḥāt がムハンマドの墓としてあげている建物は、Fanshawe の如く学校 (madrasah) と間違えたという説もあるが、あるいは、前章で問題としたいいわゆる Sulṭān Shams al-Dīn の墓とされている建物ではないかということも一應は考えられると思う。あるいはまた別に稿を改めて述べるつもりであるところの、同じクトゥブ地域内の Sulṭān 'Alā' al-Dīn Khaljī の墓のことを述べていることとも考えられようが、この方は、同じ Futūḥāt にそれらしい建物の記事がすでにあるのである。ともかく Futūḥāt の文章のなかで、この「Sulṭān Mu'izz al-Dīn Sām の墓」の書かれている位置は、さきにも述べたとおりに、クトゥブのモスクとクトゥブの塔とのちようどあいだなのである。もちろん、Futūḥāt の記述の順序は必ずしも地域的にまともではないのはたしかであるが、それにしても、この建物が、クトゥブの境域内かその附近にあると考えるのもきわめて自然のことのように思われる。書かれている補修の内容は、現存のいわゆる Iletmish の墓とされる建物とほとんど矛盾はしないのである。そればかりか、現存の建物の西壁外面は、それが Firūz の時代のものかどうかは別として、明らかに後代の補修を示している。もし、私のこの推理があたるとすれば、ともかくもこの建物にも Firūz Shāh の補修が試みられたということになる。しかしこれはあくまで仮設であつてひとつの思いつきにすぎないが、いずれまた次章でふれることにしたい。

V. むすび、および若干の推理的私見について。

1. はじめに

デリーおよびその周縁地域に現存する奴隷王朝初期の墓といわれる建造物のうち、歴史的にとくに問題となるものは、第Ⅱ章でとりあげたところの、

Sultān Shams al-Dīn の長子 Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓、すなわち通稱 Sultān Ghāri と、第Ⅲ章で述べた Sultān Shams al-Dīn Iletmish の墓のふたつである。私がこれまで述べてきたところから明らかなように、前者には、明らかに同時代のもので、埋葬された人物の名とその建物の建立の年月とを明記した歴史碑文が、その建造物それ自體の一部に残存していたのに對して、後者の場合には、それが Iletmish の墓であることを示す決定的な資料は、碑文やサルタナット時代の文獻中にひとつとして見出すことはできなかつたのである。それにもかかわらず、19世紀に入つてからの諸文獻は、主として傳承によつて、このふたつの建造物を Nāṣir al-Dīn Maḥmūd とその父である Sultān Shams al-Dīn の墓と考へてほとんど疑わなかつたのであつた。ただ、ここに、文脈からしてこの同じスルターンの墓としか考へられない建造物の補修についての記述が、トゥグルク朝後期の文獻 Futūhāt-i Firūz Shāhi に見えることが、19世紀以降に問題とされるに至つた。その理由は、その文章の内容が、クトゥップ地域北西隅に現存する、いわゆる Sultān Shams al-Dīn の墓の様子にはほとんど合わずに、かえつて Sultān Ghāri の建物の状態に合致するところが多かつたからである。その結果、この點に疑問をはさんだ人びとの大部分は、結局、Futūhāt の記述の誤りとし、その著者といわれている Firūz Shāh が、その長男の Sultān Ghāri の墓を、その父帝のそれと誤つて文中に記したものと考へたのである。この結論の背後には、私が本稿でくり返し述べてきたとおり、クトゥップ地域現存のこのスルターンの墓とされている建造物の傳承を疑うことなくそのまま信賴し、承認してきたという事實があるからである。ただ、20世紀に入つて、一、二の學者のなかには、このいわゆる Iletmish の墓についても、その比定の根據を疑うものが出てきたことは、さきにも述べておいたとおりである（75 ページ参照）。

しかし、くり返していいたいことは、Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の場合と異なり、いわゆる Iletmish の墓とされてきた現存のクトゥップ地域の建造物には、

まさしくそれが彼の墓であるということを実証する決定的な資料が、傳承をのぞくと、全くないということである。ただし、この建造物が、奴隸王朝前期の時代に屬する建物であり、しかも、おそらくは、その初期のものであろうということは、ほぼ確實に推定できるところである。そのことは、碑文をはじめその他の資料から年代の比定が可能な *Quṭb Minār* や *Qūwat al-Islām Masjid*、さらに次のハルジー朝時代に擴張されたそのモスクの南門にあたるところの、通稱 *'Alā'i Darwāzah* (アラ-イー=ダルワーザ) とよばれる建造物などの構造や様式の細部の検討、さらに資材や、とくに碑文文字の書體や文様などの比較によつて、考證し得るからである。以上が、これらふたつの建造物の年代の比定に關する限り、嚴密に述べ得る結論であるといえよう。

2. いわゆる *Sultān Shams al-Dīn* の墓について

以上の結論からすれば、いわゆる *Sultān Iletmish* の墓といわれる現存の建物が、眞にこのスルターンの墓であるのか、あるいはそうでないのか、ということについては、決して斷定はできないということになる。しかし、その場合でも、なお、傳承のもつ意味を考えなくてはなるまい。というのは、これまでの多くの人びとの肯定的な考察も、その基礎には、この建物についての傳承がその主な根據となつていたからである。傳承は、年代の比定や埋葬者についての嚴密な根據や文獻的裏づけのない場合には、全くの誤傳であると證明されない限り、その信頼性の輕重の程度の差はあるとしても、やはり、なんらかの據りどころたり得る性質のものだからである。そこで、この場合にも、傳承の意味について少し考えを進めてみる必要がある。

すでに第Ⅲ章で詳述したとおり、この傳承は、一般には、19世紀に入つてはじめて紹介されたものであつた。ただし、19世紀前半に簡単な記述を残してくれた *Tremlett* はもちろん、ずつとくわしくこの遺跡について記してくれている *Syed Ahmad Khan* でさえも、當時の傳承をなんら疑うことなく、そ

の根據については、少しも説明を残してはくれなかつたのである。察するに、この傳承を支えてきたところのひとつの根據は、壯大な *Quṭb Minār* や、*Sultān Shams al-Dīn* や *'Alā' al-Dīn Khalji* 等による擴張部 (extention) をふくむ巨大な *Qūwat al-Islām Masjid* という、いずれも奴隸王朝時代、とくに *Iletmish* の治世と密接なる關係をもつ遺跡群の北西隅に、この建物が殘存していたという事實に見出し得るとはいえないであろうか。いまかりに、いつの時代にか、歴史に通じたムスリムがいたとしよう。彼がもし、クトゥブ=ミーナールやクトゥブ=モスクの歴史碑文を讀んで、その建立と補修や擴張の歴史を知り、さらに、そのオリジナルな部分、すなわち *Quṭb al-Dīn Aibak* 時代の建立の部分と、のちに *Iletmish* が擴張した部分の文様や文字を比較し、その構造や様式とを比較し、さらにハルジー朝の建造物の特徴をも學ぶとき、彼は、この問題の墓は、少くとも、奴隸王朝前期の建立であることを容易に信じるに至るであろう。しかも、*Quṭb al-Dīn* の墓がデリーにある可能性はまず考えられない。彼が賢明な人物であれば、たとえ決定的な資料はなくとも、この堂々たる建造物が、著名な支配者の墓であると考え、クトゥブ遺跡群と關係深い *Sultān Iletmish* の墓ではないかと推考するに至るのは、あるいは當然の理といえるかも知れない。たしかに、このクトゥブ地域に關係の深い著名なスルターンとしては、彼のほかに *Balban* および *'Alā' al-Dīn Khalji* とがある。しかもこのふたりは、文獻上でも、私が別稿でやがて述べるように、このモスクの附近に埋葬されたと考えられる人物なのである。しかし、*Balban* はともかくとして、*'Alā' al-Dīn* の墓は、現在それと比定されている墓の廢墟がクトゥブ=モスクの西南隅にあるが、かりにそれを否定したとしても、*'Alāi Darwāzah* よりは明らかに後代に屬するべき墓が、現存の問題の建物にみる如く、おそらく *'Alāi Darwāzah* よりもはるかに前の時代の様式と構造とをもつはずはないのである。また *Balban* の墓は、のちに第3論文でふれるように、クトゥブ地域のすぐ外に現存する廢墟が、傳承により彼のもの

と比定されているのである。これが決定的な比定ではないことは、別稿でも述べるところであるが、かりに、それを否定して、この問題の墓との関係を考えてみたとしても、Iletmish の死後、半世紀以上も離れた後代のものとするには、構造と様式上からみてあまりにも時代の差がつきすぎるように考えられるのである。しかも、Balban の墓は、別稿で詳述するように、特殊な用途をもつとされる Dār al-amān と呼ばれた、かなりひろい建物のなかにあつたと想像されるので、それが Qūwat al-Islām Masjid にほとんど接して、その背後にあつたとはいささか考え難いふしがあるのである。

以上の如く考えてみると、かりに、この問題の建物が、その墓の誰たるかを示す資料が皆無で、しかも過去のある期間において全く世人の記憶から消滅し去つていたと假定しても、それが、奴隸王朝前期に屬する、すぐれた墓建築の代表的な建造物として、これを Sulṭān Iletmish の墓と推定する一應の根據と可能性とは、ムガル以降なんびとにも許されていたわけである。ただし、このことは、傳承が、サルタナット時代からのものではなく、いずれかの時代に忘却され、傳承にある程度の時期的斷絶があつたと考えてのことである。しかし、サルタナットの設立者であり、歴代の史書がしばしばその名を記し、しかも、クトゥブ地域の景観をつねに壓しつづけてきたミナールとモスクの完成と擴大とを成しとげてきた著名なスルターンを葬つた墓が、13世紀以降、ムガル末期の19世紀前半までの約600年の間、そのまま誤りなく傳えられてきたとして、一向におかしくはないし、むしろ、その方が自然でさえある。ただ、この場合には、トゥグルク朝時代のクトゥブ地域についてのかなりくわしい記録を残した Ibn Baṭṭūṭa や、14世紀末年のデリー攻略の直後にこの地を自ら見て廻つた Timūr などが他の遺跡について記しながら、この著名なスルターンの墓について全くふれていないことが、もつとも大きな疑問點となるであろう。しかし、これも、誤りや誇張や脱落がしばしば認められるこのふたりの記録の内容を考えてみれば、決定的な反證となり得る性質のものとはいえないのであ

る。

しかし、この遺跡の場合には、傳承の斷續について考えるときに是非考えておくべきことがら、とくにこの遺跡の環境と關連して別にある。そのひとつは、この問題の墓もふくめて、いわゆるクトゥブ地域の遺跡群は、19世紀、20世紀初頭に至るまで、少くともその基部が地表からは埋没しており、現在の美しく清掃整備されたクトゥブ地域とは異なり、ほとんど完全な廢墟地帯であつたと想像されることである。今日、美しい風致觀光地區として慎重な文化財保護措置を構じられているこれらの建造物の現状をみるとときには、このことは全く想像し難いところである。私は、しかし、20世紀の初年代にさかのぼる古い寫眞を、インド政府の考古調査局の寫眞部で、數多く見せてもらったことがある。問題の墓のすぐそばを、現在完全になくなつていゝ道路が走つていたのをそれによつて知つたのも驚きであつた。ともかくその後の A. S. I. の年次報告にもしばしば記されているように、これらのクトゥブ遺跡群は、1910年頃からの“發掘”と“修復”の度重なる作業を経て、はじめて今日みられる如きその全様を明らかにしたのであつた。従つて、これらの建造物が、今から200年前やそれよりずつと以前の時代に、文字通り、廢墟の遺跡としてのみ存在し、世の人びとがその歴史について、あるいはその建造物に關する傳承について、多くを忘れ去り、そのため、遺跡群のなかでもとりわけ目立ない、この問題の墓の建立の由來と、その墓の主人公についての傳承とが、一應、斷絶された時期がかつてあつたかも知れないと考えることも、あながち不可能とはいえないのである。

第二の點は以上の考え方をむしろ否定するものである。すなわち、いかにその基部は埋もれていたとはいえ、巨大な姿をそのまま保つてきたクトゥブの塔とクトゥブのモスクのスクリーンとが、デリーの人びとの關心から全く消えてしまつたとは、ほとんど考えられないということである。さらに、奴隸王朝初期の時代のスーフィーのチシュティー派の聖者である Shaikh Qutb al-Din

Bakhtiyār Kākī, すなわち俗稱「おクトップさま」の廟は、サルタナット時代はもちろん、ムガル時代から20世紀に至るまで、デリーのみならず、インド全国にわたり、さらには外国人のムスリムにとつても、巡禮参拜の聖廟として著名であり、各時代を通じて、その周辺には多くの墓や宗教的建造物が建てられてきたのである。しかも、その Quṭb Sāhib の廟は、問題のクトップ地域から、わずか徒歩数分の近くにあるのである。従つて、たとえ、この問題の墓がなかば埋没されていたとしても、それが、完全に、デリー在住のムスリム、とくにクトップ地域周辺のムスリム知識人や、聖廟やその他の建造物の歴代の堂守りなどの記憶から全く消え去つたということが、果してあり得るのであろうか。とくにスーフィーズムが浸透していたと思われるクトップ近邊においては、たとえ支配者の墓であれ、立派な墓がしばしばムスリム聖者や、スーフィーズムに関心ある民衆をひきつけていたことは、当時のスーフィーズムのあり方からして、十分に考え得るところといつてよいであろう。

以上、傳承について、その存続の条件や可能性についてもいろいろ考えを廻らしてみると、Sultān Shams al-Dīn の墓とされる問題の建物の場合には、それを證據だてる決定的な歴史碑文や文獻はないにしても、傳承による比定の根據を完全に否定し、疑う積極的な根據も、ほとんど見出し得ないのである。のみならず、かえつて、サルタナット初期以來の傳承の存続の可能性を肯定すべき理由も上に記したようにいろいろと考えられるのである。従つて、問題の建造物が、Iletmish の墓でないとは斷言することも、もちろんできないのである。私自身の一應の結論を述べるならば、問題の Futūhāt の文章のスルターンの名は誤つて記されたものであり、むしろ、19世紀以來われわれに紹介されてきた諸説が主として依據したと思われる傳承が、この墓の正しい由來とその主人公とを伝えるものであるという可能性は、この墓の主人公と考えられてきたスルターンの歴史的著名さと、その建物の構造と様式、さらにそれが現存するクトップ地域という場所の、歴史的、宗教的にみた特殊な位置と環境などが

ら推して、かなり高いといつていいのである。従つて、問題の墓が、通説の如く、Sultān Shams al-Dīn Iletmish の墓であるという可能性もまた相當に高いということになるのである。それに関する細部の問題點についての私見はすでに述べておいたところである。

3. Sultān Ghāri と Sultān Shams al-Dīn の墓

—若干の推理的私見について—

以上、私は、Sultān Shams al-Dīn の墓といわれるクトゥブ地域に現存する建造物の比定について、私見の一端を述べてきた。すなわち、決定的な證據はないにしても、その傳承の信憑性についてとくに疑う積極的な根據もなく、さまざまな歴史的條件と、遺跡の構造・様式、およびその他の理由から、この問題の墓を Iletmish のそれと考えるべき可能性は、相當認められることを述べてきたわけである。しかし、私は同時に、以上の私の一應の結論とは全く異なる結果に導くところのひとつの假設をも考えているのである。それは、いわばひとつの推理的假設というべきもので、嚴密な意味では、歴史學的な考察の限界を越えているところがないとはいえない性格のものである。しかし、そうした私の假設に似た考えは、これまで誰ひとりとして發表していないので、ここに一つの附録のかたちで述べておきたいのである。ただ、私があえて、このような假設を述べるひとつの理由は、從來の研究者が歴史家もふくめて、遺蹟の歴史的背景や比定に關しては、これまでの傳承や從來のいわゆる「定説」にほとんど疑いをはさまず、「定説」をそのまま忠實に採用してきた、あまりにも安易な傾向に對して批判的見地を示してみたいという意味もあるのである。

私が以下に述べたい推理的假設とは、簡単にその要點をまとめてみれば、ほぼ次のようになる。

- (a) これまで、Sultān Shams al-Dīn Iletmish の墓といわれてきたクトゥブ地域の問題の墓は、Iletmish の墓ではない可能性がある。

- (b) Shams al-Din Iletmish の遺體は、彼がその子 Nāṣir al-Din Maḥmūd のために建てた墓すなわち Sultān Ghāri の地下墓室に、このスルターンの死後に合葬された可能性がある。
- (c) 従つて、しばしば問題にされてきたところの Futūḥāt-i Fīrūz Shāhi のなかの問題の「墓」(*maqbarah*) についての記述は、従來の大部分の研究者が考えたように Futūḥāt の著者の誤りではなく、現存のいわゆる Sultān Ghāri の建造物について、まさしくそれを Sultān Shams al-Din の墓として述べたものにほかならない。
- (d) 従つて、トゥグルク朝後期には、この Sultān Ghāri の建物は、その東門の歴史碑文の存在にもかかわらず、Madrasah-i Shams al-Din Iletmish の名と関連して、Sultān Iletmish の墓として、あるいは、少くとも Iletmish をも埋葬した墓として知られていた。従つて、Futūḥāt にも、そのように記された、というようにも考えられる。
- (e) 一般には “Sultān Ghāri” として知られてきたというのが今日では定説であるが、以上のような考え方をする場合には、かつて Syed Ahmad Khan が初稿本で記したように、“Sultān Ghāzi” と呼ばれていた可能性もより一層考えられる。すなわち、サルタナットの創設者であつた最初のスルターンであつたが故に、「征服者たりしスルターン」の俗稱が生れたと考えてはどうか。
- (f) 以上のように考えてみると、この墓の地下墓室内の墓石に関しては、おそらくは中央の墓、すなわち前掲59ページの挿圖5の(b)が、もともとの墓の主人公である Nāṣir al-Din Maḥmūd であり、その東側の(c)は、おそらくはその妃、(d)の子供の墓は彼の子供であろうか。そして、もつとも西寄りの最大の墓、すなわち、これまで多くの著者が、Maḥmūd の墓と推定してきたところの(a)が、彼の父で、この建物の建立者であつた Iletmish の墓である可能性が大きい。すなわち、のちになつて、その死後、

Sultān Iletmish は、墓室内の餘裕のある西壁に近く、合葬されたと考
えるわけである。

以上が、私が本稿の問題點に關連して推理的假設として考えた結論の要點で
ある。以下、この推論を支えているいくつかの根據と理由とについて記してお
こう。

(1) この假設は、そもそも Futūhāt-i Firūz Shāhi の問題の文章の記述の
内容をそのまま信用するところからはじまるといつてもよいであろう。すなわ
ち、本稿の 30 ページにあげた同書の問題の記述にみえるところの、“madra-
sah-i Sultān Shams al-Dīn Iletmish” の再建補修の記事にすぐそのままつ
づくところの、問題の “maqbarah” とは、Sultān Iletmish の墓ときわめて
自然に受けとることができるのである。しかも、すでにくり返し述べたよう
に、右の文中の “madrasah” と “maqbarah” の兩者についての Futūhāt の
記述は、ともに、クトゥブ地域のいわゆる Iletmish の墓とは全く合致せず
に、かえつて、いわゆるこの Sultān Ghāri の建造物の状態ときわめてよく
合致するのである。とくに、従來の諸先學がほとんど正しくは解釋し得なかつ
たところの、文中の “sahn” と “gach kardan” についての Naqvi および私
の解釋、すなわち内庭の、おそらく土のままの地面を Firūz Shāh の時代の
この建物の修復に際してはじめてモルタル床に變えたということ（前述 42
ページ）も、まことによく Sultān Ghāri の内庭の現状と一致するところ
である。そして Sultān Shams al-Dīn Iletmish の墓が、とりもなおさず現存
の Sultān Ghāri の建物と全く同じであると考えるときには、これまでいろ
いろと問題にされてきた Futūhāt の問題の文章についての疑問點の數かずは
一舉に氷解してしまうのである。

(2) すでに述べたとおり、現存の地下墓室内の 4 基の墓は、決定的にどれが
Maḥmūd のものかは決め手がない。これまでの著者の多くは、最も西端の最
大のもの(㉑)を Maḥmūd の墓と考えているが、なかには S. A. A. Naqvi の

ように、中央の墓(b)を Maḥmūd のそれと考えた學者もいる。私のこの仮設でもそのように考えるのである。もともと、墓室の中央に、その墓の主人公を埋葬することは、ムスリムの慣習としてきわめて自然のことである。その場合には、東側の大人の墓(c)は、おそらくは Maḥmūd の妃の墓であり、兩者のかたわらの小さい墓(d)は、その子供のものであるのが自然であろう。そこへ、のちになつてもうひとり大人が合葬されたとする。しかも、その人物は、この墓の主人公の父であり、またスルターンとして王朝の第一人者であつた。これをキブラの方向に當る西側に、中央の主人公よりひと廻り大きな墓棺を設けて葬ることは、きわめて自然と考えられてよいのではあるまいか。サルタナット時代、あるいは、のちのムガル帝國の時代の支配者たちの墓室内の墓石や墓棺の位置は、それによつて血縁の序列を推測し得るほどには一定したきまりはないといえよう。しかし、主人公の墓石が中央におかれているのは、もつともふつうであるばかりか、もつとも自然なのである。

(3) 生前に自分が建てた他の人物、とくに彼の親族のために設けた墓に、死後その當人が合葬されることは、ムスリム支配者の場合、必ずしもその例がなくはないのである。ずつと時代は下るけれども、もつとも著名な例としては、あのタージ=マハルの例がそれにあたる。Shah Jahān (シャー=ジャハーン) は、自らの墓廟を別に建てる計畫をもつていたといわれている。しかし、その晩年に彼の置かれた立場は、そうした計畫の實現をさまたげ、結局、彼の死後、その遺體は、彼の愛妃 Mumtāz Maḥal (ムムターズ=マハル) のために彼が生前に造營したあの壮大なる大理石の建物に、妃の傍らに合葬されたのである。このタージ=マハルの場合には、妃 Mumtāz の墓は、墓室のまんなかにつくられていた。もちろん地下室の墓石も部屋の中央にあつた。Shāh Jahān が、その死後、この建物に合葬されたとき、その墓は、妃の墓の西側に、しかも主人公の Mumtāz Maḥal の墓石よりも一段と大きな墓石を設けて安置されたのである。これはおそらく、キブラの方向をとうとぶことと關連があると

思われる。

また、同じデリー=サルタナット時代の例をあげてみると、トゥグルク朝の *Sultān Muḥammad* すなわち、*Muḥammad bin Tughluq* (ムハンマド=ピン=トゥグルク) の場合がここにあげ得る例といえよう。もちろんこの場合には、先帝の *Sultān Ghiyāth al-Din Tughluq Shāh* (ギヤースッティーン=トゥグルク=シャー) の墓は、彼自身によつて建てられたことはほぼ確實と考えられる。しかし、現在、その墓室には3基の墓棺がおかれていて、それぞれがだれのものであるかは決定的な證據はひとつもないのである(これについては、トゥグルク朝前期の墓に関する別稿で詳述する豫定である)。しかし、一般の傳承や多くの學者の意見は、その中央に近く、墓室全體のプランからいうとやや東寄りではあるが、三つのなかでもつとも西よりの墓棺を *Ghiyāth al-Din* に、その次の、つまり三つのなかの中央のものを、その妃の墓に、そしてつとも東よりの墓を、後繼者のスルターンであつた有名な *Muḥammad Tughluq* の墓としてきたのである。この *Muḥammad* は、トゥグルク朝のみならず、サルタナットの全期を通じて、強大なる君主權を實現行使したスルターンのひとりである。しかも、この人物にしてその死後に自分の墓廟をもち得ず、彼の叔父で先帝であつた *Ghiyāth al-Din Tughluq Shāh* の墓の建物のもつとも東端に埋葬されたと考えられているのである。そして、この場合にも、長上である叔父の先帝は西寄りに、すなわちキブラの方向に近くおかれており、甥である *Muḥammad* の遺體はその東端に埋葬されていることは、*Sultān Ghāri* の場合の私の假設と考え合せると、きわめて興味あることといえよう。

(4) さきにも述べたように、*Iletmish* の後繼者たちは、いずれも肉親同志の權力争い、とくに娘も交えてのスルターン位の繼承をめぐる同胞間の争い、それに貴族勢力をめぐる複雑な黨争のために、いずれも、きわめて短い期間の治世を混亂のうちにあわただしく送つたのである。こうした事情が、彼らの父であり、王朝の創始者であつた *Iletmish* の死後も、そのスルターンたる父帝

のために壮大なる墓廟を營む餘裕を彼らに與えなかつたと考えることも理由があることと思うのである。このスルターンの死後の状況を考えてみると、父帝のための墓廟を新たに造營せずに、かえつてその先帝自らが生前に營んだ立派な墓廟に、その長子の眠る傍らに合葬される結果となつたとしても、それはきわめて自然なことと考えられるのである。あるいは、このことは當座は假埋葬のつもりであつたかも知れないという、うがつた推理さえ決して笑い去つてしまふわけにはいかないであろう。

(5) Iletmish の墓に関するサルタナット時代の文獻の記述には、問題の Futūhāt-i Firūz Shāhī の記事をのぞくと、あとは、さきにあげた Ṭabaqāt-i Nāṣirī にみえる記述 (66 ページ参照) だけである。この記事は、Iletmish の墓について述べたものでなく、偶然、ある事件の場所を示すためにその名が入つてきた記事であるから、かえつて史料としての信憑性は高いともいえるのである。しかも、これは、同時代である奴隷王朝前期の著作の記述なのである。その内容はすでに述べたところであるが、要するに Sultān Bahrām Shāh の権力に抵抗する反対派の勢力による反抗のための集合の場所として、「Sultān Shams al-Dīn Iletmish の墓廟」が利用されたという内容である。當時のデリーの宮廷や城砦に関しては別稿で述べるが、クトゥブ地域に現存するいわゆる Iletmish の墓が、當時のデリーの町を圍む外城壁であつたところのいわゆる Qilah-i Rāi Pithaurā (ラーイー=ピトラー=城砦) の内部にあつたことはいうまでもない。しかも、この建物のすぐかたわらの巨大な Jāma' Masjid すなわちクトゥブ=モスクは、その城砦内のほぼ中央部に位し、一般の民衆がもつともあつまる場所であつたと思われる。従つて、反亂のための集合の場所として、はたして適當であつたであろうか。それはあまりにも、目立ちすぎる場所であり、また中央の権力に對して近すぎてはいしなかつたろうか。この場合、クトゥブ地域から約5.5キロメートルほど西方の Malikpur の地は、デリーの権力に抵抗するための反亂の集合の地點としては、まことに格好な土地で

あるように私には考えられるのである。しかも、全く接しているといつてもいいほどの巨大な *Jāma' Masjid* についての記述は、同じ文献である *Ṭabaqāt-i Nāṣiri* にも、時おり記されているので、もし、現存の *Iletmish* の墓とされる建物の境域内に集合したとするならば、「*Jāma' Masjid* のうしろ」とか「近く」とか、いつも出てきそうな記載があつてもよさそうである。

(6) 本稿につづく續稿で私もくわしく述べるつもりであるが、*Sulṭān Ghāri* の南方には、建物の西壁にほとんど接するほどの近さに、*Iletmish* の子で、いずれものちにスルターンとなつたところの *Rukn al-Dīn Firūz Shāh* と *Mu'izz al-Dīn Bahrām Shāh* のものと推定されるふたつの墓の遺跡がある。つまり、*Iletmish* の子のうち *Raṣiyah* をのぞくふたりの後継スルターンがつづいて、いずれも、その長子である *Maḥmūd* が埋葬されている *Malikpur* の地に、しかも建物を接して葬られているわけである。しかも、このふたりともに、*Sulṭān Ghāri* の主人公と同じく、*Iletmish* の實子なのである。*Raṣiyāh* も實子で、はじめての女帝であるが、彼女の場合にはその死亡の際の状況がきわめて特殊で他の子供の場合とは異なつていた。従つて、私が續稿で説明するように、その墓が、ひとりだけ全く遠くはなれて現在のオールド=デリー、すなわちかつてのムガル帝 *Shāh Jahān* が造營した *Shāhjahānābād* (シャージャハナーバード) 内にあると推定されていることも十分に理由のあることなのである。これらの事實は、當時、*Iletmish* がその長子 *Maḥmūd* の死を期としてそのために造營した墓の所在地たる *Malikpūr* が、實は一種の「王の墓地」(royal necropolis) として考えられていたのではないかという推定をも可能にするのである。とすれば、このことは、*Iletmish* の遺體が、この地に埋葬されたとしてもきわめて自然と考え得るのではあるまいか。いや、むしろ、*Iletmish* が、彼が生前 *Malikpūr* に營んだその長子の墓の所在地 *Malikpūr* に合葬されたが故に、その子でスルターン位の繼承者たちは、死時の状況の異常であつた娘の *Raṣiyah* の場合を例外として、いずれも、その同じ

Malikpūr に埋葬されたのであるとは考えられないであろうか？ こうした推理をさらに一段と進めて考えれば、現在ではその所在地のわからない彼らの次のスルターン ‘Alā’ al-Dīn Mas‘ūd (アラウッディーン＝マスウド) の墓もこの地域にあつたかも知れず、幼児にして暗殺されたこの悲運の子供の墓が、この建物の近くにかつてあつたことも考えられよう。案外、それは例の墓室内の子供の墓(d)に當るのではないかというきわめて空想的な考えさえも成り立つかも知れない。しかし、これはいささか飛躍しすぎた考えと思われるので、ここでは引込めておく。ともかく、この Sultān Ghari の建物を中心として、正しいところ、少くともふたりのスルターンを含む Iletmish の三人の子の墓が存在した事實から、Malikpūr のこの地域が Shams al-Dīn Iletmish の直系の王族の墓地として考えられていたという可能性は十分にあると思うのである。

(7) Ibn Battūṭah は、その旅行記の文章のなかに誤謬と誇張とをししばのこしていることはさきにも述べたとおりで、デリーに關する彼の記録についても同じことがいえる。しかし、彼が、しばしば言及しているクトゥブ地域のなかにあるこの建物について、もしそれが、彼自身いろいろと記しているところの Iletmish の墓であつたのならば、彼が全く一言もその建物について書き残していないことは、どうもおかしいのである。もつとも、彼は、Sultān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓については、自らそれを訪れたとまで述べたり、また、Raziyah の墓についても記述をのこしながら、同じクトゥブ地域にあつたといわれているところの ‘Alā’ al-Dīn Khalji の墓については、この Iletmish の墓についてと同様に、一言も記してはいないのである。

(8) もう一度、Futūḥāt-i Firūz Shāhi の内容にもどらう。すでに前章の末節で述べておいたように、この問題の書物には、「Sultān Mu‘izz al-Dīn Sām の墓」なる建造物を、Firūz Shāh Tughluq が補修したという記述がある。(前章 87 ページ参照) この記事の内容が實はおかしいことは、すでに述べたとお

りで、Mu'izz al-Din bin Sām すなわち「ゴールのムハンマド」の墓はインドにはないはずである。従つて、この墓についての Futūḥāt の記述は明らかに誤りであると考えられる。それならば、この Futūḥāt が記した墓は一體誰の墓で、果してデリーに現存する建物に比定し得るものなのか、という疑問が當然生じる。すでに述べたように、Futūḥāt のなかでのこの墓の記述されている位置は、いわゆるクトゥブ=モスクと、クトゥブ=ミーナールに関する記述のちようどあいだにあるのである。とすれば、この墓は、クトゥブ地域にあるものと考えていいであろう。Futūḥāt では、モスクもミーナールも Mu'izz al-Din bin Sām と関連づけて述べられており、従つて、モスク、墓、塔を並べたとも考えられるが、しかし、それにしてもインド内にはないこのスルターンの墓をそこに加えたことは、Futūḥāt の敘述内容全般を見てみると全くおかしいのである。

そこで、私は、すでに述べたとおりに、この Futūḥāt に出てくるところの“maqbarah-i Sultān Mu'izz al-Din bin Sām”とは、クトゥブ地域内に現存する問題の Sultān Shams al-Din の墓か、あるいは 'Alā' al-Din Khalji の墓のいずれかについて述べたのではないかと考えたのである。'Alā' al-Din Khalji の墓については別稿で論じるつもりであるが、Futūḥāt の文中には、彼の墓と思われる建物についての記述があるのである。いま、假りに Futūḥāt の著者のいうこの墓を、いわゆる Ietmish の墓とされる建物としてみると、その文中に出てくる西壁補修をはじめとする内容は、現存のこの建物の状態とほとんど矛盾しないのである。この推論はやはりひとつの假設に過ぎないが、もし、Futūḥāt の文中の Sultān Mu'izz al-Din の墓の記述がスルターンの名前の誤りで、しかもそれが、問題の建造物に相當するかも知れないとしたら、このことは、少くとも Firūz Shāh の時代にも、問題の建物が Sultān Shams al-Din の建物とは考えられていなかったということを示しているといえるのである。さらにこのことは、同じ Futūḥāt の

問題の文章の墓が, Sultān Shams al-Din の墓であるという記述の正当性を裏づける, 間接的な, ひとつの材料となり得るであろう。

(9) さらに, もうひとつ, 私の推理的仮設の根據をつけ加えておこう。すでに述べたように, Sultān Ghāri は, 一時, スーフィー関係の巡禮地の如き役割を果しており, そこには khānqah も建てられていたらしい事実があることもすでに述べておいた。こうしたスーフィズムとの関連は, 一般の墓の場合でも十分に考え得ることで, とくに若くして父帝の存命中に死に, しかも宗教的美徳をたたえられたといわれる Maḥmūd の場合, 大いにその可能性はありそうである。しかし, この點で思い浮ぶのは, Sultān Shams al-Din 自身も, スーフィズムのなかで特異な地位を與えられていた人物であつたことである。彼自身がスルターンとして, 事実どこまで自ら眞にイスラームの神秘主義に傾倒していたかは, 私自身は, 多くの疑問の餘地を感じているが, アリーガル大学の Khaliq Aḥmad Nizāmī は, このスルターン自身を「偉大なるスーフィー」のひとりとさえ考⁽¹⁴⁰⁾えている。もし, こうした評價が, 昔も行われていたとすれば, 少くとも後代のスーフィーたちや一般のムスリム大衆が, このスルターンのことを聖者のように考え, その墓に巡禮し, あるいはその墓廟の近くにモスクを建て, khānqāh を設けたこともきわめて自然なことであつたろう。このような考察も, 私の推論を支持するひとつの根據となり得るであろう。

以上が, 私の推理的仮設の概要と, その根據と考えるところのあらましである。ただし, この仮設には, 同時にいくつかの疑問點がともなう。その第一は, もし上に述べた仮設を支持する場合には, さきに私が述べたように, 歴史的見地からみてもかなり信頼してよいと思われる傳承, すなわち, 19世紀のはじめまでこの墓が Sultān Shams al-Din の墓であるとしてきた傳承の事實をどう考えるかということである。第二には, もし, この仮設の如く考えた場合, 問題のクトゥブ地域の墓は, 一體, 誰の墓であるのだろうか, という疑問であ

る。

しかし、第一の問題點は、信賴度、信憑性といつても、いずれにせよ、この傳承のもつ意味は絶對的なものとはい得ない。だからこそ、私自身、一應この傳承にもとづいた通説に賛成した上で、一應全く別の視點に立つて、あえてこの反論的私見を述べてみたわけである。第二の問題點は、もし、この問題の建物が、通説の如くに Shams al-Din の墓でないとしたら、その建物の位置と、その堂々たる構造や建築様式、またその風格からみて、奴隸王朝前期における、相當重要な人物の墓であつたことは、まず、間違いないと考えられる。

すでに述べたように、デリー=サルタナットの形成の基礎を築いた Mu'izz al-Din Muḥammad bin Sām と Quṭb al-Din Aibak のふたりの支配者の墓は、デリーにはないと考えられる。また Shams al-Din の後繼者のスルターンのうち、Rukn al-Din Firūz, Raḡiyah, および Mu'izz al-Din Bahrām の墓は、次稿で述べるように、それぞれ比定することがほぼできるのである。その後にスルターンとさせられた 'Alā' al-Din Mas'ūd は幼児で、短命の全く名目だけのスルターンであつて、その死後このような壮大な墓に獨立して葬られることはまず考えられない。こうしてみると Shams al-Din 以降、Ghiyāth al-Din Balban の治世に至るまでのスルターンのなかで、ただひとり残るのは、同じく Shams al-Din の子供で Sultān Ghāri の主人公と同じ名の Nāṣir al-Din Maḥmūd である。彼は繼承争いがつづいた四人のスルターンのあとをうけて即位し、宮廷内に一派の勢力を確立していた Balban の攝政のもとに、かなり安定した治世をつづけ、その死後に、Balban によつておそらく埋葬されたものと考えられるのである。しかも、この奴隸王朝中期のスルターンの墓の所在は、これまで一向に分らない。このスルターンは、664 A. H. 年すなわち1266A. D. 年に死んでおり、その死をめぐつては、自然死かあるいは Balban による故殺か議論のあるところであるが、ともかくこの没年は、Shams al-Din の治世からそれほど遠く離れているとはいえない。従

つて、クトゥップ=モスクの Shams al-Din による擴張部や、クトゥップの塔にみられる Shams al-Din 時代の構造や様式、さらに碑文の文體、文様などを比較して、時代的に降りすぎているとは決していえないであろう。Balban の治世は一應安定しており、彼がいわゆる Shamsi 系の直系子孫の繼立したスルターンに代つて、その権力を確立し、自らスルターン位に登つた事情から、この Shamsi 系最後のスルターンで Shams al-Din の實子であつた Nāṣir al-Din Maḥmūd の墓を壮大に營んだと考えるのも、きわめて自然なのである。以上の理由から、通説を否定し、さきに記した推理的私見の如く、クトゥップ地域の問題の墓を Shams al-Din の墓ではないと想定した場合に、この墓の主を、彼の子の Sultān Nāṣir al-Din Maḥmūd ではないかという他の假設についてもここにあわせて記しておきたい。しかし、これは、あくまでも、假設の上に立てた假設ともいべき性質のものであることを書き添えておきたい。

以上が、前に記したような結論を、さらに大膽に、また、相當な推理を交えて一應まとめてみたところの、私自身の若干の推理的假設の概要である。私自身、クトゥップ地域の問題の墓を、通説の如く Sultān Shams al-Din の墓とすることに、結論としては一應賛成した。それにもかかわらず、同時に、以上に述べたように、結論的にはほとんど全く異つた結果を導き出すところのいくつかの推論を試み、それをあくまでも假設として、それを支えると考えるさまざまな根據とともに提示したわけである。私自身、このほとんど相互に矛盾する兩説をあわせて本稿に記したことは決して矛盾とは思つていない。要するに、私自身が眞に述べたいひとつのことがらは、クトゥップ地域に現存するいわゆる Shams al-Din Iletmish の墓といわれる建物に關する限り、その眞實性に關して決定的な斷定的結論を下すことは、嚴密には不可能ではないかということである。私は、さきに記したように傳承の根據とその意義とを相當に認め、この建物に關する通説を一應は支持した。しかし、全く異つた視點に立てば、こ

の通説とはきわめて異なつた考察も可能であり、それが、推理的假説としては、やはり、ある程度まではかなりの説得性をも持ち得るものではないかということ、提示してみたかつたのである。一般の旅行者はともかく、考古學者あるいは歴史學者の多くまでが、デリーの諸建造物に對して、ほとんど、何らの考證をも試みずに、從來の傳承や通説に安易に従つているのを見るとき、私は、歴史學の方法をやや逸脱していると自ら考えるまでに自由に、推理を試みてみたのである。ただ、もともと歴史的立場から發した私のこの批判的見地にもとづく考察がこのような推理的私見の發表によつて、かえつて歴史學的方法の限界から私自身を逸脱させるという矛盾を示すことになつたかも知れない。

4. おわりに

本稿は、序文にも記しておいたとおりに、今後それについて逐次、論考を發表していく豫定であるところの、サルタナット首都デリーとその遺跡・建造物の歴史的研究に關する最初の試論である。そのため、文獻資料や從來の研究に言及する場合も、あえて、紹介的な敘述を、比較的くわしく挿入した。従つて、豫定したよりもずっと長い紙數をとつてしまつたのである。くり返して述べておきたいが、本稿および續稿は、當分のあいだ、遺跡についての個別的考證あるいは研究が主であつて、これらの遺跡と建造物に關して、さまざまな歴史的問題點にひろく説き及ぶことは、あえて論考の内容と課題からはずしてある。

なお、本稿で用いたペルシア語およびウルドゥー語を主とする諸語の寫字の方法については、最近の一音一文字によるトランスクリプションへの一般的傾向にもかかわらず、ウルドゥー語の發音と綴りをとくに考慮したことと、現在のインド史研究者の一般的慣用とを考慮して、本稿に用いたような方法によつた。この寫字方法については、私自身もいろいろ不満足な點はあるが、率直にいつてこの問題が過渡期にある現在、とくにウルドゥー語や、場合によりヒンディーをも併用する場合には、致し方ないと考えている。

補 註

1. 本稿の題には、「現存する」墓と記したが、その建物の大部分がすでに現存していない建造物についても、以下の研究では、必要に応じて言及することがある。また、「奴隸王朝初期の」墓としているが、こ表現は断定的なものではなく、この時代に属するといわれてきた墓のうちで、年代の比定がはつきりしていない建造物も、當然、本稿で対象となることはいうまでもない。時代の比定についての従来の研究や解釈についての再検討も、私の論考のひとつの問題点だからである。
2. P. Hardy, *Historians of Medieval India. Studies in Indo-Muslim Historical Writing*, London, 1960. p.v. Hardy は、同書では *Ilutmish* としているが、*Hikmet Bayur, Sultan Iletmiş' in Adi Hakkinda*, *Belleten* xiv, 56, Ankara, 1950 pp. 567—588によつて、實は *Iletmish* の方が正しいと考えたと述べている。これについては、いろいろの考え方ができる。私は、小山皓一郎氏に依頼して、そのトルコ語論文をわざわざ譯述説明してもらつた。一應の説得力をもつていて考えたので、本稿ではこのトルコ人学者の説にひとまず従つて「イレトゥミシュ」の發音をとり *Iletmish* と轉寫することにした。しかし、私のこれについての最終的な見解は留保しておきたい。小山君と探書の勞をとつてくれた友人護雅夫氏に謝意を表する。
3. 従つて、ここに並べた順序は、正確に年代を追うものではないことはいうまでもない。
4. *List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delhi Province. 4 Volumes, Calcutta, 1916—1922.* (以下、*Delhi Monuments List* と略稱する)。ここに問題とする墓は、それぞれ Vol. III, No. 71, *Tomb of Alauddin, nephew of Ilutmish* (p.54) ; No. 48, *Grave of a son of Ilutmish* (p.42) としてあげられているものである。

なお、この報告書は、4冊からなり、その構成は、Vol. I. *Shahjahanabad*, 1916; Vol. II. *Delhi Zail (excluding Shahjahanabad)*, 1919; Vol. III. *Mahrauli Zail*, 1922; Vol. IV, (1) *Badarpur Zail*, (2) *Badli Zail*, (3) *Nangloi Zail*, (4) *Bawana Zail*, (5) *Kanjhaola Zail*, (6) *Najafgarh Zail*, (7) *Palam Zail*, and (8) *Shahddra Zail*, 1922. となつている。この4冊の報告書は、デリー州におけるヒンドゥーおよびムスリム遺跡に関する、もつとも詳しく、もつとも正確なリポートである。「リスト」という題がつけられ、遺跡も各冊一連番號のもとに整理されているが、その内容は、單なるリストではなく、遺跡の名稱を記す(a)項から、當時アーグラの事務所に保存されて

いた寫眞のネガ番號を示す(1)項に至るまで、さまざまなことを記している。この報告書の序文は、それぞれ、第Ⅰ巻は G. Sanderson, 第Ⅱ巻は J. A. Page 第Ⅲ巻・第Ⅳ巻は、J. F. Blakiston が記しており、これらの人びとはいづれも刊行當時のインド政府考古調査局 (A.S.I) の北部地域 (Northern Circle) の主任 (Superintendent) であつた。彼らがその序文で記しているようにこの勞多い仕事は、實際には、そのためにとくに任命された副主任 (Assistant Superintendent) の Maulvi Zafar Hasan (ザファル=ハサン) の精力的な活動が中核となつて完成されたのであつた。年月をかなりかけた點からいつても、その内容がきわめて網羅的であることからみても、この仕事は、従來の調査事業とはくらべものにならない。もちろん、當時すでに設計を終つて、着々と工事がすすめられつつあつたニューデリー市街の建設を機會として、デリー州全般にわたつての遺跡保存を目的として、この調査事業が計畫實施されたことはいふまでもない。報告書の題にはヒンドゥー・ムスリムの兩者の形容詞を冠しているが、その内容の大部分は、もちろんムスリム遺跡が占めているのは、デリーの歴史的背景からして當然のことであつた。

こうした先人の業績がなかつたならば、東大調査團の現地調査作業のなかで、私が擔當したところの、現存する遺跡の探査と、それにもとづく総合的リストの作製と、その現状把握などの仕事は、きわめて大きな困難にぶつかり、おそらくは、現在までに私が得ることができた成果とは著しく異なつたものしか得られなかつたかも知れない。とくに第2次調査に際しては、私はこの「リスト」を複寫した印書紙を、毎日必ず手にしながら、サルタナット時代に屬すると思われる遺跡を、可能な限り、くまなく現場において再確認することに努力を拂つたのであつた。1954—56年の間の私初の最の個人的なニューデリー滞在期間中や、1959—60年にかけての第1次調査に際して實際に現場をみた多くの遺跡についても、この報告書はその背後の歴史のあるには傳承などについて教えてくれるところ多く、まことに貴重な參考資料であつた。この4冊の書物を私ほどの執着と感謝の念をもつて、現地で利用した人物は、おそらく、これまでも、また將來にも、おそらくは、いないのではなからうかと思つている。

しかし、この報告書の特徴のひとつは、調査がニューデリー建設工事が着手されて間もない時のことであり、今日における現状はもちろんのことニューデリーの完成直後の状況ともきわめて異なつていた1910年代から20年代はじめの状況を記しとどめていることにある。従つて、それぞれの遺跡についての記述の(b)項において所在地を記している場合に用いた地名は、當時の古い村落や地區名をそのまま残しているの、現在、全く周囲の環境が變つてしまつた多くの遺跡の所在地を探しあてる場合に、著しい困難を感じたのである。(c)項は建造物の所有者を記した部分で、考古學的には格別の興味はない

が、ひろく歴史學や社會學的見地に立つと、きわめておもしろい資料である。たとえば、“Shamilat Deh”と記されていて遺跡がかなりあるが、これは、正しくは、*Shāmi-lāt-i dih*で、村落の共同所有の事實を示すものと考えられる。従つて、とくにその宗教的施設の内容と関連して、この(c)項の記すところを視點を變えて採りあげてみる時には、それらの記述はきわめて興味ある研究材料となり得るであろう。

(f)項には碑文の有無がのせられているが、碑文がある場合には、その翻譯英文とともにアラビア文字による原文が轉載されていることは、きわめて有用である。(e)項はその遺跡の歴史的年代、とくに建立の年代を記し、歴史碑文があつて時代のおわかるものは、大體においてその年代に據つてゐる。しかし、この(e)項に記された年代は、しばしば信用できないものがある。たとえば、ある場合にはその人物の没年が、その墓の建立の年そのものとされていたり、また19世紀以降になつて造られた第二次的な歴史碑文が、そのまま建立年代の判定に採り入れられていたりする場合もあるのである。さらに、王朝名を記して、構造・様式などの點から大ざつばな時代区分と年代比定を試みている場合も多いが、それも、私のこの報告書利用の経験からいうと、明らかな誤りをおかしている場合が、相當數、見出された。もつとも不明瞭なのは、“Afghan”, “Lodi”, “Pathan”などという時代区分の使い分け方で、ほとんどなんちの學問的なうらづけもなしに使い分けられている場合があることである。この點は、數の多いロディー朝時代の墓やモスクや、ふつうウルドゥー語で“*ganāti masjid*”と呼ばれている「壁モスク」(wall mosque)の場合などに、とくに困惑を感じたところである。ただし、このことはロディー朝とのちのスール朝との區別、あるいはその前後のサイド朝や初期ムガルなどの時代の墓の区分けの難かしさを考えれば、たれでもつねに困難を覚える點なのである。従つて、とくにこのことをもつて、この報告書の價値やその成果を云さすことは不當であるかも知れない。

(j)はいわゆるディスクリプションに相當する部分で、考古學、建築史學、美術史學どの研究分野できわめて有用な項目である。實測の結果の數字などは、きわめてマイナーな遺跡についてもよく記されていて、調査時の勞苦がよくしのばれる。ただし、その數字には明らかにおかしいものもあり、方角や距離などにもときに誤りがある。主要な遺跡やポピュラーな史跡などには、この(j)項の後半に、歴史的背景や傳承についての記述があわせて記されてあつて、きわめて興味ぶかい。しかし、この記述は、ときにはかえつて危険な誤謬をも讀者におしつける可能性もあり、利用者はとくに注意する必要がある。歴史的な説明あるいは傳承にもとづく解釋については、いちいちその根據となつた文獻や所傳などを記している場合がふつうであるが、それは次の(k)項にあげている文獻の名によつて、ほぼ見當がつけられる場合が多い。しかし、この部分の敘述の最大の欠

補 註

陥は、文獻史料や、傳承や、さらにのちの時代の研究や案内記の記述などを、たいていの場合、無批判に受け入れている点である。この点さえ注意すれば、この(Ⅻ)項の記述はきわめて有用であつて、私もしばしば教えられるところが多かつた。

ところで、連日、この貴重な業績の寫しをもつてデリーの遺跡群を廻り歩いた私には、この報告書作成の中心的人物である Zafar Hasan の名は、忘れ難いものとなつていた。だから、1960年の5月、機会あつてカラチに行き、「パーキスターン歴史學協會」の委員長の Moinul Haq 氏を訪ねたとき、Zafar Hasan が、氏の伯父に當り、しかも當の Moinul Haq 氏の自宅でその病身を養つておいでと聞いて、驚き、また大いに喜んだのであつた。數日後、この協會が私のために催してくれたお茶の會の席上で、老齡のため歩くことも不自由な Zafar Hasan 氏がわざわざ出てこられた。耳がとおいことに當惑しながらも、ともかく氏と親しく話を交すことができたのは、私としては望外の、貴重な想い出となつた。當時の私は、およそ千に近い數のデリーの遺跡を歩き廻つた記憶をそのまままなましましい質感としてもちつづけていたので、いささか夢中になつて、いくつかの疑問點についてこの老人に質問をしはじめてしまつた。しかし、この老いたるモールヴィーは、そのとおい耳でやつと私の質問を聞きわけたときでさえも、それに應じるには、その記憶があまりにも過去に埋没しすぎていた。そのときのいい知れないがゆさと寂しさを、私は一生忘れることはできないであろう。

なお、今後の研究において私はこの報告書をしばしば引用するが、以下、Delhi Monuments List と略稱することとする。

5. 本稿にかかげた寫眞は、現在は、いずれも調査團の管理の下に、東大東洋文化研究所に保管されている。圖版の3枚と挿圖3, 6, 7は何れも三枝氏撮影(リンホフ, 4×5)のものを利用させていただいた。他は私の撮影したもの(35ミリ)である。いずれも調査團の承認を得て掲載させてもらったものである。
6. Delhi Monuments List, Vol. IV, No. 105. に載せられているこの遺跡は、Palam Zail のなかの Malikpur Kohi の地域區分のなかにふくまれている。pp. 55—57.
7. 1956年に私がとつた寫眞および第1次調査に際して調査團が撮影した數枚の寫眞は、従つて、いまでは貴重な資料となつてしまつたわけである。なお、このモスクについては、トゥグルク朝後期のモスクについて述べるときにふれる豫定である。
8. H. G. Keene も、1870年代に、附近の井戸はすべて濁れてしまつていと記している。H. G. Keene, Delhi, Agra, 1873, p. 56. (以下、Keene とのみ略稱する)
9. 1959—60年にかけて、第2次調査を行つた際には、インド考古調査局が、中央の墓室の天井外部を解體し、また中央天井突出部と西方廻廊部とのあいだの床面を發掘していた。私の感じでは、この發掘作業は、ムスリム以前の建築・彫刻類などの關連におい

てなされたように見受けられた。しかし、當時の責任者であつた。Y. D. Sharma 氏には深くたずねなかつた。そのときの發掘の結果の報告書は未刊のようである。

10. S. A. A. Naqvi, *Sulṭān Ghārī*, Delhi. *Ancient India*, No. 3, Jan., 1947, pp. 4—10. 以下、この論文は、Naqvi と略稱する。
11. Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, (Orig. ed.) Lucknow, 1895, Part, I, pp. 83—84. この歴史碑文についての記載はその84ページにある。ただし、アラビア語をうつすのみで、ウルドゥー譯はのせていない。*Āthār al-Ṣanādīd* は、大きく分けて、初稿本と改稿本とがある。初稿本 (Orig. ed.) は、初版は1847年刊行で、改稿本 (Rev. ed.) は1854年に第1版が刊行されたいが、内容は甚しく異なつてゐる。本稿に関する點のみをいえば、たとえば、改訂稿では、遺跡はほぼ年代順に並べかえられている。また、改訂稿でも、1904年の Cownpore (Kanpur) 刊本は、巻末に碑文の模寫を集めてまとめたのせてあるのが特色である。本稿で用いる改訂稿の刊本は、私蔵のこの1904年カーンプル版である。初稿本には、私蔵の1895年のラクナウ市の *Nawal Kishaur* 刊本を用いた。なお、この書物は、しばしば引用するが、以下、單に Ahmad Khan とのみと略稱する。ただし、初稿本、改稿本はそれぞれ、Orig. ed; Rev. ed. と略稱するが、用いた版はそれぞれ上に記したとおりである。
12. Ahmad Khan (Rev. ed.) Part, III, pp. 23—24. なお、改稿本 (1904年刊本) では、この碑文は巻末の No. 18 にあげられている。

なお、*Āthār al-Ṣanādīd* にはフランス語譯がある。Garcin de Tassy によるその佛譯は、1854年刊の改訂稿本によつてゐるものと思われる。譯者は著名なベルシア語學者であるが、このウルドゥー→佛譯ではときおり、かなり大きな誤譯をおかしており、また固有名詞の音寫やその意味の翻譯にも誤りがあるので、De Tassy のこの佛譯のみに頼ることは、いささか危険である。一例をあげれば、*Sulṭān Ghīyāth al-Dīn Balban* が “Balīn” と音寫されている。これは、Balban の二つの (be) の文字に附せられたひとつずつの點のあとのひとつが、ふたつの點をもつ (ye) の字と考えられた上で音寫したためにおこつた誤りであろう。まれに聞く固有名詞ならばともかく、デリーのスルターンのなかでももつとも著名な人物のひとりである Balban を Balin と寫したのでは、De Tassy がいかにすぐれた學者であろうと、ちよつと困る。この佛譯は、次のとおり、5篇に分れて掲載されている。Garcin de Tassy, *Description des monuments de Dehli en 1852, d'après le texte Hindoustani de Saiyid Ahmad Khan*, *Journal Asiatique*, Juin, 1860 (pp. 508—536), Août-Septembre, 1860 (pp. 190—254), Octobre-Novembre, 1860 (pp. 392—451), Decembre, 1860 (pp. 521—543), Janvier, 1861 (pp. 77—97)。このうち、*Sulṭān Ghārī* については、Oct.—Nov. 1860, pp. 392—

393. に譯されている。以下、このフランス語譯を De Tassy (Fr. tr.) と略稱する。
13. J. Horovitz, A List of the Published Mohamedan Inscriptions of India, Epigraphia Indo-Moslemica, 1910—11, Calcutta, 1912. pp.30—144. このリストのうち、No.433—No.580 (pp.69—79) が“Delhi (Punjab)”における碑文となつている。ここで問題にしている Sulṭān Ghāri の東門の歴史碑文は、No.439 (p.70) にあたる。この碑文について、Ahmad Khan のほかに、彼が載せているのは、“J.R.A.S., Vol. V, 1873, p.363 (E. Thomas); J.A.S.B., Vol. XLII, Part I (1873), p.363 (E. Thomas); Stephen, Delhi, pp.71—2.”で、Edward Thomas と Carr Stephen のみである。(なお、以下、Epigraphia Indo-Moslemica は E.I.M. と、上掲リストは Horovitz's List と略稱する)
14. J. Horovitz があげているのは、前註 13 にあげた雑誌論文であるが、これは、The Initial Coinage of Bengal under the Early Muhammadan Conquerors. Part II Embracing the preliminary period between A.H. 614—634. (A.D. 1217—1236.7) J.R.A.S., Vol. V, 1873. であるが、問題の歴史碑文は、アラビア文字で轉載されており、“Coin of Nāṣirud-dīn Mahmūd Shāh, as viceroy in Bengal”の項に出ている。この論文が、J.Horovitz の上掲リストにも出ている J.A.S.B., Vol. XLII に同じ題名で再録されているのであつて、その Part I, p.361. に、問題の碑文も再録されている。

一方、Carr Stephen の著書は、本稿および續稿でもしばしば引用する書物であるが、デリーの遺跡を扱つた著書としてはきめて有名なものである。彼自身もその序文で述べているとおり、デリーとその周邊地域の“every object of archaeological or monumental interest”についての“a description and history”である。その書名は次のとおりである。Carr Stephen, The Archaeology and Monumental Remains of Dehli, Ludhiana & Calcutta, 1876. この著書が、その叙述にあたつて主な據りどころとしたのは序文にもふれているとおり、“Syed Ahmed Khan's interesting work”, すなわち前にあげたところの Ahmad Khan の *Āthār al-Ṣanādīd* と、“invaluable researches of General Cunningham,” すなわち、のちにあげる A. Cunningham の報告書とである。とくに、C.Stephen は、隨所に Ahmad Khan の *Āthār* の記述を、まるでそのままの翻譯といつてもいいくらいなかたちで、利用している。彼の叙述は、ときにその依據した著書をあげていないところがあるので、彼自身がその紹介している遺跡と建造物を、どの程度に、自らの足と眼とで現地に赴いて觀察したかどうかについては、ときに相當疑問を感じた個處があつたことを、私はこの際述べておきたい。しかし、この著書は、19世紀後半における、英文によつて書かれたデ

リー諸遺跡、とくにサルタナット時代の建造物についてその歴史的背景と現状とについて相當くわしく述べている解説書としては、もつともまとまつた書物といつてよいであろう。従つて、この書が、現在に至るまで、しばしば引用参照されているのも理由のあることである。ただその利用にあつては、さまざまな観点から慎重な取扱いが要請されよう。

15. A. Cunningham, Report of Operations of the Archaeological Surveyor to the Government of India during Season 1862—63. (Vol. I.), Calcutta, 1865, p. 155, note; Report of a Tour in Eastern Rajputana in 1882—83. (Vol. XX), Calcutta, 1885, pp. 142—146. (このふたつの報告を今後引用する場合は, Cunningham (Vol. I); Cunningham (Vol. XX) と, それぞれ略稱する)
16. J.D. Beglar, Report on Delhi for the half-year ending September 1871, Calcutta 1872, pp. 59—60. (以後, この報告書は, Beglar (Vol. IV) と略稱する) ただし, Sulṭān Ghāri について, 最も詳しく, かつ, 最も新しい論考を記した S. A. A. Naqvi (p. 9) は, この Beglar の所論を Cunningham の書いたものと間違えている (後註87参照)。
17. J. Horvitz, The inscription of Muḥammad Ibn Sām, Qutbuḍḍin Aibeg and Iltutmish, E. I. M., 1911—12, Calcutta, 1914, pp. 12—24 with 28 plates. 問題の碑文はその 23—24 ページにみえる。XXII. —On the gateway, tomb of “Sulṭān Ghāri,” Malikpur, Arabic. List No. 439, Plate XVI, No. 1 として載せられている。巻末に附せられた圖版 (Plate XVI) の二寫眞のうち, No. 1 がこれにあたる。
18. Bashīr al-Dīn Aḥmad, Wāqī‘āt-i Dār al-Khukūmat -i Dihlī, 3 Vols, 1919. 裏表紙のうらの英文タイトルによれば, “History of Delhi, the Imperial City, A Most Comprehensive Account of the History and Archaeology of Delhi (with numerous illustrations)” となつている。この書物は, ウルドゥー語で書かれたもつとも大部なデリーの歴史とそこに残存する遺跡と建造物についての案内書で, ハイダラーバードのタルグダールであつた人で, Vijayanagar や Bijapur の歴史なども書いている。このうち遺跡についての彼の叙述は, 主に Carr Stephen の書物によつており, ときにはその丸寫しのウルドゥー譯といつてもいいほどの個所も隨所にみられる。その他にもちろん同じウルドゥー語の Syed Ahmad の Āthār al-Ṣanādīd もよく用いられている。しかし, これらの諸書が見逃している無名のいわばマイナーな遺跡についても載せていて, この點は大へん参考になる。ただし, その記述は, 歴史的見地からいうと, 概して批判の對象となり得るような, 事實と傳承との混同が, 至るところで目立つ。Sulṭān Ghāri については, Vol. III, pp. 345—352 に, 東門碑文は pp. 349—350 に載せられ

補 註

ている。ただし、挿畫に關しては、Āthār の改訂稿本のものを探つたらしく、同じように上部水平部分の右大半が無い描き方をしている。この點については、後註21を参照されたい。(なお、この Bashīr al-Dīn Aḥmad の書物は、以後、單に Bashīruddīn と略稱する)

19. Delhi Monuments List, Vol. IV, No.105, pp.55—56,

20. Naqvi, p.5

21. Syed Ahmad や Bashīruddīn のウルドゥー語刊本に出ている挿畫は、きわめて興味がある。本稿にも3圖ほど掲載しておいたが、その例からもわかるとおりに、稚拙な線畫法で描かれている。これらの挿畫を、Ahmad Khan の私藏の初稿と改稿兩刊本(1895年, 1904年刊)についてくらべてみると、大體、後者は、前者によつてゐるらしいのであるが、必ずしもそうでないところがある。たとえば、本稿にあげた例のうち、挿圖1の Sulṭān Ghārī の内庭と墓室屋根のプラットフォームの圖などは、初稿本よりも、ずつと實寫的で、石積みなどはとくにそうである。しかし、人物の位置などは、全く同じであり、こうした點は、挿圖2の建物東面全景の左手に見える車と人物などは、Bashīruddīn もふくめて各圖共通しているのであつて、笑わせられるほどである。ところで、これらの圖の第一の効用は、19世紀の狀況が、場合によつて、うかがえることであり、ニューデリー市街地に現存する遺跡の場合など、その古い挿畫をみて環境の激變におどろかされる場合が多い。もつと重要なのは建物の細部の狀況の變化について、ある程度推測する材料となり得る點である。たとえば、本稿であげた挿圖8の Sulṭān Shams al-Dīn の墓の場合である。(これは、この圖のウルドゥー語解説が誤つて、“Darwāzah-i sharqī-i Masjid-i Qūwat al-Islam”, すなわちクトゥブ=モスクの東門と書いてしまつてゐるが、もちろんこのスルターンの墓とされる、クトゥブ地域西北隅の墓の東面全景である。そして、逆に同書のこのモスクの東門の挿畫には、このスルターンの墓の東門というキャプションがついてゐる。挿畫が互いにちよつと似てゐるので誤つてしまつたものであらう。圖で見るとおりに、向つて右上の部分や、建物の上部一體がくずれて、表面の切石積が落ちてゐる。これは、明らかに現在の建物の東面の補修のあとと一致する。つまり、東面では、少くとも、この挿畫の描かれた頃は、現在のような補修がなされてゐなかつたことがわかるのである。

いま問題にしている Sulṭān Ghārī の東門碑文の場合も同様である。これらの挿畫によれば、水平部の碑文は、その向つて右側の部分の約3分の2が剥落してゐるよううかがえるのである。ところが、現在はむしろ右側の3分の1のみが剥落してゐる。そこで次のような可能性が考えられるのである。

(a) 挿畫の誤りであつて、デッサンの當時も、寫眞(本稿巻頭圖版1参照)の現狀が

示すように剥落していたのは、向つて右の約3分の1ぐらいであつた。

- (b) 挿畫は正しく、デッサンの當時は、實は、3分の2ほどが落ちていた。ただし、これは、剥落した部分が粉々にならずに、ほとんど損傷がなかつたか、あるいは、せいぜいいくつかの大片に割れたのみであつたので、デッサンの當時から後に、集められて、現在位置に再び復元された。

以上の二様の解釋が可能であらうと思う。このうち、(b)の解釋は、その可能性なしとはいえず、寫眞をよく検討してもわかるとおりに、大理石は、とくに問題個所の右のあたりで割れ目が見えるのである。しかし、私は、次の理由で大體(a)説をとりたい。

- (1) Ahmad Khan 初稿本で、Syed Ahmad が、全文ではないが相當な部分をアラビア語のまま寫している碑文の内容を見ると水平部の中央部分（つまり挿畫に欠けている部分）も載せられている。
- (2) Ahmad Khan 改稿本の1904年刊本では、卷末の碑文集の部分で、原碑文の書體をまねて圖示しているが、それは、現状と全く同じ部分のみが脱落して寫されている。

もつとも、落ちている部分をもあわせて、Syed Ahmad が初稿本に碑文を載せたといえればそれまでであるが、以上の根據から、私は、この問題はデッサンの誤りの可能性がつかないと、一應の判断を下したのである。

ところで、この挿圖に関しては、そのキャプションの誤りが、全般に著しく目立つのである。たとえば、すでにこの註釋の前半で述べた、本稿71ページ挿圖8の墓の東面の圖を、モスクの東面と大きな誤りをそのまま記している點、あるいは本稿25ページ挿圖2の Ahmad Khan の改稿本(1904年刊)の Sulṭān Ghāri 全圖についての説明でも、なお、“Sulṭān Ghāzi”となつていたりする。(初稿本の圖はここでは紹介していないが、内庭の圖には“Sulṭān Ghāzi”とあるが、全景の圖には、“Sulṭān Maḥmūd Ghūrī Ghāzi”と記されているのである。)このほか、説明の誤りや、本文との矛盾は、隨所に指摘できる。しかし、ともかくも、前述したように、使い方によつては、この挿圖は大へん重要な資料たり得ることはたしかである。ただ、問題は、初稿・改稿本ともに第1版以來の諸刊本を比較検討することが必要である。この點は、残念ながら、今の私には、できないことである。

22. J. Horovitz (E. I. M., 1911—12), p. 24.
23. ここに私が載せた碑文のアラビア語原文およびその英譯作成については、Naqvi, p. 5; Delhi Monuments List, p. 57; Horovitz (E. I. M., 1911—12), p. 23. を参照したが、私はアラビア語はできないので、いつもペルシア語、アラビア語の讀解で教示を得ている友人黒柳恒男氏の意見も参考にした。この三著のうちでは、大體において、

Naqvi は Horovitz の寫字と翻譯とをほとんど忠實に辿っているが、Delhi Monuments List では、原文、翻譯ともに若干異つた個所が目立つ。それは主に語尾の文字の寫し方で、例えば、D.M.L が “… tah” と 2 文字にしているのを Horovitz と Naqvi とは “t” と 1 文字にしているような點である。また、あるものが “t” にしているのを他が “h” としている個所もある。ただし問題の、剥落している部分を補う個所の出入のはじめのところで、Horovitz と Naqvi とが、“lāha [l alāimān]” となつていところを、D.M.L では、“lāhal aimān” と寫字している。このところはちよつとちがつている。もつとも、この補いの部分の寫字の切り方については、兩者とも正しいのであつて、寫眞をみると現状は、(lām) の文字の真中で切れているのである。翻譯についても、Naqvi は Horovitz の譯をそのまま採用しているのだが、この兩者に對して、D. M. L. はいささか違つているが、決定的な問題はない。ただ、私は Sulṭān, Amīr, Malik の語はそのまま譯文中に残すことにしたのと、Iletmish という寫し方をした點 [(alif) と (ye) とがあるが、短母音 (I) ではじめた] が三者と異なつてい點である。なお、Ahmad Khan, Edward Thomas の二論文、および Beshisuddin の載せている原文の異同については、あまり煩鎖となるので、一切ここでは省略する。

24. Friedrich Wetzel, *Islamische Grabbauten in Indien ans der Zeit der Soldaten-Kaiser, 1320—1540.* Leipzig, 1918, s.106. この著書は、まことに特異なもので、ほぼ、デリーサルタナット時代にあたるデリーに現存する墓を中心として（他の地域、他の建造物も少しはふくまれている）、主として、その様式と構造の研究を企てたもので、そのディスクリプションはきわめて有用であり、とくに様式、構造上の分類の方法も大いに参考すべき點が多い。しかし、その歴史的な裏づけの面となると、全く弱くなるのも、致し方あるまい。Wetzel のこの書は、1911年3月—4月、1911年12月—翌12年1月、さらに1914年3月—4月の3回にわたつての實地調査の結果で、（同書 Vorwort 参照）まことに精力的なアルバイトというべきであろう。本稿に關係するものとしては、「附録」(Anhang) の I にみえる、43, Grab des Iltutmisch (s.106) および、44 Grab des Sultan Ghari (s.106—107) の 2 墓があるが、その敘述は概して簡單で、他の本文にみえる後代の墓の場合とくらべて、ほとんど本稿には役に立たない。（以下、この著書は、Wetzel と略稱する）。ところで、この Wetzel は、“die Inschriften am Mihrab” については、E.I.M. 1911—12の年度 Horovitz を見よと、誤解しているのである。
25. Muhammad Ashraf Husain, *A Record of All the Quranic and Non-Historical Epigraphs on the Protected Monuments in the Delhi Province.* (Memoirs of the Archaeological Survey of India, No.47), Calcutta, 1936, No.CVIII, Tomb

- of Sultān Ghāri, pp.89—90 (以下、この報告書については、Ashraf Husain と略稱する)
26. Minhāj al-Dīn Abū ‘Umar-i ‘Uḥmān, Ṭabaqāt-i Nāṣiri, ed. by W.N.Lees. Bibliotheca Indica series, R.A.S.B., Calcutta, 1864, p.180. (以下、この唯一のペルシア語刊本を Tab. Nas. (B.I.text) と略稱する) なお英譯本は、Elliot-Dowson の抄譯のほかに、次のものがあり關係部分は次のページである。Maulānā Minhājuddīn Abū-‘Umar-i-‘Uṣman, The Ṭabakāt-i-Nāṣiri, A General History of the Muhammadan Dynasties of Asia including Hindūstan from A.H. 194 [810 A. D.] to A.H. 658 [1260 A.D.]..., translated from Original Persian Manuscripts, by Major H.G.Raverty, London, 1881, pp.628—30. (なお、この英譯は、以下 Tab. Nas. (Reverty) と略稱する)
27. Tab. Nas. (B.I.text) p.181; (Raverty) p.630.
28. Futūhāt-i Firūz Shāhi (Pereiam text), ed. by Shaikh Abdur Rashid, Dept. of History, Muslim University of Aligarh, 1954. (以下 Fut. Fir. (Aligarh) と略稱), p.13. なおこの書のペルシア語テキストとしては、すでに1941年にも次の刊本がでてゐる。Futūhāt-i-Firūz Shāhi, ed. by N.B.Roy, J. R. A. S. B., Letters, Vol. VII, No.1, July, 1941 (以下, Fut. Fir. (Roy) と略稱), pp. 61—89. 問題の箇所はその p.81.
29. Fut. Fir. (Aligarh text), p.13; Fut. Fir. (Roy's text) p.81. 本稿では、前者を引用していた。しかし、後者のテキストでは、“Sulṭān Shams al-Dīn Iltmish”となつてゐる。
30. Fut. Fir. (Aligarh text), p.13; Fut. Fir. (Roy's text) p.81.
31. Fut. Fir. (Aligarh text), p.13; Fut. Fir. (Roy's text), p. 81. ただし、ここにあげたペルシア語原文は、上記兩テキストのなかから、次の如く選擇している。文章の語順に記す。
- (1) はじめの “wa hamchnīn” は Aligarh テキストで、Roy には、“wa” がない。
- (2) スルターンの名は、Roy の方をとつた。Aligarh テキストは Shams al-Duniyā wa al-Dīn Īltutmish としているが、その註2において、ベルベア語で、「ゼリーの建造物の碑文には、“Īltmish”あるいは“Īltutmish”と書かれている」けれども、正しい語は、“Īltutmish”であるとして、當時の詩をひとつ引用している。しかし本稿では、すでに述べたように、トルコ人 Hikmet Bayūr とそれを支持する P.Hardy の説を一應採用して、“Iltmish”としたので、この文章の方も、この點では Roy の

補 註

- テキストの方を採用した。また、スルターンの名のあとに“Rāzī Allāh ‘anah”とあ
るのは省略した。Aligarh 本でも註記して、他のテキストにはないといっている。
- (3) 3行目の“sahan”の前の“wa”は Roy にはないが、Aligarh 本に従って残し
た。
- (4) 同じ行の“nakardah būdand”は、Aligarh 本では“nah kardah būdand”と
なっている。
- (5) 4行目終りに近い“pushtibān”は、Aligarh 本では“pushtbān”となつていて
(ye)がない。これは大した違いでない。どちらでも同じ意味であろう。
32. H.M. Elliot-John Dowson, *The History of India, as told by its own Historians*
The Muhammadan Period, Vol. III, London, 1871. p.383 (以後、この英譯史料
大成を Elliot-Dowson と略稱する)。ただし、この部分の翻譯は Dowson のもの。
33. ただし、大部分の著者がこのように考えたのも、實は、この文章の叙述がのちに述べ
るように Sultān Ghāri の建物の状態にあてはまるということ考えた結果であるこ
とは疑いをいれないところである。
34. このことについては、のちにトゥグルク朝の後期の墓について考察する論文のなかで
ふれるであろう。
35. Fut Fir. (Aligarh text), p.13; Fut Fir, (Roy’s text) p.81.
36. Ahmad Khan (1904), III, pp.24—25. chhapar *khaṭ* とは、ヒンディー起源の言葉
で、“bedstead with a tester and curtains” (Platts の辭書による)を意味するとい
う。なお Garcin de Tassy のフランス語譯では、この個所以下は、“… fit placer un
cercueil de sandal et mettre à la coupole un escalier sculpté…”となつてい
る。(De Tassy, J. A., Oct-Nov, 1860, p.394)。この最後の部分の“un escalier
sculpté”という譯語はたいへんおかしい。
37. Carr Stephen, p.75.
38. Keene p.
39. Cunningham (Vol. I), pp.154—155, p.204; Cunningham (Vol. XX), p.145.
40. 本文中での私の要約は、きわめて重要な問題点についてむしろ簡単にまとめているか
ら、この註に、Cunningham の報告の本文の一部を引用しておく方がよいと考える。
- “It has struck me, therefore, that Firoz’s account may probably refer to
the tomb and other buildings of Sultān Ghāri. Now, we know that these
were the work of Iltitnish as recorded in the inscription over the gateway.
I would, therefore, identify the cloisters of the enclosed square with the
Madrasa. The tomb of Sultān Ghāri still possesses columns underground;

but, if I am right in supposing that there was originally an upper room with a domed roof supported on eight pillars, then these eight pillars would be those which Firoz restored, and the “hewn stone staircase” leading to the dome would be the flight of seven steps which now leads to the roof of the lower apartment, but which would then have been the floor of the domed room above. That this flight of steps was added by Firoz, I feel quite sure, as the steps consist alternately of white marble and red sandstone, a combination which Firoz employed in the upper storeys which he added to the Kutb Minār. The only part difficult to explain is the statement about the *court* of the tomb, which he made *curved*. Now the word *sahan* a “court”, means also “area”, and “square”, and the word *kaj* or “curved” means also “bent and angular”. I think it possible, therefore, that the area of the original tomb may have been square, and that when Firoz re-erected the fallen pillars he changed the shape to an angular octagon. This would have saved the four corner pillars of the square, which could then have been brought into use elsewhere.” (Cunningham (Vol. XX), pp.145—146)

41. H.C. Fanshawe, Delhi, Past and Present. London, 1902. p. 274, note 1. (以下この著書を單に Fanshawe と略稱する)。ただし、この同じ著者は、同書の “Sultan Ghari” (pp.284—285) の項では、なんら、この問題にはふれていない。
42. G.R. Hearn, The Seven Cities of Delhi, London, 1906 (以下、この著書を Hearn とのみ略稱する), pp.56—57, pp.97—98.
43. Hearn, pp.101. なお、彼は、Ruhn-ud-din Firoz と Muiz-ud-din Bahrām Shāh の墓について數行ふれているが、彼は Firoze Shāh がこれらの “three tombs” を補修したと述べ、“the domes over the two latter having fallen” としているのは、私が續稿で述べるように事實に反している。おそらく、彼の Sulṭān Ghārī についての記述内容全般からみて、彼自身はこの地に行かなかつたか、あるいは行つたとしてもよく觀察しなかつたのではないかと疑わしめる。
44. Delhi Monuments List, Vol. IV, No.105, pp.55—57; Vol. III, No.9, pp.20—23. ただし、後者の場合、その末尾に記された私が次に引用する文章は私には納得しかねる點がある。

“The tomb has been much repaired from time to time. Extensive repairs were carried out by Firoz shah, but it is difficult to reconcile his account

補 註

of them with this building”

Fīrūz Shāh が大がかりな補修をしたが、彼の記録と現在のクトゥブ地域の墓とは合わないというのは、Sultān Ghārī の建物の特徴に言及しなければ、ほとんど説得性がない。

45. Bashiruddin, Vol. III, pp.345—352.
46. J.A. Page, An Historical Memoir on the Qutb: Delhi. Memoir of the Archaeological Survey of India, No.22. Calcutta, 1926, p.13, note 1. ただし、これだけ興味あり、また歴史的に重要なことがらを、彼はただその註においてしか述べていないのである。おそらく、John Marshall の助言も得て、刊行の途中においてその推論をかためるに至りながらも、實證的な資料をととのえるひまがなかつたのであろう。
47. The Cambridge History of India, Vol. III, Turks & Afghans, Chap. XXIII, p.580. (以下、C.H.I. のこの章は、Marshall (C.H.I, III) と略稱する)。
48. Percy Brown, The Architecture of India, Islamic Period, Bombay, 1942, pp.13—15. 彼のこの著書は、Hindu & Buddhist Period と並ぶもので二部作の後篇であるが、まことに貴重かつ重寶な書物で、今のところ、インドの旅行者や建築愛好者にとつてこれほどまとまつた手頃な類書はない。ただし、遺跡や建造物の歴史的叙述の部分についてみると、かなり怪しい点がある。彼の中心的興味が、構造、様式の變遷や發展の問題にあるにせよ、正しい意味での發展をたどるためには、歴史的資料を扱う場合の態度にもう少し慎重で批判的なものがあつてよさそうだ。歴史的背景については、同書の叙述は、ところどころ修正される必要がある。とはいえ、きわめて獨特な考察や大膽な復原的推察が随所にうかがえて興味ぶかい概説書である。著者がすでに在世しないことは惜しい。
49. Henry Sharp (2nd ed. 1928年刊); Percival Spear (1943年刊) や、ごく最近の Encycropaedia of Islam の新版 “Delhi” の項の歴史と遺跡について記した Burton Page (1963年刊) なども、この問題についてはふれていない。
50. S.H. Hodivala, Studies in Indo-Muslim History, A. Critical Commentary on Elliot and Dowson’s History of India as told by its own Historians, Bombay, 1939. (この書の補篇が、Supplement, Vol. II として1957年に出版された。(以下、前著を Hodivala Vol. I, 後著を Vol. II. と略稱する), p.344. (III. 338, l.10 from foot).
51. Naqvi, p.6. 次にその翻譯をのせた部分を引用しておく

“It appears from the Futūhāt-i-Fīroz Shāhī that the mausoleum also

accomodated a college. Firoz Shāh writes, 'The *madrassa* (college) of Sultān Shamsuddīn Ītutmish had been destroyed. I rebuilt it and furnished it with sandalwood doors. The columns of the tomb, which had fallen down, I restored better than they had been before. When the tomb was built, its court (*sahan*) had not been plastered, but now I made it so. I provided the hewn stone stair case of the dome, and I re-erected the fallen piers (*pushti*) of the four towers.'⁽¹⁾ (1) *Futūḥāt-i-Firozshāhī*)

52. この點は黒柳恒男氏にとくにその例を教えてもらったことを記しておきたい。
53. 1922年刊の *Delhi Monuments List* では、この遺跡は *Malikpur Koh* 村の項目に入れられている。しかし、1955—61年の私の経験では、“*Sultan Ghāri*” というのは、遺跡名と同時に漠然と遺跡附近の地域名としても用いられている印象をつよくうけた。1947年刊行の *Naqvi* も「村民は全遺跡に對してその名を擴大適用している」といつている。(Naqvi, p.5)
54. Ahmad Khan (Orig. ed. 1895), Part I, pp.83—84.
55. Ahmad Khan (Rev. ed. 1904), Part III, pp.23—24.
56. *Enc. Isl.* (New series), II, p.260; Naqvi, p.5.
57. Carr Stephen (1876), p.70 : *vaulted crypt*; Cunningham (Vol. XX, p.1886), p.143 : *hole, cave*. (ただし、彼の場合は、ペルシア語で *ghôr*, ヒンディー語で *gār*, アラビア語でも *kār* が、すべてこの意味をもつものと述べている); Fanshawe (1902), p.285 : *cave*; Hean (1906), p.101 : *Cave King*; Horovitz (1914), p.24 : *vaulted crypt* (ただし、彼の場合は、のちに本文で私が説明するところの、Ibn Battūta が記しているデリー聖者 Kamāl al-Dīn 'Abd al-Allāh al-Ghāri についての例を引用している); Wetzel (1918), s.106 : *Sultans in der Höhle*, s.107 : *Schah im Loch*; *Delhi Monuments List* (1922), IV—105, pp.56—57 : *Cave*; Sharp (1928; 2nd ed.) p.36 : *Sultān of the Cave*; Marshall (1928), p.580 : *Sultan of the Cave*; Ashraf Husain (1928), p.89 : *vaulted crypt* (ただし、彼は、異説も載せているので、本文で、別にこれにはふれる——本文46ページ参照); P. Brown (1942), p.14 : *Sultan of the Cave*. Naqvi, Burton Page については前註で述べた。
58. J. D. Tremlett, *Notes on Old Delhi*, J. A. S. B., Vol. XXXIX, Part I, 1870, p.77. (以下、この論文は單に Tremlett と略稱する); Ahmad Khan (Orig. ed, 1895), opposit to p.74.
59. Ashraf Husain, p.89.
60. Naqvi, p.9.

補 註

61. Ibn Baṭṭūṭa, *The Reḥla of Ibn Baṭṭūṭa (India, Maldive Islands and Ceylon) Translation and Commentary*, by Mahdi Husain, Gaekwad's Oriental Series, No. CXXII, Oriental Institute, Baroda, 1953. p.31 (私は本稿および續稿では Ibn Baṭṭūṭa の翻譯には、この Mahdi Husain 譯を Defrémery-Sanguinetti の佛譯とあわせ用いる。以下、本書は、Mahdi Husain, *Reḥla* と略稱する)
- なお、最近パーキスターンで刊行されたところのウルドゥー譯では、この人物は *Kamāl al-Dīn 'Abd Allāh 'Ābī* となつている。これでは *ghār* に住むこととの關連が分らなくなつてしまつている。Safar Nāmah-i Ibn Baṭṭūṭah, mutarjmah Ratis Aḥmad Ja'afari, Karachi, 1961. p.521 (以下、このウルドゥー譯は、Ibn Baṭṭūṭa (Urdu) と略稱する。)
62. このふたつの遺跡は *Delhi Monuments List* では、それぞれ、Vol. III, No.137, Chillagah of Baba Shaikh Fariduddin Shakar Ganj (p.85); Vol. III, No.261, Kharbuze ka Gumbad (p.149) として載つている。
63. Horovitz (1914), p.24.
64. Tab. Nas. (B.I.), pp.180—181; Tab Nas. (Raverty), pp.628—630. ただし、Raverty 譯本では、見出しは、“Malik-us-Sa'id, Nāṣir-ud-Dīn, Maḥmūd Shāh, son of Sulṭān Shams-ud-Dīn I-yal-timish” と寫されている。
65. Raverty 譯は “the eldest son” としているが (p.628), B.I. テキストの原文では、“*pisar-i buzurgtar*” として、比較級であり、最上級を用いてはいない。(p.180) これでは最長子であつたかどうかは嚴密には分らない。また、Ahmad Khan も “*pisar kalān*” と譯しているが、これも正しくは “the eldest” ではなく “elder” の意味である。しかし、彼がたとえ嚴密にスルターンによる最初の男子ではなかつたとしても、繼承者と早くから考えられていたこと、また、*Ṭabaqāt-i Nāṣiri* の叙述を彼の子供との問題においてよく讀んでみると、一應、「長子」としてさしつかえないように思う。
66. Tab.Nas. (B.I), p.180; Tab.Nas. (Raverty), p.628. こうした形容詞を用いての賛辭は、宮廷史家の支配層の性格描寫にはつきものの評價である。こうした賛辭をそのまま事實であるかの如くに受けとつて評價している歴史家がまだインドには多い。
67. これについては、さしあたり、拙稿「奴隸王朝前期における奴隸貴族について」(東洋學報 XXXX, 4), の第五章 (pp.51—62), とくにその註 1 (p.55) を参照していただきたい。
68. Tab. Nas. (B.I), p.181; Tab. Nas. (Raverty), p.629.
69. Tab. Nas. (B.I), p.181; Tab. Nas. (Raverty), p.630.
70. Tab. Nas. (B.I), p.181; Tab. Nas. (Raverty), p.630.

71. Tab. Nas. (B.I), p.181; Tab. Nas. (Raverty), p.630.
72. Tab. Nas. (B.I), p.174; Tab. Nas. (Raverty), p.616.
73. Comparative Tables of Muhammadan and Christian Dates, compiled by W. Haig, London, 1932, pp. 15—16. 私は、ムスリム暦の西歴換算には、いつもこの書物を用いている。
74. Ahmad Khan (Rev. ed. 1904), Part III, p.24.
75. Tārikh-i Firishtah (私蔵、ベルシア語刊本, Nawal Kishaur 版, 刊年不詳) p.66 (以下, Firishtah と略稱)
76. Cunningham (Vol. XX), p.143.
77. Beglar (Vol. III), p.59. 彼はこれを単に傳聞としてでなく、明らかに自分で納得した上で記しているのである。彼は Firūz Shāh がこれらのふたつの墓に施した補修のことも知らずに。以上の説明につづけて, "...therefore it is evident that in Iltimish's time the Muhammadans knew how to build the true dome ..." と記しているのである。彼が上官の Cunningham に反論した報告はきわめておもしろい點をたしかに含んではいるが、このような考えを堂々と記す彼をかかえていた Cunningham 氏の苦勞も、私にはよくわかるような気がする。
78. Horovitz (E.I.M., 1911—12), p.24; Delhi Monuments List, Vol. IV, No.105, p.55, p.57.
79. Marshall (C.H.I., III), p.580. そのほかに、例えば、Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology. 2nd ed., 1929, Calcutta のなかの Appendix II. The Sultans of Delhi, and their contemporary monuments existing at Delhi with approximate dates, pp.76—77 (以下、この「カタログ」は Delhi Museum Catalogue と略稱する)。また、Ashraf Husain, pp.89—90 も、629 A.H. (1231—32 A.D.) 年建立を記しているが、これは私がさきに本文で記しておいたように (前述46ページ参照)、特殊な遺言の傳承について載せている。
80. Naqvi, pp.5—6.
81. Carr Stephen, p.70. なお後述57ページを参照。
82. 例えば、Tremlett (J.A.S.B., 1870) は、1229年建立としている (p.76)。Fانشawe (1902) は、没年を1228年としているが (Lakhnawati を現在の Dacca としている)、Hearn (1906) は、1229年死去 (p.101) とする。Percy Brown (1942) は、1231年に、Iltutmish がその子の遺體の上にこの建物を建てたと述べる (p.14)。もつとも最近の Enc. Isl. (1963年版) のなかで Burton Page が、この墓の建立を "629/1231" とのみしているのは、いささか安易に過ぎるようである (II, p.260)。

83. James Fergusson, *History of Indian and Eastern Architecture*, revised ed. by J. Burgess and R.P. Spiers, 2 vols, London, 1910, Vol. II, p.209.
84. ただし、すべてのヒンドゥーが墓を全く作らないということは、正確にはいえないようである。いわゆる「カースト=ヒンドゥー」に属せないとされる「アンタチャブル」の一部のものが、かえつて墓を作らなければならない状況におこまれていた地方もあるし（私自身、ハイデラーバード郊外で、この事実を自ら見聞して、その墓の寫眞をとつた経験がある。おそらく古い時代にもそうであつたろう。）また、パラモン¹のサニャーンで、聖者と仰がれていたものが埋葬される例を、インドではないが、ネパールのカトマンドゥー郊外で、私自身、1954年5月に見た。私ははじめムスリム聖者の埋葬式かと思つたのであるが、よく聞くと、坐葬のかたちで埋葬されたこの死者は、ヒンドゥーのサニャーンであると聞いて驚いたものである。ただし、ここでは Fergusson やその他の人びとは、ムスリム支配者の建造物について述べているのであるから、上に述べたようなヒンドゥーの例外的慣習の如きはもちろん問題にする必要はないのである。
85. Naqvi, p.4.
86. Cunningham (Vol.I), p.155, note 2. ただし、1885年刊行の報告書では、このシヴァ神殿説はくりかえされてはいない。そこでは Cunningham は、石切場 (quarry) についてのみ述べている。Cunningham (Vol. XX), p.144.
87. Naqvi, p.9. Naqvi は次のように書いている。‘Indeed so prominent are the Hindu features that Cunningham was led to believe “that the tomb of Sultan Ghari with its domes of overlapping courses, appears to be pre-Mohammedan.”’ しかし、これは Naqvi の A.S.I. レポートの誤讀であつて、この文章の本當の筆者は Cunningham ではなくて、かえつて彼に對立した意見を述べて、Quṭb Minār にもその他の建物にもヒンドゥー起源説を主張したところの、Beglar なのである (Beglar (Vol. IV), p.60)。Cunningham は、ヒンドゥーの資材については述べていても、建物の様式が “pre-Mohammedan” であるとは、かつて述べたことはないのである。
88. Beglar (Vol.IV), p.60.
89. Carr Stephen, p.70. なお、彼は、「厳格なムスリムの宗徒は、Altamsh が、偶像崇拜にさざげられていた室にその子を埋葬したかも知れないという考えを全く排斥している」とつけ加えている。なお、本稿に載せた寫眞 (挿圖6) でも、今のように、ヒンドゥー的な、いわゆる「ニッチ」が墓室西壁にあるが、これとて、ヒンドゥー説の決め手にはならない。

90. Habibullah, pp.362—363
91. ここに私がかかげたプランは、大體、Naqvi のプランを参考にして、全く簡略なものにしたものである。なお、この墓室については、Cunningham と Naqvi の報告にそれぞれプランがのつているが、この2圖が著しく異なつている。Cunningham (Vol. XX), Plate XXXII; Naqvi, Plate V, Plan. を参照。私自身は、かつて1954—55年の間に數回この墓を訪れたが、當時は、全くこうもりの巢で、内部には全然入れなかつた。1956年最初のインド滞在を終える直前に訪れたときには、煙を用いてこうもりを退治していた折で、このときも運悪く入ることができなかつた。従つて、はじめてこの墓室に降りることができたのは1959年末であつて、そのときはすつかりきれいになつて一匹のこうもりもいなかつた。Cunningham のプランは現状とは全く異つている。とくに、南面から階段がすぐさまつすぐに墓室の床に下りてゐるのは現状と異なり、現状は、Naqvi のプランの如く、一端右に折れてまた左に下つて床に達するのである。Cunningham のプランがらさに現状とあわないのは、墓の位置と數と大きさであり、階段下、つまり南側のもつとも小さい墓は記されていないし、西側の最大の墓が西壁に密着しすぎている。もつとも、Cunningham の時代、つまり1882—83年のときには、彼のプランのように階段があり、のちにそれが改造されたとも考えることができるが、これは、おそらくは Cunningham 報告の掲載プランの誤記であろう。それが證據には、Cunningham 自身は、墓室内の墓の數を本文中では四つとはつきり數えているのであり (p143, なお後註93を参照) ここに私がかかげたのは、私の經驗を考えつつ、主として Naqvi のプランによつたものである。
92. ただし、Ahmad Khan は、その初稿本では、地下に降りる南側階段降り口について次のようにいう。「この入口 (darwāzah) は、もとは閉じられていた。…Tughluq Shāh の時代 (Muḥammad bin Tughluq のことか——筆者註) になつて、この入口は開けられ、人びとはそのなかに入り、(墓室を) 訪ねるようになったのである。……」しかし、Ahmad Khan は、この説明について出典をおげていないので、その根據はわからない。
93. Cunningham (Vol. XX), p.143. ここでは、彼はちやんと墓を四つ數えているがさきに註91で記したとおり、彼の報告の巻末のプラン (plate XXXIII) では、墓は三つしか記されていないのである。
94. Tremlett, p.76.
95. Carr Stepham, p.73.
96. Delhi Monuments List, Vol. IV, No.105, p.56; Ashraf Husain, No.CVIII, p.90.

97. Naqvi, p.8.
98. 荒 松雄,「奴隸王朝前期における奴隸貴族について」, 東洋學報, Vol.40, No.4, 1958年, 24—78頁。「奴隸王朝の君主權と貴族勢力」, 東洋文化研究所紀要, 第11冊, 1956年11月, 1—34頁。「デリー・サルタナット初期におけるスルターンの繼承」, 東洋文化研究所紀要, 第8冊, 1956年3月, 277—309頁。
- なお拙稿の通史については, 荒 松雄,「ムスリム支配體制とインド社會」, 築摩書房版「世界の歴史」第13卷所收, 1961年11月, 35—74ページ。「ムスリム王權の支配とインド社會」, 山本達郎編「インド史」, 1960年11月, 81—126ページ。以上の拙稿のうちの關係箇所を参照されたい。
99. これについては, Horovitz's List (E. I. M., 1909—10), pp.69—70; J. Horovitz, The inscriptions of Muḥammad Ibn Sām, Qutbuddin Aibeg and Iltutmish, (E. I. M., 1911—12), Calcutta, 1914, pp.21—34.
100. これらの非歴史碑文は, コラーンの章句その他の宗教的内容をもつものであり, 書體はナスフ, トゥグラ, およびデリーではほとんど奴隸王朝初期にしか見出されないクラーフィー體である。くわしくは, Ashraf Husain, No. CXIX, Tomb of Altamsh, pp.114—119. を参照のこと。
101. Tab. Nas. (B. I.), p. 269. なお, 英文私譯には, Tab. Nas. (Raverty), p. 780 を参照した。
102. Walter Ewer, An account of the Inscription on the Cootub Minar, and on the Ruins in its Vicinity. Asiatick Researches, Vol. XIV, 1822, p. 483.
103. Ahmad Khan (Orig. ed.), Part I, p. 66.
104. Ahmad Khan (Rev. ed.), Part III, p. 24.
105. H. G. Keene, Delhi, 1873, Agra, p. 54 (以下, 本書は Keene と略稱する)
106. H. H. Cole, Delhi: Preservation of National Monuments, India, 1884, p. 1.
107. Fanshawe, p. 257.
108. Wetzel, s. 106.
109. Cunningham (Vol. III), p. 204. ただし, 彼は, 「Emperor Altamsh は, A. H. 633すなわち A. D. 1235年に死んだ」と記しているが, この西曆換算年は1年だけ早すぎる。
110. C. J. Campbell, Notes on the History and Topography of the Ancient Cities of Delhi, J. A. S. B., Vol. XXXV, Part I, 1866, pp. 202—203, (以下, Campbell と略稱する)
111. Carr Stephen, p. 75.

112. Bashiruddin, Vol III, p.233.
113. Delhi Monuments List, Vol. III, No.9, p.20.
114. Delhi Museum Catalogue, Rev. ed. 1926, p.76, note.
115. Ashraf Husain, No.CXIX, p.114; T.G.P. Spear, Delhi, its Monuments and History, Oxford Univ. Press, 1943. Reprinted 1946, p.44.
116. Marshall (C.H.I., III), p.580.
117. Page, p.13, note 1.
118. 例えば, Ahmad Khan からしてそうである (Ahmad Khan (Rev. ed.), Part III, p.24)。A. Cunningham でさえも然り (Vol. III), p.204. Carr Stephen (p.73), H.H. Cole (p.1) もそうである。
 20世紀に入つてからは, G.H. Hearn に至つては, 98ページでは, 1236年としながら, 同じ書物の176ページでは1235年としている不注意さ加減である。Delhi Monuments List では633 A.H. 1235年建立としているが, Bashiruddin や Sharp も1235年としている。前者の如きは, “20th of Sha’abān, 633 A.H.” としておきながらも, 1235年としているのは不注意というほかはない。このイスラーム暦の年月であつたなら, 西歴では, 1236年4月になるはずである。また, 最新の Encyclopaedia of Islam の新版の第2巻(1963)で, Burton Page は “Tomb of Iltutmish c.632/1235?” としているのは没年か建立年かわらないが, とにかくこれも不明瞭である。Percy Brown が “erected sometime before 1235” としているのは, これも生前建立説を採用したことを述べていないだけに, 正当な年代考證を行なつた結果とはいえない。しかも見開きで前のページの, いろいろの建物のスタインチを並べた圖版のなかでは “(1) Tomb of Iltutmish, Delhi, Dec. 1236” と説明をつけているのは, 不注意といわんよりはいささか滑稽でさえある (p.15)。そのほか, ここには例をあげるのをひかえるが, 歴史學者の叙述も随分とあいまい不正確なものである。
119. Cunningham (Vol. III), p.204.
120. Keene, p.54; Beglar, p.60; Carr Stephen, p.75.
121. Fanshawe, p.269,
122. Hearn, p.57, pp.97—98. G.R. Hearn は, その著書において歴史的資料の扱い方がきわめて粗雑なところが目立つが, その指摘する問題點や, 彼の考え方は, 他の著者にくらべて, きわめて獨創的で示唆に富んでいるところがある。
123. Wetzel, s.106; Delhi Monuments List, Vol. III, No.9, p.20.
124. Bashiruddin, Vol.III, p.234. ここで彼があげている書物は, もちろん本稿でしばしば引用したFutūḥāt-i Firūz Shāhī のことである。Bashiruddin の説くところは,

補 註

- Futūhāt の記述から、天井を補修し、また墓の四隅に burj があつたことはわかるが、現在では、南面の壁の側の残つた部分以外に何も無い、というのである。これは Carr Stephen の説くところの一部受けうりにすぎない。
125. Sharp, p.43
126. Page, p.13, and note 3.
127. A. B. M. Habibullah, *The Foundation of Muslim Rule in India*, Allahabad, Rev. ed. 1961, p.363; *Enc. Isl.*, Vol. II, p.260.
128. Percy Brown, p.15.
129. Spear, p.45 (Additional note for Chap.12. *The Great Mosque*.)
130. Bashiruddin, Vol. III, p.234.
131. *Delhi Monuments List*, Vol. III, No.48, p.42. Zafar Hasan は、この墓の大きさを 1'9"×1'0" by 10" high と測定している。
132. *Delhi Monuments List*, Vol. III, No.71, pp.54—55 Zafar Hasan は、「上にニームの木が生えている方が 'Alā' al-Dīn の墓といわれている」といつているが、現在はその木はないので分らない。本稿の挿圖11には、ふたつの墓石を載せておいた。
133. *Tab. Nas.* (B.I.), p.140; *Tab. Nas.* (Raverty), p.520.
134. Yaḥyā bin Aḥmad, *Tārīkh-i Mubārak Shāhi*, Persian text, ed. by M. Hidayat Hosain, *Bibliotheca Indica Series*, Calcutta, 1931, p.15; *The Tārīkh-i Mubārakshāhi*, tr. by K. K. Basu, *Gaekwad Oriental Series*, Baroda, 1932, p.16. 以下、このペルシア語刊本と英譯とをそれぞれ、*Tar. Mub.* (B.I.); *Tar. Mub.* (Basu) と略稱する。
135. 'Abd al-Qādir bin Mulūk *Shah Badāūni*, *Muntakhab al-Tawārikh*, Persian text ed. by M. Aḥmad 'Alī, Vol. I, *Bibliotheca Indica Series*, Calcutta, 1868, p.56; これには英譯本が同じ B.I. Series に出ている。 *Muntakhabu-t-Tawārikh*, tr. by G. Ranking, Vol. I, B. I. Series, Calcutta, 1895, この關係箇所は、p.79参照。(このペルシア語刊本、英譯は、以下、*Mun. Taw.* (B.I.); *Mun. Taw.* (Ranking) と略稱する。)
136. *Fut. Fir.* (Aligarh), p.12; *Fut. Fir.* (Roy), p.80. なお、英譯に関しては、*Elliot-Dowson*, Vol. III, p.383 を参照。
137. このスルターンの死については、*Tab. Nas.* (B.I.), p.12; *Tab. Nas.* (Raverty), pp.484—485. その遺體のガズニー運搬到着については、(B.I.), pp.128—129; (Raverty), pp.492—493. に述べられている。“marqad” とはふつう “bed, grave, tomb” の意味であるが、ここでは、遺體をいれた棺であろう。

138. Fanshawe, p. 273.

139. Hodivala, Vol. II, p. 140. なお、この Madrasah-i Mu'izzī の建物については、私も、いずれ、「奴隸王朝時代の宮廷建造物について」という題で豫定している別稿で述べるはずである。

140. Khaliq Ahmad は、このことについて、その著書や論文でしばしば述べているが、ここではとくにそれにふれた次の論文と、最近の著書とをあげておく。Khaliq Ahmad Nizami, *Iltutmish, the Mystic*. (Islamic Culture, April, 1946, pp. 165—180; *Some Aspect of Religion and Politics in India during the 13th Century*, Aligarh, 1961.

[附記] 本稿や私の續稿で用いた文献や資料のうちには、インド各地での寫眞複寫によつてはじめて利用し得たものが相當ある。その多くは、*Archaeological Survey of India, Government of India* の好意により複寫利用を許可されたものである。その他の文書館、圖書館に對するとともに、この第1論文を筆するに當つて、謝意を表する。